

目次

愛馬の召集……………	平野 八重子	1	戦後の思い出……………	菊池 保	36
学童疎開の思い出……………	岡野 平八	3	疎開先での空襲……………	木村 都紀子	38
戦時下の記憶……………	落合 肇	6	八高線多摩川鉄橋列車事故に遭遇して		
戦争中の想い出……………	岩崎 信義	8	……………	高橋 英子	40
陸軍中央気象部亜欧係……………	中原 正春	10	私の戦中戦後の体験記……………	篠原 一夫	43
炎に包まれた高円寺……………	中原 正春	12	健康優良児童表彰と平出大佐の手紙		
あの叫声……………	鈴木 文 ^{ふみ}	14	……………	浅海 貢	45
各務ヶ原飛行連隊……………	伊藤 平八朗	16	私の戦争体験記（朝鮮での生活）		
三月十日東京大空襲……………	金子 豊子	19	……………	北村 宜司	48
人間魚雷回天の思い出……………	内野 忠司	22	私の戦争体験記（引き揚げ後の暮らし）		
昭和二十年頃の私……………	伊藤 博	24	……………	北村 宜司	51
辛かった学童疎開……………	及川 雅弘	27	昭和二十年東京大空襲……………	町田 秀三	53
戦争で山林（雑木林）が飛行場に化した			私の思い出……………	横田 照夫	55
……………	内野 忠司	30	戦中・戦後体験記……………	井口 法雄	58
B29襲来……………	木下 今子	33	昭和二十年四月十三日の東京大空襲		
模型キットを求める為に……………	市川 昌雄	34	……………	布目 雅之	59

集団疎開の記	橋本 康司	61	立川上空のB29体当たり見聞録	豊泉 喜一	92
一九四一年十二月八日	野村 祥子	63	技研と高松町の思い出	小川 輝一	94
言論の自由がない時代	矢船 けい子	65	私の太平洋戦争体験記	吉澤 源悟	96
植民地満州のこと	矢船 けい子	67	立川工作所ものがたり	野澤 勝治	99
開拓団の人と女中	矢船 けい子	69	小さなお母さん	木村 英子	101
東京大空襲体験記	石川 道子	72	十四歳の戦争	米澤 廣子	104
ある老人の戦争体験	上田 宏	73	戦争中の学童疎開の話	伊藤 暢子 ちようこ	106
始めてはならない戦争	小高 辰雄	74	太平洋戦争勃発から終戦まで	小林マサ	108
湯の花トンネルの悲劇	堤 規子	77	わたしの「朝鮮」	田中 幹子	111
十四歳で体験した空襲の怖さ			疎開・転校・空襲	杉田 昇	113
命令は至上のもの	菅沼 寛	78	原爆	平野 八重子	116
軍隊は運隊	原田 亀太郎	81	間もなく八月十五日に七十一回目の終戦記念		
技研の思い出	北島 泰子	86	日を迎えます	花井 富士男	118
使わなかった手榴弾	中嶋 政代	87	あの頃のこと	福田 禮子	120
砂川空襲の記録	豊泉 喜一	89			

八月十五日	馬場 富己子	123
戦後七十一年生きのこったものに		
馬場 富己子	123	
幼い日の空襲体験	鈴木 サチ子	125
カラフト脱出	小林 照子	126
戦争は終わった	磯部 タマ子	129
激戦の地より	清水 尅子	131
七十年前その時母は	清水 尅子	133
脳裏に宿る空襲の恐怖	鈴木 功	135
戦中戦後の農業	鈴木 藤太郎	138
田舎少年の八月十五日	布施 孝	140
敗戦忌	布施 孝	143
集団疎開の児童達	高橋 英子 ^{よう}	145

私の戦争体験	山口 昌男	146
戦闘機の主翼と開かず落ちるパラシュート		
(他三編)	古川 嘉一	148
立川での生活、そして戦争へ		
中塩 成子	150	
平和を祈って	中塩 成子	152
私の戦争体験記	高崎 譲治	155
終戦そしてシベリヤ抑留三年三か月		
宮岡福太郎	158	
終戦そしてシベリヤ抑留三年三か月その2		
宮岡福太郎	161	
立川市平和都市宣言		164

愛馬の召集

富士見町 平野 八重子

(九十歳)

太平洋戦争になる三年前ということは昭和十三年頃。日ましに中国大陆での戦争は激しくなり、馬にも召集令状がくるようになり、二頭いた我が家の一頭にも令状がきた。

竜光号りゅうこうごうといつて雄のサラブレッドの血統書つきの名馬。広島県で四頭の中の一頭、赤茶色で鼻筋と足首が真白で凛々しくスマートだった。よその人がよく見に来たので、よく覚えていた。

賢い馬で、父が用があつて出かけると、帰る頃をよく知っていて、四〇五十分前になると鳴きだす。時計で測ったように。

一年に一〇二回草競馬があり、いつも優勝していた。

金杯や賞金、記念品をもらってくるのが楽しみで、その日は家族、親戚が連れそつてお弁当を作り出かけた。夕食にはご馳走を作り喜び合ったものだ。幸せを運んでくれていたのに、竜光号は家族の一員。突然の召集令状に驚きと悲しみははかりしれないものがあつた。

夏の暑い日だった。父がどこまで連れて行くのかは知らなかったけれど、朝早く出かけて行った。大好きなエンジンを持たせ、近所の人も見送ってくれて、泣きながら見えなくなるまで無事を祈った。

夜遅く帰ってきた父は、「広島の一連隊まで連れて行った。決まっていたらしく若い将校が出迎えに来ていて、『今日からは自分が寝食を共にします。大切にしますから心配しないで下さい。家族の皆さんによろしく。』」と言ってくれた。手綱をその将校

に渡すとき、たまらなかったよ。あいつは分っていたのだろうか。悲しそうに遠吠えで鳴き叫んでいたよ。後ろ髪を引かれる思いで……」と言って、暑さの中を夜おそくまでかかったせい、気が緩んだためか、腰が抜けたように土間にしやがみ込み泣き崩れるのだった。

いなくなった竜光号の厩^{うまや}の一角に小さな棚を作り、毎朝お水とさつま芋^{くず}の屑、ニンジンなどを供えた。人間の陰膳と一緒に。

一年も過ぎた頃だっただろうか。役場から「竜光号が戦死した」という知らせが来た。

家族、親戚、近所の人などが集まり、思い出話をしながらささやかなお弔いをした。父は独り言のようになんか「もう今日から、お前に水も食べ物もいらなくなつたなあ」と言いながら、そつと燃やしていたの

が忘れられない。

それから二年も過ぎた頃だったと思う。田植えも終りほっと一息ついた頃だった。一人の軍人さんが我が家をたずねてきた。父の顔を見るなり、「ああ、あなたでした。自分がお宅の馬を預らせてもらつた者です。あの時の自分を覚えていて下さいましたか。」と言って、父の手を固く握りしめたまま、しばらく言葉がつづかなかった。

「申し訳ありません。中支の最北端で爆撃にあい、多くの戦友たちは犠牲になりましたが、自分は竜光号のおかげで命びろいしました。身代りになつてくれたのです。そのおかげで今日があります。胸の辺りに当って。

一時帰国することができたので、どんなことがあつてもと思ひ、たてがみを届けにまいりました。」と

たてがみを仏前に供え大泣き。

在りし日のできごとを話しながら、みんなで一夜を過し、翌日、家の山の小高いところに松の木が一本立っていて、それが何年か前に雷にあたって枯木になっているその根元にたてがみを埋め、塚を作って冥福を祈った。いうまでもなく、その軍人さんも参列してくれた。

馬も家族の一員。しかし戦死と言われ、失った悲しみも憤りも口には出せない時代、遠い所からたてがみを届けに来てくれた方に心からの感謝の念に耐えなかった。

きっと竜光号は大切にしてもらっていたのだろう。

学童疎開の思い出

一番町 岡野平八

(八十一歳)

昭和九年に東京府世田谷区に生れ、太平洋戦争勃発時、小学一年生であつた私に当時の状況を理解するのは難しいのですが、戦前の我が家は、父が剣道師範(大学四校、陸軍の学校四校、他)で軍国日本なぎなたの中、全国的に男子生徒は柔・剣道、女子は薙刀の教育を義務とされていた時代ですから、今思えば時流に乗った家庭環境にあつたのは間違いない、また我が家は十人兄弟(男七人・女三人)と剣道の弟子書生五・六人が二階に起居しており、他に女中・子守り(戦前の呼び名)が三人程、父母と合わせて二十人位が常に起居しており、日常生活が誠に賑やかな環境で子供にとっては楽しい日々を過しております。

ました。

戦争が厳しくなった昭和十九年、小学四年生の夏、二才年上の兄と父の郷里の栃木県足利市に縁故疎開し、翌二十年二月、兄の中学進学のため帰京した直後に、東京大空襲に遭遇しました。

世田谷は大規模な被災こそなかったのですが、空が真っ黒になったようなB29の大編隊の襲来を庭の防空壕から家族で見上げる中、近くの駒沢の高射砲陣地から打ち上げられる高射砲弾がB29には全く届かず、次々と飛来し、爆弾を投下する敵機を啞然^{あぜん}として見上げるばかりでした。

この直後の三月下旬に、今度は二才年下の弟を連れて小学校挙げての学童疎開として新潟県に参りました。町の駅に降り立った時、駅前広場が駅舎より高い雪の山になっているのには、まずびっくりし

ました。地元の小学校に通い始めてから五月頃まで雪が融^とけず、手指が霜焼けでジクジクに崩れてしまい、泣きたくなる程痛くて、毎日下校時にガ―ゼ取替えのために通院しました。

また学校では、地元の体の大きい餓鬼^{がき}大将からなぜか私^{いじ}だけが苛^{ゆきど}められ、雪融けで泥田のようになった校庭に組み敷かれ、首を絞められましたが、生来の負けん気だった私は、先生が止めにくるまで相手の腕に噛みついて離しませんでした。その後は苛められることはなくなりました。

一方、食糧事情は地方といえども厳しく、いつもお腹はペコペコでした。春になってからは、山でスキャン^{やなば}ポやさつきなどの花を採って食べたり、川の梁場で小魚をもらって食べたりしました。

ある時、東京から母と姉が面会に来た折、宿舎の

玄関で我々兄弟の姿を見た瞬間、余りの変り様に

「アラー」と言つて、絶句し涙をこぼしたのを憶えています。当時小学五年生で、二十キロ程で顔色も悪く皸^{しわ}だらけだったのです。

その夜、母が東京から持つて来た塩豆を弟と夢中で食べたため、二人とも一晩中下痢をして苦しんだのを憶えています。

八月になつてどこからか、「戦争がお休みになつた（終戦・休戦のこと?）」という噂話を聞き、「東京に帰れる。家族の皆に逢える」という思いで嬉^{うれ}しく、友達と一緒に喜んだものでした。帰京は十一月になりました。

戦後二年目に中学校に入学。東急玉川線で渋谷へ、地下鉄で赤坂見附までの途上は、見渡す限りの焼野原でした。

ただ、赤坂附近の下校時に、いつも街のスピーカー

ー（空襲警報用）から「ビギン・ザ・ビギン」「スターダスト」などのジャズ曲が流れていたのは、米占領軍の陽気な習慣か、占領政策の一環なのか分かりませんが、妙に子供の耳に残っており、お陰で以来すっかりジャズ気狂いになってしまいました。

戦時下の私の小学生生活を振り返って見ますと、時勢の流れの中、学童疎開を中心とした暗く辛い時代であつたと思うと同時に、引き続き戦争直後の荒廃、特に食糧難の続く中ではありましたが、大きな時代の変化を子供心にも如実に感じ、明るい未来を予感したものでした。

戦時下の記憶

一番町 落合 肇

(八十六歳)

この話は確か昭和二十年七月二十七日のことと記憶している。当時、旧制中学を四年で繰上げ卒業した私は十六歳の少年だった。

名古屋市郊外で電話技術の研修を受けていたが、その日は休日となり、三重県津市の実家へ帰省することとし、東海道線の大高駅から乗車した。切符は長距離のため亀山駅までしか売ってくれなかったが、まあなんとかなるだろうと高をくくっていたが、熱田駅付近で空襲警報が鳴り響き、乗客全員が降りて車両の下に避難した。

途中、何度も停車し遅れに遅れた列車は、愛知・三重県境にさしかかったが、木曽三川の鉄橋のひとつ

つが爆破されており、乗客は全員国道一号線を、炎暑の中徒歩で渡ることとなったのである。

ようや

漸くたどりついた桑名の街は、既に空襲で全焼しており、焼け跡の整理中だった。かつての中学校の同級生S君の顔があった。

「よう、元気か」という彼の声に、私は一瞬絶句した。朝から何も食べずにいた私に、彼はけなしの握り飯を差し出した。その頃、寮生活では、汁だらけの雑炊ぞうすい一杯か、じゃがいも二、三個の食事だったから、一か月近く白い飯など食べた記憶がない。

「済まん、済まん」私は人目も構わずかぶりつくと、汽車の時間が気になり、あいさつもそこそこに桑名駅へ向った。関西線に乗車したものの列車のダイヤは乱れに乱れて、亀山駅に着いたのは夕方だった。

そして私の家に近い参宮線の阿漕駅に到着したが、三日前受けた爆撃の被害で壊れており、駅員の姿もなかった。無賃乗り越しのおとがめもなしだった。駅前の旅館の姿も消え失せ無人であった。

恐る恐る帰ったわが家は母屋の屋根がなく、母たちは離れ座敷で生活していたが、小学生の弟がどこで聞いたのか、「今晚、大空襲があるから早く逃げよう」と言う。弟は重要書類をもち、祖母は二歳の末弟を背負って逃げることにした。

その頃、父は上海の航空隊の軍属として勤務中で二年前から不在だった。母は前回の爆撃で怪我をしており、私が付き添った。家を出ると間もなく、超低空でB29が来襲。月の明かりで大きな機体ははっきりと見えた。

何機かが焼夷弾をばらまき各所で火の手が上つ

た。わが家から四、五分のところに丘があるが、そこまで逃げた私の目に津市の街は火の海だった。逃げまどう人にはばまれ家族はばらになり、私と母は近くの農業用溜池ためいけに身を沈めていた。火が迫ってきて大丈夫だと思ったからで、他にも十人近くの人がいた。弟は韓国人に助けられ一夜を明かしたと言い、祖母は遠くの川原へ逃げたらしい。

夏の朝は早く明け、やっとの思いで帰宅すると、町全体は焼け野原だったが、家族一同の無事を喜び合った。間もなく遠い伊賀の方から知人が大八車で救援に来てくれた。防空壕に入っていた衣類や食器などを積み、予定していた疎開地の山村へと向った。悪夢の一夜は明けて、新しい生活が始まろうとしていたのである。

戦争中の想い出

幸町 岩崎 信義

(八十二歳)

終戦は中学一年生の夏でした。幼稚園の頃から日中戦争は始まっており、三年生の時には太平洋戦争が始まりました。その頃のアジア各国は欧米各国の支配と搾取さくしゆのため、その悲惨さは筆舌に尽くせぬものがあり、これを救済するのは日本が東洋の平和を確立するしかない、といった国内世論が、日本国内を沸騰ふっとうさせていました。

世界を知らない私も小学生にとっては、一方的に入ってくるこれらのニュースや映画は、世界平和のために命ある限り日本は戦わねばならない、と思わせるに十分でした。

勝っていると思っていた戦争は、知らないうちに

劣勢に立たされていきました。小学六年の時には、山梨県の薩摩芋と玉蜀黍とうもろこしを常食としている、山峡やまかいの谷間のような寒村に疎開しました。中学一年になると、ほとんど授業はなくなり、やることは山奥の開墾かいこんや食用野草の採集でした。疎開児の私どもは、当時開発されだした松根油しょうこんゆの工場へ動員されることになりました。

松根油とは、松脂まつやにで半透明になっている古い松の根を、農村に残っていた老人が大勢で掘り起し、河原に作られた工場に運び、そこで私達と上官かまが、これを薪位たきぎの大きさに裁断し、大きな窯に詰めて乾留かんりゆうし、出てくる煙を竹の管を通しながら川の水で冷やす

と、ちよろちよろと、松根油と称するものがでてくるのでした。琥珀色こはくの揮発臭きはつしゅうのある液体でした。

一週間でドラム缶一缶位もとれたでしょうか？

結局オクタン価が低く馬力が出ず、練習機用にわずかに使われたということでした。

最も驚いたことは、私たちの上司は私たちが最もあこがれていた予科練生だったことです。彼らには、練習する飛行機も燃料もなかったのです。

終戦後、ぼちぼちと先生達も復員してこられて勉強もはじまりましたが、教科書は新聞紙のような紙ピラでした。進学の学校もなく地元の農業学校に進学しましたが、高等学校併設中学校農業科ということでした。

父も復職し一家は名古屋に移りましたが、進学する高校がほとんど募集を終わっており、やつと工業高校の機械科に欠員があって進学することができました。同級生たちは戦争中、学徒動員先で空襲の

時、橋の下へ避難し、一トン爆弾の直撃のため約千名の同僚が亡くなったそうです。

名古屋港外の校舎は神戸製鋼所の焼け跡で、授業の半分は実習という事で焼け跡を掘り起して、焼けた工作機械の再生修理をすることでした。

進学は、大学の夜学へ行き、ミシン会社で働き、卒業後は音響研究の会社へ就職しました。私が社会へ出て一番役に立ったのは、この戦争中の苦悩と頑張りがったと思います。

平和と、経済の、先の見えぬ混沌こんとんの中に光を見つけることが、私の生涯を賭かけた祈りです。

陸軍中央氣象部亜欧係

幸町 中原 正春

(九十歳)

私は昭和十八年、旧制中学五年を三か月の繰り上げで卒業した。当時の日本男子は満二十才になれば日本陸軍又は海軍に入隊し、お国のために戦死するのが当たり前で、またそのような教育を受けておりました。私も滅私奉公・忠君報国の覚悟は出来ていたが、せめて二十五才までは生きていたいものだと考えていた。

卒業を間近に控え、大学に進学するか、軍需会社に就職するか、公務員試験を受けるか大変悩んだ。召集令状の来ない内に、日本陸軍の数ある兵科の中で一番戦死しにくい部隊はなかと探し、陸軍氣象兵になる決心をした。配属将校に推薦状をもらい、

受験すると合格した。全国から二十名程、高等教育機関卒業者が候補生として採用された。

入隊すると同時に氣象学の教育を受けた。教育中は高円寺の自宅から通えた。天気予報は観測・予報・通信（モールス信号）の三種があり、朝八時から午後四時までみっちり仕込まれた。教育課程が終わると予報課に配属され、日本各地の天気図作りに尽力していた。

ある日突然、異動を命じられた。そこは「予報課あおう亜欧係」。それまで部内にそのような係があることは全く知らなかった。業務は、氣象予報とは関係の無い、ソ連主要地の天気予報の暗号文を解読する極秘任務であった。その日から営内居住になり、外部との接触及び外出も禁止となる特務機関であったが、営内の待遇は良かった。

今度は一から暗号解読の勉強を始めた。その難しさに連日苦しんだが、上官から「人間の頭で組み立てた暗号を、人間が解けないことは絶対にないはずだ。頑張れ。」と叱咤された。

ソ連では、六時間おきの観測で一日四回、各地の天気予報をモールス信号で自国各地へ発信していた。暗号を通して、寒いというイメージの強いソ連でも、中央アジアに位置するタシケント市は一年中暖かく、穀物の大産地であることも知った。

ソ連の暗号の組み立て方は一から九までの数を羅列したものであった。担当はおよそ十五名。皆が甲種幹部候補生出身者「座金」ざがね組で、東京帝国大学数学の教授をはじめ、優秀な人材ばかりで士気も高かった。通信担当が傍受したソ連のモールス信号を、電話帳ほどの厚さの乱数表を駆使して解読してい

った。

ヤルタ会談等の極秘暗号も傍受できていたので、日本の戦局が悪いことは早くから分かっていた。我々解読者同士が内々で話し合っていたことだが、日本軍が暗号をやめて日本全国の天気を「生文」なまぶんで発信できれば日本の勝ち、アメリカをはじめ連合軍が生文を発信すれば連合軍の勝ちであると。

昭和二十年七月下旬の夜中、当番だった私は「生文」を傍受した。その頃は空襲を避けて、馬橋から浜田山駅の近くにあった三井のグラウンドを接收して、亜欧係は移転していた。電波を傍受されていたからか、浜田山移転後も米軍の空襲は続き、裏にあった女学校は一夜で焼けてしまった。

「生文」はソ連イルクーツクにあった航空隊が発信した気象情報であった。驚いた私は部屋で就寝し

ていた上司の岩崎少尉に報告した。岩崎少尉も部隊長に報告し、部隊長はすぐに参謀本部に駆け付けた。

参謀本部からは、「今までの重要書類は全て焼却処分するように」とだけ命令があり、朝鮮の人が五十人位で中央気象部内の敷地に掘った防空壕に、書類などを全て入れて焼却し埋めてしまった。

「生文」を傍受してから暫くたつても戦争は終わらず、広島と長崎に原爆が投下された。我々は、ソ連が日ソ中立条約を破って満州に攻め入ることも傍受していたが、戦争は終わらず、多くの方が犠牲となった。

馬橋の陸軍中央気象部には「気象神社」があった。空襲で焼けてしまったが、戦後、高円寺南の氷川神社に移された。六月一日が例大祭である。例大祭は陸軍中央気象部の同窓会のようなもので、私は今で

も毎年例大祭には参拝している。例大祭に集まる当時の仲間は、私ともう一人だけとなってしまった。

炎に包まれた高円寺

幸町 中原 正春

(九十歳)

高円寺に住んでいた私は、昭和十八年から馬橋、空襲で焼失したためその後浜田山に移転した陸軍中央気象部に勤務していた。陸軍中央気象部では、ソ連の暗号解読という極秘任務に就いたため、外部との接触は一切遮断された隔離生活を送っていた。

東京では米軍による大規模な空襲が続いていたが、昭和二十年五月二十五日の空襲もB29の大編隊による大規模空襲であった。実家がある高円寺一帯も大きな被害があったと上官から伝えられた。両

親は世田谷に避難していたので安心だったが、上官からは特別に外出許可証をもらい、実家の様子を徒歩で見に行った。当時の中央線は高架ではなく、駅の踏切を渡ったところで年配の巡査に呼び止められ、それ以上行ったら危ないから止めた方が良いでしょう、と言われた。踏切の先は火の粉が舞い、辺り一面炎が燃え盛っていた。

巡査からは駅に人がいないか一緒に見てくれなかと頼まれ、私は下りホーム側から、巡査は上りから、構内に負傷者が逃げ遅れて残されていないか見回った。一巡したが誰もいなかった。合流した巡査が「危ないから急いで離れましょう」と言った。急いで駅から離れて後ろを振り返ったその瞬間、一気に駅舎やホームから火柱が立ち、一瞬で全てが倒壊した。

私はこの時初めて、火災とはじわじわ来るものではなく、一気に来るものだと思った。巡査のおかげで危うく命拾いをした。巡査とはお互いに敬礼をして別れた。巡査は警察署に戻って報告すると言っていた。名前も聞かなかったが、その後あの時の巡査はどうしておられただろうかと今でも気になることがある。

私は防空頭巾ずきんをかぶっていたが炎を伴う熱風がすさまじく、頭巾もいつの間にか飛んで無くなっていった。どこをどうやって歩いたのか無我夢中で、いつ無事に中央気象部までたどり着いたのか覚えていない。

二日後にまた許可証をもらって高円寺に行ったが、地面が熱くて歩けなかった。兵隊の靴は厚底で頑丈だが、それでも靴を通して伝わる熱が熱くて、

とてもではないが歩けなかった。実家まで行くのをまた断念した。

それから四日後にまた行った。見渡す限りの焼け野原の中、あちこちで破裂した水道管から水が吹き出していた。実家によく似たどろりとした跡形もなかった。呆然とする私の前を通りがかった人から、私の母校でもある第八小学校で炊き出しをやっていると教えられて向かった。その時いただいたおにぎりの美味しさは今でも忘れられない。

当時私は二十歳頃の一番体力のある時だったが、日頃の消火訓練などは、一面炎が吹き荒れる前では全く無力で、誰も成すすべが無かった。何しろ立っていられない。三尺から六尺の燃えた柱が次々飛んでくる。空襲で火事になったら消火どころではない。まず逃げなければならぬと伝えたい。

あの叫声

錦町 鈴木 文 ふみ

(八十九歳)

戦争中は少年航空兵(七つボタン予科練)の練習地、土浦海軍霞ヶ浦海軍航空隊があつた茨城県阿見町に住んでいました。昭和十五年一月に横須賀より予科練少年航空隊が移転してきたのでした。その前は霞ヶ浦の湖畔でしたので水上隊が有りましたが、土浦海軍航空隊となつたのです。日支事件の始まった頃で、勝ち戦いくさでまだまだ平和な日々でした。私たち乙女は軍人さんが外出すると憧れの目ながめで眺めていました。日々戦が厳しくなり、銃後の私達はなり振りがまわすモンペ姿で防空訓練やら徴用などで、家に居て働かないと非国民とお上より罰せ

られかねない世の中で、遠くの軍事工場などで働かなければならないので、私は軍人さんが外出の時に休憩する、近くの施設に十六才の時に勤めました。

食料も配給制になり、大家族の我が家は毎日お腹をすかし、スイトンや雑炊で米などほとんど無くジヤガ芋や雑草が入っている食べ物で、私は長女でしたので弟や妹のためいつも我慢しました。それに加えて空襲があり、夜もゆつくり寝られませんでした。今考えても背筋が寒くなります。軍隊が有るために空襲は夜も昼も続いた状態でした。

忘れもしない二十年六月十日九時頃、B29数十機が飛来。空襲警報に急いで皆と防空壕に駆け込みました。途中、機銃射撃で目の前に銃弾が落ちた時は生きた心地がいたしませんでした。一緒に逃げた友の腕に弾が当り、その後疵が元で化膿して亡くな

りました。

すべて軍人優先でしたので、やっと友を連れ防空壕に逃げ込みました。軍隊の人達が土手の下に掘って作ったものです。後から後から逃げてきた人で、女共は奥に奥に行けと云われ進んでいきました。間もなくすごい音がしたと思ったら、電気は消え真っ暗になり、軍人さん達の呻き声やら「戦友愛を出せ」と大声で叫んだり、砂埃で暫くは出られませんでした。あまり出ないので、全員死んだと思ったそうです。

どの位経ったか今でも思い出せませんが、やっと外に出たら怪我人も死人も片付けて何も有りませんでした。防空壕の前は方々に大きな穴がいつぱいでした。250kgの爆弾だそうです。奥の方に入っていたので助かりました。

勤めていた建物は跡形もなく焼け、くすぶっていました。茫然と眺めていましたがなぜか涙も出ませんでした。土浦航空隊の兵舎はほぼ焼けて、大勢の軍人さんが戦死したそうです。助かったことに感謝しています。

あの真つ暗な中で戦死した人や、怪我をした人々の「戦友愛を出せ」と叫んだ声が、七十年過ぎた今でも時々思い出され、平和で今まで生きられたのは大きな犠牲があつて今が有るのです。あの時戦死した軍人や住民の人数を一度も聞いた事が有りません。秘密で公表しないのは犬死にです。胸が痛みます。

こうして書いていると、当時の事が次々と思いだされ、物量でもすべての物が追い付かないのに、神風が吹き勝つとばかり思っていたので、敗けるなど

とは考えてもいなかった事で、機銃射撃でおそれた事は九十九里あたりに航空母艦が来ていたわけです。もし輸送艦が来ていたら大勢が押しよせて、上陸したら千葉・茨城は沖縄と同じ思いをしなければならなかったのです。恐ろしくなります。

戦争は絶対反対です。身内が戦死してお国のためと喜ぶはありません。

各務ヶ原飛行連隊

錦町 伊藤 平八朗

(九十二歳)

呉服店四人兄弟の長男として生まれた私は、昭和十八年、二十歳になると徴兵検査を受けた。当時、立川市民は府中まで徴兵検査に行った。左目の視力を0・5と申告したところ、徴兵忌避きひと疑われた。

検査官から「貴様^{きさま}は兵隊^のを逃れる気か」と言われ、「いえ、絶対にそういうことはありません」と言つた。すると「貴様は第一乙種で合格だ。白紙^{しろがみ}が行くから待っている」と言われた。

強制疎開で北口から移転させられた錦町の家から家族に見送られ、十二月一日に上野駅そばの小学校に深夜に集合して汽車に乗せられた。その頃は駅頭^{のぼり}での見送りは禁止されており、家での見送りも幟^{のぼり}や旗はなかった。

到着したのは福島県安積郡富田村。東部111部隊に配属され新兵訓練を三か月受けた。古参兵や上官から毎日ビンタをされ、辛い日々であった。三か月の教育が終わる頃、准尉^{じゅんゐ}から呼び出しがあり「貴様の弟二人は志願で行ってるから、どうせ帰られやしないだろう。近日中に転属命令が出る。長男だか

らお国のために今後健康に注意して努力しろ」と激励された。我が家では、四人兄弟の三男が旧制中学の三年生の時、特別幹部候補生として最初に志願し、続いて次男が、東亜商業学校五年生の時に志願しており、私は三番目の出征だった。

桜が咲く前の頃に、岐阜県各務ヶ原にある各務ヶ原飛行連隊第一航空固定通信隊中部578中隊に単身で転属した。ここに自分は一選抜で航技兵陸軍上等兵として着任した。各務ヶ原の飛行連隊を朝出て、持田にある通信基地に公用腕章を巻いて^{かばん}鞆^{かばん}に入れた文書を自転車に乗せて一人で届けるのが役割だった。

持田の通信隊は今という公民館を接收したもので責任者は曹長だった。航空連隊と言っても飛行機は無く、時折爆撃機が来るくらいで何をしているの

かよく分からなかった。

毎日、航空連隊と持田を往復する中、途中の坂井という所にある小林さんという豪農の家で水を飲ませてもらったのが縁で、毎日公用帰りに必ず寄らせてもらい、夕飯をご馳走になる日が続いた。ちそう前原小学校を接収した宿舎に帰るのは皆が既に寝ている時間だった。

ある朝、持田に向かう時、グラマンが飛来し機銃掃射されたことがある。郡山市ではB29の空襲にあつたこともあるが、B29は遥はるか上を飛んでいたので全く見えないため怖くなかったが、この時は怖かった。グラマンからの機銃掃射で週番将校が戦死した。

郡山市での空襲時には非常呼集があり、敵機を撃墜せよとの命令を受けた。今から考えると三八式歩

兵銃でB29が撃墜できるわけがないが、その時は全くおかしいと思わず、必死に見えない敵に向けて撃っていた。

八月十五日も持田で迎えた。持田の事務所にはラジオが無いため、皆で近くの農家に玉音放送ぎょくおんを拝聴はいちようしに行き、私は一人で留守番をしていた。昼過ぎに皆が泣きながら帰って来た。曹長から、「伊藤、いよいよ日本は負けたぞ」と言われた。思わず「それは良かったですね」と言ってしまう、怒り狂った曹長から滅茶苦茶めっちゃくちやに殴られた。

翌日曹長から、「貴様は残務整理のため十二月まで残れ」と言われた。皆は荷物をまとめて二十日までにさっさと故郷へ帰ってしまい、一人残って残務整理をした。

残された食料や毛布など、使えるものは全て小林

さんの家に持って行った。バターが子どもに喜ばれ、バターが無くなった後に子供が騒いで往生したと、後で小林さんから聞かされた。小林さん一家とは今でも付き合いがあり、年賀状のやり取りをし、たまに双方で往き来^{いき}をしている。

残務整理の途中で立川に一回帰ったが、街は米兵で溢^{あふ}れ、食べ物も無かったのですぐに各務ヶ原に戻った。十二月になり残務整理を全て終えてから、裸一貫で立川に戻った。

兄弟は奇跡的に全員無事であった。

三月十日東京大空襲

錦町 金子 豊子

(八十五歳)

私は墨田区(旧本所区)現在の両国高校の南側で生まれ育ち、父は鉄工所を経営していた。昭和十九年、私が高等女学校二年の頃、学徒勤労動員の命令で、三年生以上の生徒は軍事工場に動員させられ、山本五十六元帥の揮毫^{きごう}が印刷された「必勝」の鉢巻^{かぶ}きをしめ、ペンを工具に変えて働いた。

私達低学年は、学校工場で各教室が作業場となり、白衣を着用し白い三角布^{かぶ}を頭に被り、航空隊の栄養食の錠剤^{せんじやく}を一個ずつ包装する作業に従事した。

軍隊には五箇条^{ごかじょう}の戦陣訓^{せんじんくん}があるが、学徒にも、五箇条の誓言があつて、朝礼の時、整列し、直立不動で唱和した。「一、常に学徒^{きようじ}たる矜持^{たも}を保ち、職場

を練成^{れんせい}の道場とすべし」あとの四箇条は記憶にない。

灯火管制がしかれ、室内の電灯に黒い布の被^{おお}いをかけ、外部に明かりが漏れないように気を配りながら、畳に映る丸い明かりの下で、読み書きをする毎日であった。母は、小学生の弟と幼い妹を連れ、取手の在^{ざい}の縁者をたよって、疎開^{そかい}していった。

ラジオから、勇ましい軍艦マーチが流れる。大本営発表の、敵軍艦を撃沈^{いくせん}、轟沈^{こうせん}との戦果。一方、「海行かば」の曲が流れる時はサイパン島等、全員玉碎のニュースが流れ、胸が痛んだ。警戒警報のサイレンが鳴り響く。ラジオをひねると「東部軍管区情報。敵〇機が南方海上より本土に近接しつつあり」東京も爆弾、焼夷弾の被害をうけるようになった。毎晩、空襲に備えて、衣服は着用のまま床に入り、防空頭巾、非常袋を手許^{てもと}に置いて寝た。

昭和二十年三月十日、夜中の十二時頃、空襲警報が発令され、何百機ものB29の焼夷弾による爆撃が行われた。B29が低空から繰り返し反復して^{どうだん}投弾してくる。焼夷弾が、花火の落下する時の火の玉のように、すーと落下すると、下町の密集した住宅の、あちらこちらから火の手があがり燃え広がっていくのが見えた。

町会の産業報国会会長で、隣組長であった父は、最後まで踏みとどまっていたが、家の前の^{たてかわ}豎川に梯子^{はしご}を架けた。バケツで川の水を汲み、私の防空頭巾の上から全身に掛けてくれ、一つの梯子に胸まで^{ひた}浸り、父は私を覆^{おお}い被^{かぶ}すようにかばって、降りそそぐ火の粉から私を守ってくれた。極度の緊張感で、寒さ、冷たさは感じなかった。豎川は隅田川から深^{いかだ}川の貯木場に通じている川で、筏^{いかだ}が繫流^{けいりゅう}されていた

た。

逃げまどう人々が、熱さのあまり川に飛びこみ、筏の上に這は上がったが、材木を結びつけていたロープが燃えて、一本ずつに人がまたがったまま流されてくる。普段は水面も揺れない川だが、火災の旋風に大きく波立ち、「助けてくれ」と叫びながら流されてゆく。梯子にすがる私達の上にも、焼けたトタンや、火のついた布団が降ってくる。熱風と漂ただよう煙に、私は朦朧もうろうとして気を失い、梯子につかまっている手を離しかけた時、父が私の頬ほおを叩たたいて「寝ちゃだめだ。死んじやうぞ」とどなった。その声に梯子にしがみついていた記憶がある。爆音が聞こえなくなり、梯子を上って見るとあたり一面焼き尽くされ、紅蓮ぐれんの炎と煙がただよっていた。

やがて東の空がかすかに明るくなってきた。川か

ら這い上り、灼熱の土を踏み、生きていたんだと実感したが、道路一面に焼死体が横たわり、まるで地獄のような凄惨せいさんなありさまに放心状態だった。家の焼け跡の片隅に、瀑風ばくふうに耐えられる鉄板で囲った一坪ほどの防空壕が残っていた。鉄の扉を挟こじ開け父と体を寄せ合って寒さを凌しのいだ。焼けた鉄板の熱さで、ぐつしより濡れた服が乾いていった。工場の跡には、鉄骨と、焼けた旋盤やボール盤等の機械が無残な姿で残っていた。

兵隊さんから、乾パン一缶と、柄杓ひしやく一杯の水が配られ、生き残った人達や、火傷の痛痛しい人達と長蛇の列に並んで、罹災証明りさいをうけた。鉄道も大きな被害を受けていたので、やつとのことで金町駅まで歩き、屋根まで鈴なりの人で溢あふれた汽車で故郷を後にして、母達がいる取手に向かった。

人間魚雷回天の思い出

一番町 内野 忠司

(八十八歳)

私は昭和二年に砂川村一番組に生まれました。当時は養蚕と桑苗を中心とした農村でした。満州事変当時の昭和五年、長兄の重司は現役衛生兵として横須賀に居ました。

私は昭和九年に西砂川尋常高等小学校に入学し、その四年生になった昭和十二年に支那事変が起き、日本軍が中国に進軍し各地を陥落したので、「勝った勝った」と言つて私達小学生まで、旗行列、提灯ちようちん行列等に参加しました。

私達子供達の遊びも、コマ回しや凧上げから戦争ごっこに変わり、上級生が隊長となり下級生が兵隊

で竹や棒で鉄砲や刀を作り、部落毎くわいの対抗戦等になったりしました。近くの小父さんに召集令状(俗に赤紙)が来て、入隊して中国に出征しました。家では重司兄、正歳兄も召集され出征しました。西砂の吉岡さんは戦死して、村では村葬にして、私達小学生も参列しました。

こんな事があります。同級生に宮崎昭仁君という名前の友達がいて、村役場から「皇太子」と同じ名前では恐れ多いから変えろと言われ、昭光と変えさせられました。高等科一年生の時、昭和十五年の年には皇紀二千六百年と日本中がお祝いしました。

昭和十六年、尋常高等小学校は国民学校に変わり、十二月八日に日本海軍は米国の軍港「真珠湾」を攻撃。米艦隊に大打撃を与え、陸軍は南方に進出して自転車部隊でシンガポールを攻略。イギリス艦主力

を日本海軍が撃滅して、日本中が勝ちに沸いて、旗行列や提灯行列で祝っていました。

私達の修学旅行の京都市行きは戦争で中止になりました。学校の教え方も支那事変から変わって来て、軍人が学校へ来るようになって先生から「お国の為に兵隊に志願する」か、満州は日本の生命線だから「満蒙開拓青少年義勇軍」に志願して満州まんしゅうに行くように、と教えられました。私と友人の清水勇之助君は海軍に受験し、私は体格検査で落ち、清水君は合格して翌年入隊しました。

私は砂川郵便局に勤め、砂川郵便局は三等局（特定局）で、数名の局員で郵便、貯金、電報、電話等を扱い、男子は二人で住込みでした。昼間は、男女で電話交換と窓口事務を扱い、夜間の電話交換と電報配達は、男の石井さんと私で、交代で行いました。

私は昭和十八年に再度受験し、合格して武山海兵団に入り、続いて横須賀海軍水雷学校で魚雷を勉強してから、山口県光市の「人間魚雷回天」の基地に転出して、瀬戸内海で訓練に当りました。人間魚雷回天とは、93式魚雷を改造して人が乗り、操縦して敵艦に体当たりして沈め、一人で数千人の敵兵を倒す魚雷の事です。

同級生の石川和泉君、宮崎昭光君も府立二中学校から志願して、石川君は土浦海軍航空隊に入隊して、飛行機に乗るつもりが、飛行機では無く「ベニヤ板」で作った艇「モーターボート」に火薬を詰め、体当たりする特攻隊に回されたと、戦後に怒っていた。宮崎君は陸軍に。

戦局は昭和十八年から逆転して、海軍は軍艦を撃沈され、制海権は取られ、輸送船は米潜水艦に襲わ

れて沈められ、南方で孤立した陸海軍兵士は、戦うより飢餓に苦しみ餓死するようになった。アッツ島、サイパン島の玉砕と敗戦が色濃くなり、人間が乗り敵艦に体当りしてひとりで数千人（戦艦等）を倒す戦法として考え出されたのが、飛行機や船艇、魚雷等あらゆるものが動員された。

私の基地では、出陣命令が出ると出陣者に対して隊全体で、酒盛りで送別会を開き送りました。イ号潜水艦に五体、ロ号潜水艦に三体が積載して、隊員は乗船して出発し後から行くと見送りました。特攻隊員の多くは、学徒出陣の学生予備将校と少年志願兵でした。

私の居た基地では、学徒出陣の学生将校でした。昭和二十年八月六日に広島市に、九日に長崎市に原爆が落ち、街が灰となつて、十五日終戦となり、連

合軍から特攻隊解散命令が出て、二十日過ぎに広島に出て、焼けの原を見て、無蓋貨車に乗って、数日かけて立川駅に着き、家に帰りました。

昭和二十年頃の私

柴崎町 伊藤 博

（八十三歳）

私は昭和八年生まれ。昭和二十年四月からは、疎開先の西多摩郡三田村立三田国民学校の六年生で終戦を迎えた。

昭和二十年に入ると、立川も空襲が激しくなり、三月、我が家も子ども三人だけを伯母の家へ疎開させた。更に二か月位後には、その家へ若い将校が訪ねてきた。若い家族三人の為に一部屋を空けた。「疎開」である。三田村小史によれば、昭和二十年七月

に「東京大空襲のため村内に疎開者充満」とある。伯母は面倒見がよかったが、十一歳になっていた私は、人生初の「居候」^{いそうろう}のつらさを味わうことになる。八月には、柴崎町の家屋敷を売り払った父親たちも村に移った。終戦の一週間前のことだった。後年、「何故もう戦争が終わるとは思わなかったのだろうか」と思った事がある。「本当の歴史を教えられなかったんだ」とも思った。「我が国は神の国、一度も敗れたことのない国」と教えられ、元寇^{げんこう}のときのように、そのうち「神風」^{かみかぜ}が吹くと期待し、敗戦による戦争終結など、国民誰もが予想できない時代。父親の判断を責めることは出来ない。

「玉音放送」^{ぎょくおん}は、夏休み中、臨時召集で校庭に整列した先生と生徒たちに流れた。はじめて聞く天皇の声は、よく聞き取れなかったが、あの滝島校長

先生が涙を流しはじめた。これを見て、「日本は戦争に負けたんだろう」と感じ、そのあと「明日から空襲がなくなる!!」というホッとした気持ちに満たされた。これが、十二歳になっていた少国民の正直な気持ちである。大人になったら戦闘機に乗って米国と闘い、山本五十六の敵討ち^{かたきう}をやる少国民の一人であつたはずじゃなかったのか？

大人たちはどう思ったかは知らないが、大変なことが始まることになる。しばらく後に、校庭の金網の外の空き地で、若い兵隊が二名、書類を持ち込み、燃やし始めた。一日だけでは終わらなかったように思う。もつたいないから地図帳を一冊もらって帰ったのを覚えている。

やがて入ってくる占領軍に備えて、日本にとって都合の悪いものは、すべて一生懸命、処分された。

疎開での小さな出来事だけれども、このような証拠しやうこ隠滅いんめつ作業は、その筋のお達しにより、全国で一斉に速やかに行われたものと推察している。

学校でも二学期から大変なことになる。中でも印象に残るのは「墨塗り教科書」である。生徒は、習字道具持参で自分の教科書に墨を塗る。それが毎日の授業であつた。覚えているのは、江戸時代初めに、シヤムで活躍した山田長政のことを全部消したこ
とぐらいである。

先生方は、その筋のお達しに従っただけでしょうが、子どもにしてみれば、なんでそんなことという感じでした。

現在の学校教科書にも、墨塗り教科書のことはいさく載っています。私にとっては戦争を知る上で、重要な出来事であつたし、体験であつたと思つてい

ます。この教科書のレプリカは立川市の図書館にもあります。是非、戦争の時代を語る資料として観てほしい。

もう一つの疎開先の光景を記しておきたい。秋になると、休日には米軍がジープで奥多摩へ遊びにやってくる。米兵は脇に必ずといっていいくらい日本娘たちを乗せている。地元の子どもたちは、いつ、誰から教えられたのか、ハローとかギブミーとか叫ぶ。止めたジープの上からアメリカの豊富なガムやキャンデーが撒まかれる。群がる子どもたち。

その後、立川に戻ってから、更に衝撃的な光景を見た。同級生だったTちゃんが米兵と腕を組んで闊歩かつぽしている。彼女は中学生になっていた私と同じ年。お父さんはシベリア抑留。母を助けて一家を支えていた姿なのだ。

戦争は隣の家に泥棒が入ったような話ではない。国家が企て、威信をかけ、オール日本で戦うのである。国民の生命、財産、幸福追求の権利などというけれど、「戦争で幸せになる人は一人もいなかった」ということと、「その筋(国家)と国民は一体だ」と考えていたけれど、実は全く別物に変わる」と考えなくてはいけない。これが、戦争から得た教訓だと思っている。

辛かった学童疎開

錦町 及川 雅弘

(八十二歳)

一、学童集団疎開

昭和十九年になるといよいよ東京も空襲の危険が迫り、学童の集団疎開が進められ、杉並区の学童

は信州上田郊外の別所温泉に疎開することになった。

僕達桃井第二国民学校の三年から六年生迄の学童は昭和十九年八月十三日の上野発の夜行列車で親元を離れて出発した。僕はこの時四年生であった。

二、別所温泉での生活

桃井第二の学童は三つの旅館に分れて生活した。授業はほとんどなく稀に座学と称し旅館の一室で行われたが、何を教わったか記憶にない。この後も五年生の終りまで殆んど勉強をしていないので四、五年生の学力は未だゼロだ。到着して数日間の三食のおかずはキャベツと茄子の塩のみだ。最初はおいしいと思ったが、何せ御飯の量が少ないのには悲しかった。

このような厳しい状況を東京にいる両親に伝え

たかったが、手紙は全部先生の検閲けんえつが必要であつたので、「僕たちは毎日仲良く生活しています」と、軍国少年気取りの手紙を書いた。里心がつくといけないからか、父兄の面会来訪が許されたのは三ヶ月後だった。

三、相次ぐ脱走

空腹と親恋しさから脱走事件が相次いだ。ところが皆、上田から信越線で上野に向うため殆んどが小諸つかまか軽井沢で捕つてしまい、一人も成功しなかった。僕はこのルートでなく、別所の西方の青木峠越で松本へ出て中央線で帰れば絶対に成功すると、子供心にも真剣に考えた。しかし途中で食物を入手する手段も見つからず、結局実行できなかった。

四、家から小包が届いた

面会は許されなかったが、荷物を受取るとは許

され、自宅で揚げたドーナツを送ってきたことがあつた。ドーナツを包んだ包装紙にいつ迄も油がしみ、香りが残っていて大事にしまっていた。「お家のおいをかいで大切にしまっています」と書いた手紙を見ては泣いていたと母は後日しばしば語っていた。

五、今でも好きな想い出深い食べ物

①宿舎の旅館のご隠居部屋だちんくるみの前の廊下の拭き掃除ふをすると、お駄賃だちんに胡桃くるみを二つ下さった。この胡桃うまの何と美味うまかったことか。

②収穫の終った畑に残った、鉛筆位の太さのさつま芋を拾つてきて、温泉で洗って食べた。カリカリした歯応えとほのかな甘さでおいしかった。但しただ馬鈴薯ばれいしょだけは生では決して食べてはいけないと先生からきつく言われていた。

③近くの農家では漬物用に渋柿の皮を干していたが僕たちはこれを盗みに行った。農家の人は気付いていただろうが、何も咎めること^{とが}もなかった。それどころか丘の上の大きな柿の木に真つ赤な鈴なりになっている柿を取って下さったこともあった。小粒でかじると真つ黒なゴマが入っていてこの世のものとは思えぬおいしさで、今でもゴマ入りの固い小粒の柿が好物だ。

六、寝小便と洗濯

四年生の終りまで寝小便小僧であった。暖房もない寒い冬の信州のことで、友達と二人で一緒に寝ていたが、寝小便をすると二人ともびしょぬれになる。温泉地であったが、ぬるい湯で夜が明けるまでお湯に浸っていたことが度々^{たびたび}あった。

七、やさしかった方々

空腹続きの疎開児童に少しでも家庭の暖かさを味わわせたいと、十一月ごろから電車で三―四駅先の下之郷という村の農家へ二人一組で土日一泊の分散宿泊が計画された。僕が指定されたお宅は「清水さん」という、ご主人は出征中で老婆ときれいな若奥さんの二人暮らしで、失礼ながらあまり豊かでないさそうな農家であった。清水さん宅には四、五回お世話になったが、いつも忘れ難い温かいおもてなしを頂いた。真つ白い御飯と味噌汁、野沢菜等を動けなくなるほどお腹一杯^{ちそう}ご馳走になった。

八、いじめを止められなかった

同室の岸田君は、体は大きいが多少トロイところがあり、同室のY君から暴力こそふるわれないもののしばしばからかわれ、いじめられていた。僕ははじめに参加こそしなかったものの、これを止める勇

気もない臆病者だった。岸田君はいじめの度^{たび}に先生に訴えていたらしく、当時級長だった僕は度々先生に呼び出された。先生の部屋の前の廊下に座り「及川参りました。」と声をはり上げ、先生の「お入りなさい」の声で部屋へ入り、その都度叱られた。親元から離れ辛い想いの上にいじめられ、岸田君はどんなに悲しかったかと、ざんげの至りである。

戦争で山林（雑木林）が飛行場に化した

一番町 内野 忠司

（八十九歳）

昭和十年頃の砂川村は、五日市街道が福生町境から東へ国分寺まで一本道で、その両側に農家が並び、その家を囲む櫓^{けやき}と櫓の木垣根（風よけ用）があって、五日市街道は昼でも暗い位に茂っていて、夏

でも涼しかった。

又、道路は舗装で無く砂利道で、バスは立川駅^{また}から砂川九番を周り、拝島駅まで一日に何回か走っていた。中里、殿ヶ谷、宮沢、松中部落の道路に沿って新田掘（殿ヶ谷用水）が流れていて、天王橋から十番組迄^{まで}（現若葉町）は、玉川上水の松中橋から分水した砂川用水が流れていて、飲料水や鍋、釜、農具などを洗う生活用水が流れていた。

部落毎^{ごと}には、共同で使う井戸が十ヶ所あって、一番組には、高橋の裏、鳴島の前、用水の側と森谷の前にあった。この用水の流れを利用した水車が八つあって、精米、精麦（押麦が主食だった）、製粉を挽^ひいていた農村であった。

七〇八番の南、立川に大正十一年に移ってきた陸軍飛行5連隊と飛行場は、雑木林を切り開いて作ら

れて有り、その北側砂川分に立川飛行機会社の工場があった。

（西立川駅に飛行場の出来る前の、林の中に養豚場があり、移転されたという。砂川分には、宮崎伝左衛門さんの牧場があり、四番の方に移されて、牛を飼って牛乳を売っていたのが、飛行場の拡張で再度、五日市街道北側に移転し、終戦後、^{また}又米軍の基地、飛行場の拡張によって移転する様になった。三度の移転と、土地を米軍に渡すなど、多くの農民が立ち上がつて「砂川基地反対闘争」となったのでした。）

今の自衛隊立川基地の中には、四番組の萩原さん^{たんぼ}の田圃があつて、同級生の実君など魚を捕っていたと言っていた。^{また}又、奥多摩の小河内ダム建設で村を出た人達もいた。同級生に酒井、坂井君、小沢君がいたが、飛行場拡張で移転している。

砂川の南、昭和町との間に林があり、西の福生との境、北側の瑞穂、村山、大和、小平との境にも雑木林が有^あった。この雑木林は村民の燃料（薪）や落ち葉が、肥料に使われていた。子供の頃、大人に連れられて、餅の弁当を持って落ち葉掻^かきに行き、枯れ枝で栗餅等^{あわもち}を焼いて食べた。

砂川には田圃が少なくて、米は陸稲^{おかぼ}しか無く、米の餅は大切に、栗とかきびなどを混ぜて搗^ついていた。外の村に出るには、この林を通らなければならなかった。

昭和十二年の支那事変が起きてから、立川飛行場の西に、岐阜県から移ってきた名古屋工^{こうしやう}廠（陸軍飛行工^{こうしやう}廠）と陸軍技術審査部が出来、その周りに従業員^{こうしやう}の宿舎、病院（八清住宅、中神住宅）等が出来た。

宮沢、松中部落の南、昭和町の青梅線との間に、昭和十二年に昭和飛行機の工場と飛行場が建設されて、私達小学生まで草刈りに出た。宮沢地域に従業員住宅が作られた。

中里組西の福生との間の山林二百^ふを、昭和十四年に、福生町役場に陸軍が乗り込み買収して、陸軍整備学校が作られ、飛行場が建設されました。

戦後、米軍に接收され横田基地となり、拡張されて（港区や狛江市がすっぽり入る面積）、五日市街道が迂回^{うかい}させられた。

五く六番組（柏町）の北、村山分に、陸軍少年飛行兵学校と、陸軍病院が出来た。八く九番組の北、大和分、玉川上水北に、日立航空機工場（エンジンを作る工場）が昭和十五年に出来、従業員住宅（南街）が松林を潰^{つぶ}して出来た。この飯場^{はんば}へ、私は電報

を配達した。

昭和十七年に、少年飛行学校と日立の工場に行く道として、立川北口の所から大和村芋窪^{つな}を繋ぐ芋窪街道が作られた。ここも、砂川郵便局にいた私が、江の島道の飯場に電報を届けた。

この軍事施設がある為に、昭和二十年には米軍空爆の目標となって、中里組、四・五・六・七・八番組（現西砂町、砂川町、柏町、幸町）が爆撃されて焼かれ、死者を出している。

開拓の昔、先祖が原野に家々を守る為に砂川村を囲む雑木林を造ったのが、この戦争で失われてしまったのが残念です。

B 2 9 襲来

柴崎町 木下 今子

(八十四歳)

昭和二十年七月も末頃の、ある日の出来事です。

私と姉はまだ学生でした。私は十三才、姉は十七才。東京や大きな都市では、毎日敵機が現れて爆弾を落とされ、日本中恐怖の毎日でした。そんな日々が続くので、私達の学校も、とうとう自宅で待機学習という事に決まりました。午前中は宿題、自由学習、午後は家の手伝いをする事。

そんな午後の事、母が「三時のおやつを、畑仕事をして居る父達の所へ届けてほしい」と云い、私と姉で行く事になりました。おやつは、戦時中ですからお菓子等ではありません。小麦粉を水でこねた焼きもちとさつまいもです。そして大きなやかんにお

茶を入れ運ぶのです。魔法瓶まほうびんのようなしやれた物は

ありません。まさか、私の住んで居る埼玉の田舎まで、昼間から敵機が現れるなんて夢にも思っ

て居ませんでしたので、私と姉が届けに向かいました。

吉野川の一本橋を渡ると広い田圃たんぼが広がります。その先に私の家の畑があります。私達が田圃の真ん中辺りに行った時です。何とも不気味な爆音が、未だ見えないが聞こえて来るのです。姉が「空襲よ」と叫びました。私と姉は慌てました。隠れる場所がありません。慌てて、そばに生えてる草を夢中でむしり、田圃のちよつとした窪みに、もぐらの様にはらばいになり、草を頭や身体にばらまき、身を隠しました。何機かの編隊の様です。どんどん私達の真上に近づいて来ます。もう生きた心地もしません。一個の爆弾で何もかも粉々になってしまうその恐

ろしさ。本当にまな板の上の鯉でした。あれから七十年もたつと云うのに、私の心はあの時の飛行機の爆音と恐怖を忘れる事ができません。

翌日の新聞によりますと、熊谷市の三ヶ尻飛行場や群馬県の太田の飛行場を偵察に來たのでは、と書いてありました。本当に今の平和が、どんなに倖しあわせか。何時いつまでも何時までも続きます様にと心から願う、今日この頃です。

模型キットを求める為に

一番町 市川 昌雄

(八十三歳)

立川空襲の記録によると、昭和二十年四月二十四日午前八時半頃、立川の工場や砂川八番（現在の幸町）及び日立工場に対する、爆撃があった。「B2

9 約百二十機来襲」とある。同級生である、内野正雄君から、近年になつて聞いて解つたことであるが、次の日、その様子を見るため、富士野光次君達と現場へ向かつていた。途中まで行つた時に、空襲警報が発令になり、引き返して來た。光次君の親戚である、富士野仙太郎さん宅に身を寄せた。

大きな草葺くさぶき屋根の家でした。と、その時、爆弾の気配に、縁側えんがわの下に潜もぐつたそうです。

次に、このことに関連した事柄を記してみます。

当時の五日市街道は現在の交番前を直進し、突き当りを右折して天王橋を渡っていました。橋の下流右岸に、土手と街道の間に、細長い空き地があり、松の根の置き場所になっていました。私がこの日に、なぜこの場所に居たかです。前日もこの付近で遊んでいました。そこへ、立川市内で模型店を営む方が

通りかかり、「明日村山へ疎開する荷物を運ぶので通るから、その時、飛行機の模型キットを持ってきてやるからお金を持って待っていないさい」と言われ、橋に居たわけです。

しばらくしてB29が近づいて来た。音の大きさからして編隊ではなさそうで、一機の偵察だろうと思ったが、やがて、夕立降りの雨が近づいてくる時の音の様な、ザーという音が次第に大きくなり、次に耳が痛くなる様な波状の風圧を感じた。そこまでは覚えているが、炸裂音は今でも思い出せない。さくれつ

前に記述した松の根の置き場のことですが、これは現在の一番組公会堂の所に、松の根を原料とした海軍で使用する油（松根油）しょうこんゆを製造する施設が在ったからです。私達国民学校の生徒も、海軍の兵隊さんの手伝いとして、早朝から参加していました。こ

の松の根は、農家の方たちが多くは残堀山の中に点在する、古い松の切り株を掘って供出していたように思います。私達は平地の雑木林のことを山と云っていました。

私は爆弾炸裂による吹上げた土や、石にも当ることなく無事だったのは、松の根の下に潜れたお蔭かげでした。周囲の景色が見えるようになるまでかなり長く感じました。

ゆっくりと立ち上がって橋の方を見ると、富士野さん宅の屋根が地面に接しているのが見えました。すぐにとんで行くと、草屋根の下で声がするので、現在は故人となった嶋田繁雄君等と皆で麦藁むぎわらをむしり、中にいた人を助け出しました。

残念だけど、子どもの私達ではここまでで、防空壕の中の土に埋まった家の人が居るなど、知る由もよし

ありませんでした。七十年もたつて、最近ようやく、防空壕埋没で亡くなっていたことを知りました。

一段落して家に帰る途中、武蔵屋（水車業）さんの前まで来た時、何人か人が見えたので行つて見ると、爆弾で掘れた播鉢状すりばちの底に、牛が腹を上に向け、四つ脚をひろげ喘あえいでいた。今でもこの時の光景は、忘れられない。

内野重司さん宅でも、この時、次男の重治郎さん（四才）が防空壕で埋没死している。

戦後の思い出

曙町 菊池 保

（八十歳）

戦後の混乱期に十代を迎え、六・三・三制になつて何期生になるか一寸忘れたが、立川二中が出来て

から私は一期生である。その二中は、昔の軍隊の兵舎の馬小屋を改築しての学校である。それが出来る迄、第二小学校へ居候いそうろうをしていたのである。先生が、「貴女達、静かに歩いてよ。小学校の先生に迷惑をかけるようなことはだめよ。居候をしているのだからね」と言っていた事を私はよく思い出す。

「早く校舎が出来るように、大工さんに頼んでこよう。」と数人で出かけて行つた事も。「校舎は出来ても、机や椅子が出来てこないが、気兼ねしないで勉強できるところへ引越そう。」と先生は言つて、新しい校舎へ移つていった。

それからが大変であつた。毎日椅子にかわる、みかん箱をさげての学校通いが始まつた。首からガバンを下げて机の代り、そんな風にして勉強した。松林の中の校舎なので、校庭のまん中に松の木が何本

も立っている。今日は石拾いなんて言っていたので、勉強どころではなかった。

やっと机と椅子が駅に届いたので、生徒全員で机運び、駅から学校までの道を歩いて、先生と生徒が一緒になって、校長先生まで机を運んだ。今の交通戦争時代では考えられない事である。六十八年も前の昔の事である。

一クラス五十五名、五クラスもあった。一期生なので、上級生も下級生もないので、運動会をやるのもクラス対抗であった。「このクラスは、運動はいが、勉強の方が低いぞ。」なんて先生に言われたものだった。

大変苦しい戦後の生活。着る物につぎの当った物を着ていても平気。あの頃は、白いお米のご飯が食べたいと切に思った。カレーの中に肉は入っていない

かった・・・いろいろあった、苦しかったことが。

今の子供達を見ると、つぎの当っている洋服を着ている子なんか一人もない。何でもある。これが本当の幸せなのだろうか。いや、そうではないと思う。私達の子供の頃の方が、何もない大変な時代であつたけれど、一つのものを求めて、一生懸命働いて手にした時の喜びは、とてもすばらしかった。現在では、何を与えてやっても、喜びよりか当り前という気持ちが強くなってしまうている。本当にこれでよいのだろうか?・・・私は、現在八十歳です。

疎開先での空襲

砂川町 木村 都紀子

(七十四歳)

戦況が拡大し、本土への空爆が聞え始めた頃、病臥びようがの姑しゅうとめの世話に追われる母と病院勤めの父と離れ、母方の祖父母に伴われ母の里に疎開し、昭和二十年七月六日、甲府市で空襲に遭いました。

富士を目指してきたB29は、百八十機で甲府を襲い、盆地の地形を活用し、周辺の山々に油脂まを撒き散らして愛宕山に照明弾を落とし、一瞬真昼のような街を目掛けて無差別に焼夷弾を落とし、町は四方から火の手が上がり、火の海に包まれました。

当時三才半の私は、防空頭巾ずきんの上から水を掛けられ、盲腸で退院直後の叔母の背に結ゆわえ付けられて、一度は防空壕に入りましたが、低空飛行と共に劈つんざ

く様な衝撃音に飛び出し、火の粉が舞い散り舐なめ廻まわす様に迫る火の中を逃げ惑いました。

城下町は道が入り込み真まっ直すぐには逃げられず、道巾はばも狭く曲がりくねった道を逃げ回る人の群むれに、容赦なく機銃掃射が襲そって来て、バタバタと人は倒れ、倒れ伏した人を其の俣ままに踏み越え、バラバラ弾薬が落ち弾けるのを、地に伏し、壊れた桁けたや建物の下に隠れ、川の浅瀬を見つけて渡り、郊外迄逃までげ延び、爆撃機が去るのを、田圃たんぼの畦あぜにしゃがみ込み、待ちました。

私を背負い、更にねんねこ替りに布団を背負った叔母は、恐怖と疲労と、途中で散り散りになった家族の安否や心細さで、動けなかったと語っています。背負われた私は、足が畦の脇を流れる水につかり、冷たかったことを奇妙に覚えています。遠くのビル

が斜めに傾いて焼け落ちるのを見つめ朝を迎え、半壊の校舎に向かい、逸れた家族等とも出会い、まだ来ぬ消防を指揮していた祖父を待ちつつ歩き始めた。

あちこちには黒く煤で焼焦げた様々の姿の死体が転がり、洗面のために向かった河原の雑草や石にも油がベタ付き、川面には死体が浮かび沈み、漂って流されていました。私に見せない様に気を使ってくれても行く先々で目に入ります。

頭のない赤子を背負った死体、小さな固りを後手に引いている死体、空に拳を振り上げた死体、真黒の手足のもげた死体よりも、爆撃の音や光の凄まじさ、押し寄せる火の海や煙、臭気の方が、何時迄も記憶の底に張り付いています。死体は動かずにあちこち転がって居たので、幼い私には大人のような

感情は湧かなかったのだと思います。

住居跡は柱一本残さず燃え尽き、水道の蛇口は変形し、曲りくねった管から直に水が迸り、防空壕は上部が吹き飛び、備蓄しておいた少々の米や大豆は炭化、家庭菜園の作物は土の中でホクホクに蒸し上り、雀や鳥も焼け落ちて炭化したのを、十才の叔父と吹き出る水で洗い、口の周りを真黒にして夢中で食べました。現在の様に即、救援物資が届く訳ではないので、叔母や祖父母たちの食料、住居の苦労が忍ばれます。

背負われて逃げた裸足の私に、警備の兵隊さんが、手拭いを裂き夏草の茎を合せて草鞋を作り履かせて下さったのが心に刻まれています。

翌々日あたり、トラックが来て、スコップを手に腐敗し始めた死体を荷台に乗せ、公園に穴を掘り埋

める為に、何回も焼け跡を走っていました。学校のプール程の大きさの土万頭^{どまんじゅう}が三ヶ所出来、燐^{りん}が暫^{しばら}くの間燃えていました。

夜中の二時間半の間に、甲府の街がほぼ完全に消え去り、直撃弾による爆死、猛火による焼死、窒息死など数え切れない程の犠牲者が、身元も解らぬままに埋葬され、他に重傷軽傷、行方不明者多数――。

收容先の病院も破壊され、身を横たえる木陰^{うじむし}もなく、腕や足を吹き飛ばされた人達の傷口に蛆虫^{うじむし}がわき、真夏の太陽に容赦なく照らされ、呻き声をあげたり、目をとじて動かぬ人も居りました。

焼け跡から使用出来そうな材料を集め、屋根と周りを囲った掘っ立て小屋を作り、人目と雨を凌^{しの}げる場所が出来ました。祖父と女子供だけで道具は無し、力仕事の出来る男達は戦地だし、暑さの中で素人が

大変な仕事だったと思います。

広島、長崎と原爆が落とされ、終戦を迎える八月になって、当時両親の住む立川の住居も爆風に遭^あい、壊されたそうです。

八高線多摩川鉄橋列車事故に遭遇して

一番町 高橋 英子

(九十歳)

この事件を風化させない為に、私は書きたいと思
い綴ります。

忘れる事の出来ない恐ろしい事故だった。昭和二十年八月二十四日、私が疎開先の長野県下伊那郡河南村から武蔵五日市の実家に帰る途中の事故だった。八王子から八高線に乗り換え我が家へと考え、八王子駅で降りた。ぎゅうぎゅう詰めの列車から解

放された。時間は朝七時頃だった。

八王子の駅は空襲で焼け、屋根など駅舎は無く、無残に鉄骨の柱だけが残り、夏の朝日がかんかん照っていた。思えば八王子の空襲は凄まじかった。たまたま一時帰省していた時、五日市からでもよく見えた。真赤な夜空、B29の飛行機の爆音、自分達迄が空襲に襲われているように思ったほど、あの火の海は本当に恐ろしかった。八王子の人々の気持ちを考え、ガランドウの駅舎に立つて思い出していた。

やがて五両客車で編成された八高線が、ガタンガタンと入って来た。その頃の八高線はまだ汽車だった。終戦一週間後の混乱の中、懸命に運行している国鉄の人々の努力が感じられた。時刻の乱れは無理もない。やつと発車するというので、一番後ろの車

両に乗った。疎開先から食料など一杯詰め込み、手にも大きな荷物を持っていたので、重くて前の車両まで歩いて行けず、最後部の席にやれやれと座わった。今考えると、前の車両に乗らなかったで生き延びることが出来たのだった。

列車には復員の兵隊さん達が大きな荷物を担ぎ、次々と前へ前へと車両に乗り込んでいった。男女の学生達も乗った。満員に近い列車が発車した。小宮駅で暫く停車しばちしていたが、そろそろと進み、多摩川の鉄橋を渡り始めた時、突然「ガターン！」と、すごい音と衝撃がして列車は急停車した。ショックで私は席から転げ落ちた。身体を見るとどこも傷は無かった。安心して、どうしたのかと窓の外を見て吃驚仰天した。列車が、鉄橋の上で前方から来た汽車と正面衝突していたのだった。濁流がどうどう

と流れている多摩川へ人が落ち、流されている。汽車の破片なども流されていく。大変なことになった。車両から投げ出され川に落ちた人達は、あの復員の兵隊さん達ではないか。生憎、あいにく前日大雨が降り増水した川では助からないだろう。せつかく折角元気でここ迄帰って来たのに、なんと不運なことか。

どうしたらいいか迷っていると、前の車両の人達がどやどやとやって来て、前の車両が燃えてきて危険だから降りるようと言う。それは大変、降りて別に帰る道を考えなくてはと、荷物を持ち降りようとしたが、列車は高く線路迄足が届かない。困っていると復員の兵隊さんが、抱いて下おろしてくれた。次々と人々が車両から下りていた。幸い、車両の後ろは鉄橋に入っていなかったので、怖い思いをせずに歩けた。

小宮駅前に来たら、「誰か来てください。誰か！ 主人が、主人が！」と叫ぶ女の声が聞こえて来た。近所の人達が駆けつけていた。この列車事故は、駅長さんが上りの列車が遅れているので、「交換タブレット」を渡さず見切り発車させた結果らしかった。駅長さんは、責任を感じて自ら命を絶ってお詫びしようとしたようだった。この時は周りに止められ事なきを得たが、翌年の五月、とうとう命を絶ってしまったと新聞に載った。私の家のすぐ隣の方は、この事故で行方不明になってしまい、三カ月後に多摩川の下流で遺体となって見つかった。この惨事は確認されているだけで、一〇五名の方が亡くなった。

家に何とか着いて、母に事故のことを息もつかず話した。びつくりした母の「一度死に目に会ったか

ら、あなたは長生きするよ」との言葉が忘れられない。生と死を分けた車両の前と後ろ、人間の命は紙一重である。生きてこられた幸せを十分自覚し、少しでも社会に還元できる人生を送らなくては亡くなった方に申し訳ないと思った。

私の戦中戦後の体験記

栄町 篠原 一夫

(八十一歳)

戦後七十周年の大きな節目であり、マスコミ報道を始め各地で開かれている企画講座や展示会も盛んになっている。そんな事も刺激となり、過去を振り返り記録として整理した。戦中戦後の頃は、小学生で記憶も薄らいでいるが、これを機会に思い出を残しておくのも意義が深いと、書き留めた。

私は一九三四年（昭和九年）、岐阜県の南南東、愛知県との県境に位置する山間^{やまあい}にある陶器の町、美濃焼の産地として知られる多治見で生を受けた。

六人兄弟の末っ子なので、何かに付けて兄の影響を受けたと思うが、小学校へ入学したのが昭和十六年、尋常小学校から名称が国民小学校となり、戦時色も進んだその年の十二月八日に、日米の開戦が始まった。近隣の子供達は大人の中に混じり、氏神様の本土神社^{おもむ}に赴き、生まれた町名を告げ、日参団が参りましたと声を張り上げ唱和したのだ。

小学生でも高学年になると近くの軍需工場に狩り出されていた。まだ戦況はそれほど大きく報道される事もなく、時には出征される兵士を駅で見送るのに全校生が駆けつたものだ。

人通りの多い街角で、白い割烹着^{かっぱうぎ}を掛けたご婦人

が、戦場に赴く兵士の武運長久を祈念する思いで、一メートルほどの長い白布に赤い糸を縫い付け、結び目を作る手法で人々に願い、寅年生まれの女性には自分の年齢ほどを結び、千人針の名で無事に帰つて来る事を祈り、腹巻きとして使用されたとか。時には虎の下絵に付けた点に、針で赤い糸を通しコブを作る姿も見かける事があった。

本土神社前の通りから多治見橋までの商店街で、道幅が狭く込み入った家々の四百メートルほどが、強制疎開と言って撤去されるのも目にした。また歴代の天皇の系譜を、神武・綏靖・安寧・懿徳・一二五代も諳んじていた。ゲートルを巻いて登校もした。足首の下から巻き始め、途中で折返しを二回ほどするとずり落ちないのが忽であった。

戦況は日増しにあわただしくなり、いろいろな場

で鬼畜米英とかの攻め言葉を耳にすることが多くなった。我が日本軍は南の島へと上陸し善戦を繰り返していると耳にする一方、各家庭では防空壕を備えろとか、防空演習に隣組では総出で夜間バケツリレーの手渡しをする大人が、目的の位置に水を掛ける訓練も目にした。

時々、戦死された御霊を馱で迎えるのに、校長先生からお言葉を校庭で賜り、整列して馱へ出向いた記憶もある。折り目、節目には講堂に集まり、厳かな雰囲気の中で全員が起立したまま、校長先生がお盆に乗せた詔書を奥の間から出され、教育勅語の「朕思うに」が始まると意味も分らず、うんざりする時間でもあった。

攻めの態勢から守りの現況が具体的に現れ、本土を目掛けて敵機が襲来する機会が多くなり、空襲警

報のサイレンが鳴ると、日中は学校から自宅に帰れとの指示、夜間は各自で対応する。名古屋から学童が避難疎開で虎溪山の永保寺へもやって来た。空襲警報で母と姉に連れられ、リヤカーで一時^{しの}凌ぎの食料や布団と^{むしろ}筵を積んで、虎溪山の裏山へと避難。みんなも同じように暗闇^{くらやみ}の中を駆けつけていた。その夜、B29の爆音の中に遥^{はる}か彼方で空の雲に赤い灯が反射し、焼夷弾が風船の様にゆらゆらと落ちてゆくのも目にした。

その日は昭和二十年七月九日の午後十一時頃の、熊野灘^{なだ}から侵入し関ヶ原より岐阜市を襲撃した夜の出来事であった。その後も、七月十五日に今までにない突然の事態に見舞われた。渥美半島付近の海上より、艦載機が多治見の上空に襲来し、多治見駅から美濃太田間を走る太多線で、多治見駅を出た列

車をターゲットに停車させ、機銃掃射で狙い打ちをされて、四十名ほどの犠牲者があり、近くの安養寺に遺体が安置された。その米軍戦闘機^{すなほこり}が我が家の前を飛び、機銃掃射が始まり砂埃を立てて通過していくのも目にした。

早く時が過ぎ去れば、の一瞬を味わった。そんな小学五年生の暑い夏であった。

健康優良児童表彰と平出大佐の手紙

柴崎町 浅海 貢

(八十三歳)

立川国民学校(現在の立川市立第一小学校)の六年生になって間もないある日の放課後に、担任外の先生に校庭に呼び出されて、校庭西北の角から南東の校門近くまでの百メートル走と、校庭西側にあつ

た砂場を使つての走り幅跳びをさせられました。何のためとも云われず、聞きもしませんでした。

その後、昭和十八年六月二十五日付けの、二通の健康優良児童表彰状を、学校を通じていただきました。

一通は朝日新聞社主催・文部省後援の全日本健康優良児童表彰会審査会長さんから、もう一通は、東京府健康優良児童審査会会長さんからのものでした。

過日の、校庭での百メートル走と走り幅跳びは、このためであつたのかと思いました。

学校には体格のよい生徒が大勢いるのに何故私一人だけが選ばれたのだろうか、と不思議でしたが、後日ふと思いました。私には虫歯がありません。多くの生徒は虫歯があつたので、これが決め手とな

って健康優良児童として表彰されたのだと思います。

このときは、健康に生み育ててくれた両親に対し、感謝の念が一杯になりました。

それからしばらく経つたある日に、海軍報道部長である海軍大佐・平出英夫さんからの手紙を、学校を通じていただきました。

この手紙は、私が健康優良児童として表彰されたのでいただいたと直感しました。

手紙の内容は次の通りです。（原文の通り）

「親愛なる浅海君

私は平出大佐です。私は君のことはよく知つて居ります。元気で勉強していることでせうね。大東亜戦争のことも先生から十分教へられてゐることと思ひます。全く敵アメリカも今や必死です。全国力

を擧げてしつこく反攻して來ます。アメリカは太平洋を北から南、東から西と四方八方から我が神國日本の心臓部を目掛けて挑みかかつてゐるのです。特に南太平洋では航空決戦の連續で夜晝間斷なく航空撃滅戦が行はれて居ります。

これに對して帝國海軍航空部隊は求敵必滅、敵の出鼻々々をたたいて大きな戦果を擧げてゐます。

帝國海軍は絶対に負けません、それはどうしてだかお分かりになりますか！それは私たちの後にはいつも君達があるから安心して戦っているわけです。

(中略)

決戦の上空は諸君の來るのを待つてゐるのです、そしてこの少年飛行兵には誰でもなれます。募集はもう始まつてゐます。私は君が學友諸君の先頭を切

つて一日も早く私達のところへ來るのを待つてゐます、そして君達と一緒になつて憎い敵米英をたたきつぶそうと思つてゐるのです。

輝く海軍航空隊へ！

お父さんお母さんにお話して早く來てください、待つてゐます。

昭和十八年七月十二日

海軍大佐 平出 英夫

淺海 貢 君」

私は、この手紙を読み終わると、もう海軍航空隊に入るのが当然と考えるようになり、早速願書を取り寄せました。

しかし、なぜか父母の目を避けて、物置小屋でこっそりと願書を読んでいたところを二度も母親にみつかつてしまい、願書を取り上げられたうえ、ま

だ子どもなのだからそのようなことを考えなくてもよいと、厳しく叱られてしまいました。

私は内心、国のため父母のために海軍航空隊に入るのが当然と思い、いずれ一機一艦(体当たりにより敵空母を撃沈すること)こそ本懐とも思っていました。この思いは終戦まで実現できませんでした。母の愛に守られた命と思っています。

私の戦争体験記(朝鮮での生活)

一番町 北村 宜司

(七十九歳)

私は昭和十一年六月生まれ、当年七十九歳の男性です。生まれたのは、長野県更級郡小島田村です。私は昭和十六年に父の仕事の関係で朝鮮に渡りました。父は私と母を残し、朝鮮に軍事製品の設立

の為に先に赴任したようです。

朝鮮に日本人学校ができたので、長野県から朝鮮に(当時五歳)昭和十八年四月、国民学校に入学しました。当時は朝鮮人のお手伝いさんと母とで、学校の送り迎えをされていました。(なぜか分らないが)戦時中一度長野に(母親のお母さんの葬儀)。太平洋戦争が始まったと言うことは後日父から聞きました。

二度と日本には帰れないと父は察していたのでしよう。父、母の実家親戚一同に会い、再び朝鮮に渡った時の出来事は鮮明に覚えています。

軍事産業に関わっていた関係もあり、我が家には常に若い兵隊さんが遊びに来て一泊して帰られた事も…。多くの兵隊さんは我が家を自分の実家に帰って来た思いで過ごしていたのではないかと、今に

して思う次第です。

私は戦争という悲惨さは今にして思うと感じていなかったと思います。

昭和二十年八月、日本国の負けた事は、ちゅうこんひ国民学校の忠魂碑の前で、先生方と、何人かの軍服を着た、

兵隊さんだったと思います。

地に頭をつけ、皆さん泣いておった事、兵隊さんの一人が頭にピストルを当て自決した。

正直、私には理解できませんでした。何が何だか…。今まで送り迎えしてくれていた、「おもに」も、

学校には来てくれませんでした。なんで、なんで、なんだろう。

父の会社の男の人二人が迎えに来てくれ、家に帰った事は覚えています。

父から、戦争は終わった事を聞いたのは夜遅くに

なつてからでした。「なにがこれから起きるか分からない、外出は絶対するな、お前は長男だからお父さんの居ない時は、母さんと泰子（妹）守れ」そう言い、会社に戻りました。

現地で召集された家庭の妻や子供達の日本に帰るにはどうしたら良いのか、泣きわめき声が家じゅうに響き、事の重大性を感じた。

社員と家族の面倒をみながら、私たち家族が荷物をまとめ、貨車に積み終わり引き上げる事になったのは、会社の社員と家族全員が日本に帰った後、日章旗が消え星条旗が掲げられた九月九日。その時初めてアメリカの国旗を見た。もうここは、アメリカの領土、日本は負けたのだ、事の重大さを感じとった…。

静まり返った官舎で親子四人、朝鮮での食事をし

たのを覚えている。父は「コウリ」に着る物や食べる物を詰め、腹巻とゲートルにお札を隠し、おれは、水筒二個をかたにかけ、リュックに何が入っているか、重かった。母も大きなリュックを背負っていたことは覚えている。妹の手をしつかり握り、駅に向かった。どの列車も、人、人。列車の屋根までも、人であふれていた。とても列車には乗れない。

そんな時、父の部下だった朝鮮の若者が五人、私たち家族を助けてくれた。牛で荷車を引かせそこに私と妹、母、それと同じく日本へ帰る日本人家族……。どこを、どう移動したかは、私には分からない……。日中は歩けない。荷車がめだつとの事。

何度か、現地人が私たちの荷物を取ろうとしたが、朝鮮の若者のおかげで難を逃れる事ができた。トウモロコシ畑に隠れ、とにかく歩いた。昼夜となく、

歩いた……。途中、何人かの死体も見た。うずこまり、動けない人、親にはぐれた子、多くの悲惨な光景を見てしまった。

これが敗戦なのか……。いちいち、他人の事など、かまっておれない。自分と妹を必死に親からはぐれない様を守る事で、後は何も考える余裕もなかった事は確かだ。

どのくらい歩いたのか。何日かかったのか……。いつの間にか、付き人だった朝鮮の若者も、水源と言う町に着いた時はいなかった。ここから初めて汽車に乗ることができた。

凄い人。とにかく汽車に乗るのも大変。屋根に乗っている人、人人。何とか私と家族は車内に潜り込めた。どうしたんだろうか、あの時は。オシッコは。今思い出してみるが、どうだったのか、思い出せない

い…。

何日過ぎたのか、釜山の港に着いた事は確かだ。港の見える学校だったと思う。毎日のように雨が降っていた気がする。大きな船が停泊していた。雨に、もやっていた。

私の戦争体験記（引き揚げ後の暮らし）

一番町 北村 宜司

（七十九歳）

毎日のように父は、港に出向き、日本に帰る船を探していたようだ。軍人優先、民間人は乗りにくかった。

どこでどう話をつけてきたのか、父は小さな漁船を見つけてきたとの事で、何人かの日本人と朝鮮を離れることができた。ポンポン凄いい音だった。船

底に沢山の引揚者、俺は船長室にいた。上から船の上を見ると、甲板はテントで囲われていた…。

台風のような風と波、どこを見ても海^{また}又海、波しか見えない…。途中小さな港に停泊、燃料補給なのかどうかは、俺には分からなかった。

後日父から聞くには、韓国の漁船で^{やみふね}闇船だったようだ。日本の領土が見えたのはいつだったか…。見えて居ながら、いつこうに下関の港に入れない。確か夜中だった気がする。朝、目が覚めた時は、港の土間に寝ていた…。ボロボロの服、着物を着ているが男みたいな人、みんな元気がないようす。

父は長野まで帰り着くために、乗れる列車探しに我々から離れた時、少なくなっていた。取られる。日本人しかいないはず、ここは日本国。どうして、俺はしやくにさわった。

下関からどこを通り帰ったのかは覚えていない。汽車の窓から乗り降りした事だけは覚えている。途中、腹が減ってジャガイモを生でたべたこともあった…。

何日過ぎたのか、朝鮮を出てから、曜日も月日も覚えていない。長野駅に着いた時は、小雪が舞っていた事は覚えている。真っ暗な外に小雪がきれいだった。

母の父親が荷車を引き、我々親子を駅に迎えに来てくれた。母の実家に着いたのは何時だったのか…。目が覚めたのはもう薄暗かった。その時のご飯の美味しかった事、今でも覚えている。

日本に帰って来てからの方が、私も父も辛い思いをしたと思う。父の気持ちは知る由もないが「他界^{よし}」。私は朝鮮での二、三年の生活より、日本へ帰って来

てからの方が辛い毎日だった。教科書はない。洋服もなく、靴もない。冬の長野は朝鮮より寒さを感じた。学校では両親がれっきとした日本人でありながら、朝鮮人、朝鮮人、お前の親はスパイ、だから日本は負けた…。なんで、俺がこんな目に合わなければいけないのか。常に、従兄弟たちにも罵声^{ばせい}を浴びる毎日、語りつくせない子供の頃だ。

父も、母の実家での私たちの生活を感じ取ったのか、春、新学期が始まる前に、父が育った下伊那、大鹿村に墓参りしながら、新天地を見つけて来てくれた。現在の私の本籍地、伊那大島松川町だ…。戦時中、東京の歯科医家族が疎開していた家だったそうだ。（後日、父に聞いた）電気も外の窪地^{いり}の湧水が井戸替わり。六畳八畳十畳の囲炉裏^{いろり}の間の、小さな家だった。でも俺は嬉しかった…。誰に気兼ねす

ることなく親子で暮らせる、本当に嬉しかった。小学校五年生、長野の学校と違い途中転校でなく、だれも、いじめる人もいず、昼の弁当も、似たりよつたり、引け目を感じなかった。

教科書は、当初は墨で塗りつぶされた教科書、新聞紙大の大きい印刷された教科書を、自分で切り、一冊の教科書を作った覚えがある。

間もなく終戦記念日。間もなく、夏の高校野球。戦後、バットも、グローブ、スパイクも、高額で買えなかった時代に、甲子園に出た。お米を持って…。勝ち進む事は、父兄に大変な負担をかけた。早く負けて帰って来てくれ、などと言われた時代だ。そんな青春時代を過ごした。

ただただ、よくぞ両親は私たち子供を一人残らず無事に日本に連れて帰って来てくれた。そして食糧

の無いころ、よくぞ育ててくれたことに感謝。悲惨な戦争はすべきで無いことは誰しも解って居ると思う。言葉一つで人も殺せる。試してみたくもなる。ゲームだけでは満足できず…。こうしてパソコンで文章を打っている我々の年代では、まず綴つづがおかしいことがある。

今年も終戦記念日は雑炊を食べよう。

思い出したくないが、やはり自分が今ここで生きておれる事に感謝し、悲惨な戦争はすべきでない。

昭和二十年東京大空襲

一番町 町田 秀三

(八十二歳)

昭和十九年、私は渋谷区笹塚小学校六年生でした。東京も空襲が多くなって来ましたので、三年生以上

は疎開で、富山県東砺波郡の瑞泉寺と云う寺に移りました。

昭和二十年、六年生だけ中学入学があるので、三月に東京都渋谷区笹塚に戻りました。

私の家は、甲州街道（二十号線）の北側の道路沿いで電気店を営んでおりました。疎開に行く前は、道の北側南側両方に商店と家が並んでいましたが、帰って来たら道の南側の家はすべて壊されています。空襲により火災が広がるのを防ぐため、破壊部隊というのがきて、戦車みたいのが、ロープで家を引っばって順番に壊していました。道の北側の人たちは、南側の家を壊したあとに防空壕を掘りました。空襲警報のサイレンが鳴ると、私と母は防空壕に入り、解除になると又家に戻りました。

B29（爆撃機）から落とされたのは、笹塚地区

では爆弾ではなく焼夷弾しょういだんでした。空中を花火の様に火がついて落ちて来ます。その数はかなり多く、町全体が夜だと明るくなる程です。

私と母は、（父と兄二人は軍隊に入っていたので）防空壕の中から焼夷弾で明るくなっている我が家を見ていました、母は壕の中に座り、私が首だけ出して、家は大丈夫だよと母に伝える役でした。町中の半分以上が焼けた様です。

焼夷弾の数があまりに多いので、中には直に頭に当たって死んだ人もいたと聞いています。防空壕のまわりは、大根、なすを作っていた記憶があります。（余談ですが―その畑に下肥しもこえ（天然の肥料）を運ぶのに、棒を私と母でかつぎ、真中に桶を吊つりました。が、母と私では背の高さが違うため、桶が私の方に下がって来て、ゆれるとしぶきがかかるので、母が

桶をかついだ時の歩き方をやって見せてくれて、二人笑ったのを思い出しました)

三月の東京大空襲のあと、私は世田谷区の千歳中学に入りました。中学では体育はなく、当時は教練でした。年配の元将校から銃剣術じゅうけんじゅつと手榴弾しゅりゅうだんの投げ方を教わり、手榴弾は数米メートル先に、地面に輪をかいて、そこに入ると合格でした。

中学では空襲警報が鳴ると授業を止めて、帰宅しましたが、授業が中止になるので私達は喜んでいたら、元将校が「お前達は日本の子か」と怒られ、スコップでたたかれました。

その帰宅途中(学校から駅までの間)で、戦闘機(P51?)から機銃掃射を受けました。ダダダダの音と共に、私共の後ろから行く先にかけて、砂ぼこりがたちましたが、その時は何であるのかわか

りませんでした。今になれば当たらなくてよかったと思っています。

なお
(尚、昭和二十年は十二才でした)
(疎開地での話の方がたくさんあります)

私の思い出

曙町 横田 照夫

(八十五歳)

それは、大東亜戦争の事です。昭和十五年八月のある熱い日だった。芝区白金台町から(今の港区田町)、小さな店に奉公人としてきました。親方とおかみさん、女の子三人と男の子一人の家族六人で、その日から食事を作るようにと親方からいわれて台所に行ったが、何事もわからず、泣いて泣いて一日が暮れて行く秋頃だったと思う。紀元二千六百年

旗行列の中に親方と居た。大人も子供も皆うれしうである。

突然親方が、お前夜学に行けといわれてびっくりした。小石川区の小学校四年生で皆私と同じ奉公人である。花街の人々、自転車店や八百屋、酒店米店と色々である。朝五時頃から夜九時頃まで、皆一生懸命働いて生きている。

昭和十六年の正月もすぎ、職人たちは、戦争の話をしようになった。私は仕事、掃除でそれどころではない。今が戦争である。春がきた。その頃から食べ物が無く毎日が空腹で居る。ある日、私が風邪をひいた時、おかみさんが生卵を飲みなさいとくれた時、おかみさんの顔が、お母さんの顔とかさなり涙がどつとでてきた。まだ十一歳だ。

夏もすぎ、秋もすぎ、やがて十二月八日だ。私の

誕生日だと思ったら、ぎよくおん玉音放送で米国と英国との戦争を耳にした。ラジオで真珠湾での大勝利と放送。これでこの戦争は勝つと思った。毎日毎日大勝利と放送だが、一日一日が長く、昭和十七年春、私に一大事がおきた。自転車と、リヤカーをとられて、親方からひどく叱られたが、涙もでない毎日がつづく。それどころではない。日本の空に、大型の飛行機が飛んできた。日本にもまだこんなに大きな飛行機があるんだと思った。それが初めて見たアメリカ軍機だった。東京も爆弾と焼夷弾をおとされたと聞かされた。腹が減る日がきた。食べ物は床とこイモ、こうりゃん、カボチャ、いものつる。とうもろこしの粉とわずかな米、塩、味噌。油もない。今は大変である。

南の島では日本軍の敗まけいくさの話も聞く。毎日

のように空襲爆弾、焼夷弾が落ち、日本のいたる所が焼けの野原だった。大日本帝国どころではない。その日の食事も無い日もあった。勇気だけでは生きられない。そんな中でも、親方とおかみさんは私に食べ物くれた。一生の恩人である。

日本がこんなに家が焼かれ、人が死んで行くとは思ってもみない。明日は自分だと思う。日本が戦争でこんなにひどくやられるとは思ってもみなかった。

東京全体が火の海だ。とくに下谷、上野で多く人々が亡くなったと聞いている。小石川の後樂園には、戦争中は高射砲部隊がいて東京にB29が飛んでくると高射砲を打つが、弾がとどかないので、その破片で私は左足の薬指に大けがをした。あと10cmで頭に当たっていれば、死んでいたかも知れない。

その破片は今も持っている。毎日が生きるのに一生懸命だ。

四月五月も毎日空襲で暮れて行く。南の島では玉砕のニュースも聞いている。空には日本の戦闘機の姿もない。B29およびP51戦闘機が、自由に飛んで居る。もう生き地獄だ。八月六日に、ピカドンという新型爆弾が広島に投下されて、大勢の人が焼け死んだと聞いている。長崎でも大変。戦争末期だと人はいうけど、日本もおしまいだ。悔しい。

八月十五日。玉音放送で敗戦の知らせ。悔しい思いで聞いた。大勢の人にまじって、皇居に行つて玉砂利をふみながら涙を流した。もう今迄の記憶が無い。毎日が無である。明日からは、自分の為に生きる。

秋のある朝、家具組合から進駐軍かまぼこ兵舎作

りに行ってくれと知らせが入り、親方が「照夫、お前が行け。」といわれた。今の外堀通りの三宅坂で、アメリカ軍のかまぼこ兵舎造りに行った。これが私の人生を大きくかえた。私の一生の思い出になった。進駐軍兵舎に今日も職人五人と兵舎つくりの一生懸命働いているとある日、兵舎に呼ばれて行っておどろいた。見る物がすべて初めてである。

東京は明日に向って動き始めている。

今の私は、人生最高の幸せです。

戦中・戦後体験記

栄町 井口 法雄

(八十二歳)

昭和八年生まれの私は、昭和十四年から二十年までの小学生生活を思う時、飛行機のガソリンとなる

松根を山に行って掘り出すとか、白虎隊の戦いの剣舞の練習をしたり、竹槍でわらの束を突き刺すことなどを毎日させられたものでした。たば

ぎよくおん

昭和二十年八月十五日の玉音放送は、雑音で聞き取れませんでした。が、まわりの人の「戦争は終わった」という話で、空襲警報はもう聞かなくてもよいと思いました。しかし大人の人は、「鬼畜米英だから何をされるか」と不安気でした。間もなく私の住んでいた広島県竹原市の沖にある大久野島の毒ガスを処理する為に、米英オーストラリア兵がどつとやってきて、洋裁学校の建物に住み、毒ガスを処理していました。ある時、兄から教えてもらった「ギブミーチョコレート」を米兵に言って、チョコレートをもらったことを今でも覚えています。私は中学校に入る為に、試験を受けたのですが、試験官が、

スキーをしている外人の漫画の絵を示して、感想を述べよという試験でびつくりしたものでした。

当時食物は、コウリヤンの粉とか麦のしぼりかすや雑草を茹^ゆでて食べるなど大変でした。父が煙草を吸っていましたが、私が英語の辞書の紙で、煙草の葉をうまく巻いて仕上げるなど、いろんなことをしていました。

中学校生活で、今でもわからないことがあるのですが、農業関係の先生が「稲の植え方が悪い」とひどくおこられました。一所懸命植えているのに何故おこられるのかと不満でした。だから人をしかる時には、わけを言って話すべきだと思ったものでした。

戦争中に、蒸気機関車の列車の海側の窓を全部閉めさせていたのは、大久野島の毒ガス製造を知らし

めない為だったのでした。

断片的な話しをあれこれ書きましたが、いまだに忘れられない戦中・戦後の苦い思い出です。

昭和二十年四月十三日の東京大空襲

若葉町 布目 雅之

(八十二歳)

この日の夜半、B29から焼夷弾が東京下町に落とされ、私達親子六人は王子電線線を越え、焼跡にのがれました。

当時、私は中学一年生。東京都荒川区町屋二丁目に双子の一人として生まれました。父は深川区本所にあつた海軍省指定の町工場に永く勤め、社長の信頼を得て、町屋の地に家を建て平和な暮らしをしていました。隣は造花の作業所で、祖父も元気にそこ

で働いていたようです。家は、路地の奥にあり、近所の子ども達の格好の遊び場で、ベーゴマやビー玉、メンコ遊びに、また、週一回、紙芝居がやってきました。

昭和十八、十九年頃だと記憶していますが、戦争激化に伴い、東京の上空にB29が飛んで来ました。やがて、二機、三機と機影が多くなり、日本の高射砲は全く届きません。

昭和十九年、東京の小学生は“学童疎開”といって、地方に疎開。私の学校は福島県伊達郡飯坂温泉の亀屋旅館が疎開地でした。毎日、温泉に入れましたが、二ヶ月程で、私は体調をくずして東京に帰るようになりました。兄は翌年の三月に家に帰ってきました。

東京はB29の飛来で警戒警報がやがて空襲警

報となり、灯火管制といって、電気傘に黒い布を掛け、電気の灯りが外に洩れ^もないようにしました。その頃には、家の床下に防空壕を掘り、壕内に隠れました。三月九日～十日にかけて東京の下町、本所、深川を中心に大空襲があり、父の工場も消失、会社は解散となりました。B29の落とした焼夷弾は「シュル・シュル・シュル・・・」と不気味な音を立て、私達は防空壕で耳をおさえていました。

四月十四日、焼け出された一家は、三河島の兄の友達の家に一ヶ月程寄留した後、長男の疎開先の埼玉県飯能町に移りました。そこは駅から四km程奥の、山の中腹にある寺の本堂の脇の部屋です。食糧も乏^{とほ}しく、配給はトウモロコシの粉やジャガイモなどです。ある日、ジャガイモを擦^すりつぶしてどんぶりに入れて食べていたら、「布目さんちは、白米を食べ

ている。」と兄嫁に言われてしまいました。親はリユックをかついで、狭山の方にカボチャの買い出しに行くなど、食べ物の確保に苦労の連続だったようです。

八月十五日、飯能で終戦を迎え、十二月に母親の実家があった埼玉県の春日部市（当時粕壁町でした）に転居。二番目の兄は、結核で、二十歳で亡くなり、親子五人の生活が始まりました。その春日部市で旧制中学、新制高校、大学、就職と暮らしてきたが、親の苦労は計り知れません。定まった職もなく内職などで私達子どもを育ててきたのです。

戦争中、幸いにも親子、生き延びてこられました。都内では、多くの人々が焼け死んだりしたことを思えば申し訳ない気持ちです。

これからの短い人生、日本を再び戦争の惨禍にさ

らさないように永遠の平和を願い、活動していきたいと思います。

集団疎開の記

富士見町 橋本 康司

（八十一歳）

「つぎの世を背負うべき身ぞ逞しく正しく伸びよ里に移りて」。時の皇后の御歌に送られて疎開学童の一人として勇んで静岡に向かったのが昭和十九年の夏。サイパンは陥^おち空襲も迫ると聞かされても、子供心（小五）にはまだとても実感はなく、なにか修学旅行にでも行くような気持半分で、戦闘帽と木刀に身を固めて汽車に乗り込んだのを覚えています。

駅々で列車に乗り込んでくる出征兵士を見送る

万歳の声。線路沿いには日の丸を振る人々の波。あ、日本は国を挙げて戦っているんだなと、緊張感はそのあたりから始まったのでしょうか。

駅前での地方の方々の歓迎、白いご飯（贅沢ぜいたく）の夕食も済んで、さて住み込むことになったお寺での初めての夜。駅から聞こえて来る汽笛は妙に物悲しく響くもので、本堂に敷かれた布団のあちこちからすすり泣きの声が起こって、翌朝一番に先生から「お前たちはそれでも日本の少国民か」ときびしいお叱言を頂戴ちやうだいしたものでした。帰る家もなく、頼りの親もいない初めての集団生活。寺の中はあつという間にボス猿を中心とした「高崎山」の世界と化し、毎日は子供なりにそれぞれの身の置き所を探る日となります。勉強もそこに掃除、水汲み、配膳と次々に回ってくる当番。万が一にも「利己主義

だなあ」と云われた途端、周囲の目は白く変わる。教師の体罰よりも恐ろしい瞬間です。耐え切れず脱走を図る子供も出てくる。朝の点呼で一名不在が分かった時、教師はもとより寮母から子供たち総出で寺の内外を隈なく探した末、ついに押し入れの中に潜ひそんでいたその子供が見つかりました。そのいわば『弱き子』は、見つかった瞬間に普通の彼とは様変わりわりの形相で、隠し持っていたナイフを振かざす。一同思わず後ずさりして見守る中、一人の子供が咄嗟とつさに割箸わりばし！を振りかざして「来るか」と一歩迫れば、脱走犯は泣き出して逮捕劇は呆気あつけない幕切れとなりました。結局その子は親元に引き取られて縁故疎開へ。殊勲ほの割箸君は、「あいつは勇気がある」と、当時一番の褒め言葉を得て一躍ボスの仲間入り。つまりは「立派な兵隊さんになる」のが人の値打ち

の全てだったのです。

ともあれ「お国のために死ね」と言い続けていた先生が、ある日を境に「一番大事なのは人の生命」と云い出す。ラジオを聴けば「この一戦に勝たざれば祖国の行く手いかざらん」が「粋なジャンバーのアメリカ兵の影を追うよな、…ああ東京の花売り娘」と変る。

なにか言い募る人（リベラルなマスコミも）を見ると「あんた、今そう言ってるんだろ？」と何事もナナメにしか見られない性癖は、もとはこの疎開体験あたりにあるのかも知れません。

一九四一年十二月八日

富士見町 野村 祥子

（八十三歳）

“帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋においてアメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり”という放送が流れた。私は小学校二年生だった。父は軍人であり、開戦に伴う転任で、九州久留米に移転し、国民学校六年で終戦を迎えた。ほどなく父はフィリピンに出征し、留守宅では食料もなくなり、庭の芝生をはがして、サツマイモやカボチャを植え、サツマイモは茎くきまで食べた。

学校では授業どころではなく、小学生でさえ動員されて、ドングリつぶしや落穂拾い、竹槍訓練たけやりが日常であった。ある時、近くの農家の方に招かれて、白米のご飯をごちそうしてくれたのだが、胃腸が受

け付けず、下痢をしてしまった悲しい思い出がある。

空襲が激しくなり、登校時に五〇センチ位横を、機銃掃射された。地面に伏せたが、恐怖は感じなかった。感情というものを失っていたのだと思う。二階のベランダに焼夷弾が落下した時も、恐れもなく防空頭巾にくるんで庭に投げ落とした。近く焼け跡には電信柱が焼けたようなものがいくつも転がっていた。それが電信柱ではなく、死体だと言われても、実感がなかった。今思えばほんとにこわいことである。長崎の原爆のきのこ雲も家から見えた。

こんな子どもだったが、毎朝、朝礼で歌わされる軍歌、「海行かば水漬く屍^{みづ かばね} 山ゆかば草むす屍^{おおきみ} 大君の邊にこそ死なめ^べ かえりみはせじ」は、級長^{ゆえ}故に最前列にいても口を開くことが出来なかった。父はフィリピン、兄二人は海軍兵学校にいて、特攻

要員だった。私には残酷すぎた。勿論先生からは呼^{もちろん}

び出されて手ひどく叱責された。「将官（父は陸軍少将だった）の令嬢が何たることか!!」と。

そもそも父は軍人を望んだのではなく、生れ落ちてすぐに両親を亡くして長兄に育てられた身、向学心旺盛であつたが、苦学しても中学迄^{まで}、あとは官費の陸軍士官学校に入るしかなかったという。生涯リベラルな人であつた。現在の自衛官の方の中にも同じような方がいないだろうか。戦争法案をどんな気持ちで見えておられるのだろうか。それ以外に生きる途がない方もいらっしやるのではと考え込んでしまう。

フィリピンの激戦地で、部隊長であつた父は指揮官として死刑を求刑されたが、何と米軍の司令官から助命嘆願書が届き、一命をとり止めて帰国した。

理由は、米軍士官の家族が捕えられた時、家族は戦闘員ではないからと送り返したことを感謝してのことであつた。

兄も特攻艇に乗り込む寸前、終戦をむかえ一命をとり止めた。二人共、二度と戦争はしてはいけないというのが口癖だった。長兄は戦後、人の命を救うべく、医の道を選び整形外科医として生涯を終えた。次兄は純粹に海が好きと外国航路のタンカーの船長をつとめ上げ、パイロットを経て現在も健在だ。二度とあんな時代があつてはならないと強く思う。

言論の自由がない時代

富士見町 矢船 けい子

(八十一歳)

私は昭和十年、満州（現在の中国東北部地域）で生まれました。四年生の夏に終戦を迎えるまで、表面的にはおだやかに暮らしていました。

四年生になったので「君が代」と「海ゆかば」の意味を先生に習いました。

「草むす屍かばね」「水逝く屍みづ」そして天皇のために「省かえりみはせじ」と言うこと。海中や草原での自分の腐乱した死体を想像すると、恐ろしさに震えそうでした。しかしその頃は、怖いと思うことさえ禁じられていたのです。周りの人たちも怖いと言えませんか、黙っています。みんなは強く見えました。私だけが怖いと思っている、自分を『情けない人間だ』『弱

虫だ』と思い、決して先生に怖いと思っていることが知れてはならないと思い、歯を食いしばりました。

この、『言論の自由』や『表現の自由』を制限された時代に教育を受けた私達は、自由になった今でも、自分の思っていることを素直に表現できない人が多いのではないだろうか。

また、学校では『鬼畜米英』や『撃ちてし止まん』『欲しがりません。勝つまでは』を、毎日朝礼で繰り返し復唱し、叩き込まれました。

『日本は神の国だから、負けそうになったら必ず神風が吹いて負けないのだ』と学校で先生は毎日繰り返していました。

それに、新聞には、角が生えている米大統領ルーズベルトや、牙のある英国首相チャーチルの似顔絵の政治漫画が毎日載っていたので、アメリカ人やイ

ギリス人は、馬や牛にも劣る人物なのだと信じさせられていました。

さすがに子どもながらにそんなにうまく神風が吹くとは信じられなかったのですが、アメリカ憎しは叩き込まれました。

ある雨上がりの下校中のことです。まだ幼稚だった私達は、細長い水たまりと丸い水たまりを、ルーズベルトやチャーチルに見立てて、エイヤ！エイヤ！と踏みつけて遊んで帰ってきたことがありました。

泥水を跳ね上げた服を見て小言を言う母に、一生懸命にやつつけたのだと得意げに話しました。その夜、それを母から聞いた父は、私を呼んで『アメリカ人もイギリス人もみんな同じ人間なんだぞ。まして、ルーズベルトやチャーチルという人たちは、立

派な紳士なのだよ』と言いました。それまで、考えてみたことも無かった事で、大変ショックでした。

私は『一人でもそのように考える人が居たら日本は負けるから、絶対にそのようなことを考えてはいけない。そう学校で先生に教わった』と父に懸命にくっつかかりました。

私はその時『大変なことだ。父が非国民であることが憲兵に知られたら牢屋ろうやに入れられ拷問ごうもんを受ける。絶対に口外できない。命をかけても喋しゃべってはいけないのだ』と子どもながらに、悲壮な覚悟をしたものです。

植民地満州のこと

富士見町 矢船 けい子

(八十一歳)

私が覚えているのは戦争末期ですが、新京(現長春)という街は満州国の首都で、満州中央銀行の本店がありました。本店は石造りの立派な建物でした。総裁は日本人で、副総裁が満州人でした。

中国人が多く住んでいるごみごみとした旧市街とは離れた郊外に、この中銀の社宅がありました。整然と碁盤目ごばんめに並木道が綺麗きれいに伸びていて、二階建ての集合住宅が平社員用として並び、課長級が庭のある一戸建て、部長クラス以上の家はさらに広い庭と広い屋敷でした。

診療所もあり、公園もあり、中銀クラブという素晴らしい建物もありました。そこではパーティーや

会食が出来ました。理想的な街並みでした。この住宅街は、アメリカ人のフランク・ロイド・ライトの設計によるものですが、実際にはその弟子の遠藤新という人の設計です（帝国ホテルや自由学園のホールなどで有名）。

我が家もその一つで、暖炉だんろのある応接間や畳の日本間などが段差になっていて、応接間に隣接した書斎がカーテンで仕切られており、少し高くなっている、音楽会ちやうどごっこに丁度良い舞台にできるようになっていました。そこを使って母がよく家族の音楽会ごっこをしました。

母が『椰子やしの実』を歌い、姉妹の上の三人、私が九歳、妹が七歳、弟が五歳でしたが、歌いながら踊ったり、弟が戦争推進の演説をしたりしました。『兵隊さんは、今でも戦っています。私たちはぜいたく

を言うてはいけません。一粒もご飯をこぼさないで食べましょう』などとたわいもないものですが、大真面目な演説ふうで、今思うとまるでチャップリン演ずるヒットラーのようでした。

暖房のきいた家で寒さ知らずでした。満人まんじんが定期的に石炭を地下室に入れてくれて、困ったり不自由なことは何一つありません。今に無くなったら困ると思つて、鉛筆や消しゴム、ノートなども引き出しにいっぱい買い貯めをしていました。砂糖も一斗缶にいっぱい入っていました。

近くの大通りには市電が走っていて、きれいな電車は日本人用で頻繁ひんぱんに走っています。満人用の電車は来る回数が少ないので、大きな荷物を背負った人たちが鈴なりにぶら下がるように乗っていて、落ちはしないかと子どもなりに心配していました。

ある日、新聞に満人の母子が日本人の自動車に轢かれて亡くなった記事が出ました。車の前に飛び出してきたからだと書いてありました。父が、「これはおかしいな。きっと日本人の悪い奴が、いたずら半分に轢いたかもしれない」と話していました。今では、基地の街でアメリカ兵の車に日本人が轢かれたりします。そのたびに、かつて日本人も同じことをしたのでは、とこのことを思い出します。

社宅街の周りは草原になっていて、小さな小屋を建てて満人のおじいさんが、ツェンピンを焼いてくれます。薄紫色の超薄に焼いたツェンペンを買ってきて、野菜や肉の炒めたものを巻いて食べたおやつはとてもおいしかったのを覚えています。ツェンペンの材料は、小麦粉や高粱こうりやん、粟、大豆の粉を混ぜたものです。

一部の日本人にとって天国のようなこの国は、満人たちの犠牲の上に成り立っているということ、加害者であったことを私はその後、思い知らされる日が来ました。

開拓団の人と女中

富士見町 矢船 けい子

(八十一歳)

『産めよ増やせよ』という国策のもとに、我が家には、次々と弟妹が生れて、私と十歳下の弟の間に七人の子どもがいました。

祖父の出身地熊本県から、三年毎ごとに女中さんを頼んでいましたが、戦争の末期には、内地も男手が無くなったことと、船がアメリカの潜水艦にやられて沈没したりして危険になったことなどで、来てくれ

る人が見つからなくなり困っていました。

開拓団から女中さんをお願いすることになり、細川和子さんと加藤光枝さんが来ました。富山県と福井県の村から来た開拓団でした。二人は開拓団の高等小学校を卒業したばかりで、十四歳だったと思います。まだ幼さがあつて、母が留守になると一緒にかくれんぼをしたり、目隠し鬼をしたりして遊びました。

細川さんのお父さんが挨拶あいさつにみえて、「お国からは、良いところだと言われて開拓団に来たものの、冬は凍土となって作物が出来ない。生活は大変苦しい。この子たちの給料が頼みの綱です。とてもありがたい」と言われました。

昭和二十年の八月に入り、六日に父が極秘情報として銀行で聞いたことには、「広島に一発で全市が

無くなってしまうような爆弾が落とされたそうだ。

日本もいよいよ負けるな」と言いました。またもや私は、父に学校で教わった通りに神風が吹くことを言って食ってかかりました。少し、心理学を勉強していた父は、私が先生の言うことを親よりも聞くようになったことを、「社会性の芽生えてきた時期になったものだ」と言って成長を喜んでいました。ところがその三日後に、長崎の原爆を知らず、ソ連の参戦によつて、この家を捨てて、逃げなければならなくなったのです。

九日に総裁に呼ばれた父は命を受けて、銀行員で召集されている人の家族、妻と子ども達約三百人を内地まで送り届ける役目を仰せつかったのです。

とるものもとりのあえず、家屋や家財を捨て、持てるだけ荷物を持って、貨物列車で南下することにな

りました。

そのとき、和子さんと光枝さんには、「今は北に向かつて帰すことは危険だから、内地まで一緒に逃げよう。きつとお父さんやお母さんも内地に帰ってこられて会うことができるだろうから」と、話して聞かせて、2人も了承して一緒に逃げることにしました。

それから一年間あちこち流浪の末、やっと内地の土を踏むことが出来たのですが、翌年、和子さんのお兄さんと光枝さんの弟が、帰ってきて会うことができました。そして、二人からは、「団のみんなは小学校に集結して、火を放って自決をした。若い男の子は逃げるように言われて、取り囲まれた暴徒の足下を夜陰に紛れて這^はって逃げて、飢えと寒さに苦しみなながらも、二年かかって内地にたどり着いた」

と聞きました。その後、この若者たちは長く炭鉱で働きました。苦しい労働で戦後の日本経済の成長を支えたのです。

ずっと後のことになりますが、和子さんが老人ホームで働いた時、栄養士の資格を取ろうとして、小学校卒業の証明が欲しいと引揚^{ひきあげ}援護^{えんご}担当の厚生省に掛けあったそうです。厚生省の担当からは、そんな小学校があつたという証明をせよと言われて、結局卒業証明がもらえず、資格も取れなかったそうです。結局お給料も安いままに働くことが続きました。後で聞いた私は、厚生省という所はそんなに冷たいところかと、びっくりしました。

東京大空襲体験記

富士見町 石川 道子

(八十三歳)

毎年七月には各地で花火大会があります。今年も七月末に隅田川で美しい花火が上がりました。その隅田川には、七十年前に多くの人々が空襲により死傷したという悲しい思い出があります。

昭和二十年三月十日の午前二時過ぎに、襖がはふすまずれ、目が覚めて、お勝手の窓ガラスが真っ赤に染まっているように見えました。急いで玄関まで行きました。私は体が悪くて歩けなかったので乳母車迄まで急いで行き乗りました。母が乳母車を押し、四歳の弟の手をつないで隅田川の橋（厩橋）うまやばしを渡ろうとした時、警備員がロープを張って、渡ってはいけな
いと止められましたけれど、大きな後ろにあるビル

が焼けているので、この場所にいたら死んでしまう
と判断した母は、ロープをくぐって渡る決心をした。
しばらく行くと後ろから、凄じ叫び声がしていました。
た。橋を渡らなかつた人々が倒れている姿を見まし

その後、私達三人は、強風のため前に進めず、乳
母車は前に倒れましたが、その道路は火の海のように
に見えました。橋を渡った私達は、工場の倉庫で体
を休めましたが、また目の前から炎が出ましたので
別の広場に行つたところ、その場所には多くの人が
集まっていました。このような悲しい体験は二度と
したくありません。

その後、私達は浅草三筋町の自宅へ帰りましたが、
焼野原で家はありませんでした。その時、除隊後夜
の勤務をしていた父と出逢いましたが、私達の顔を

見た父は、三人の顔は真つ黒だよと驚いていました。

ある老人の戦争体験

曙町 上田 宏

(八十六歳)

戦後七十年が過ぎた。あつという間の七十年。長くもあり、短くもありと云う七十年。

昭和二十年のある日、私が住んでいた東京滝野川では、高々度にB29の六機編隊が、悠然と我が物顔に闊歩^{かつぽ}していた。味方の戦闘機の影は全くない。わずかに帝国陸軍高射砲部隊が迎撃するが、B29には遠く及ばず、敵機には全く影響ない。

これは全くの私見であるが、戦争にしても勝負事にしても、同等の戦力を持った者同士が戦略と知略を駆使して対決するのが常識だと思うが、戦力に差

がありすぎては、問題にならない。日本は無謀な戦争をしたと思う。

硫黄島指揮官の栗林中将は、かねがねご子息に、絶対に国力に差があるアメリカとは戦っては駄目だと話していたと聞いたが、正に卓見であろう。

七十数年前、私達小学生は、例外なく軍国少年であつた。私は小学校二年生の時から、支那^{しなん}事変を体験している。級友の父親が、戦地に行つたと聞いた。五年が経過して小学校六年生の冬、太平洋戦争に突入した。東条首相は、「国民は一丸となつて国に報い、軍の指導のもと国に殉^{じゅん}ずる時は今である」と、華々しくぶち上げた。

当初はいわゆる破竹の進行で、子供心に、ひよつとしたら勝つんじゃないかと思つた時期もあつたが、アメリカ軍は飛び石作戦と称して、ソロモン群

島から反撃を開始し、徐々に失地を回復して、最後には沖縄まで進攻して来た。

私達軍国少年の生活も、正に軍事色一辺倒で、配属将校の指導のもと、週四〇五回、軍事教練を課せられた。半年に一度は査察と称して代々木練兵所での総合訓練があり、又、^{また}習志野野営場、富士の野営場などに、三八式歩兵銃をもって訓練に参加した。

それから一年を通しての勤労働員で、学業は全くなし。私は山梨へ疎開して、終戦時、東京に居なかったが、東京に居た仲間は軍需工場できびしい体験をしたそうだ。

もう少し早く生まれていたら、私も戦場で命を落としていたであろう。平和の有難さ、尊さに感謝して、残された何年かの年を送りたい。

始めてはならない戦争

錦町 小高 辰雄

(八十七歳)

戦争では、従兄弟は結婚してすぐ、老婆と妻を残して戦場へ。^{また}又、^{しょうい}傷痍軍人となり、子供に恵まれず^{がん}癌で早世した義兄や、^{なんきん}南京虐殺を知っていた義兄。戦死者こそ出なかったものの、心や体に大きな傷を負った人ばかりです。幸いにも我が家は、今回の太平洋戦争では年齢層がずれていたため、何か申し訳ない気がします。しかし、もし戦争が長引いていたらと思うとぞっとします。始まってしまった戦争は、勝つしかないと思っています。私は、子供心に死ぬまで戦う思いでした。

小学生の頃は戦争も段々激しくなり、学校も軍国調となって、朝礼は霜柱や薄氷のある校庭で、「兵

隊さんの事を思え」とばかり、裸足^{はだし}で朝礼訓話を聞く事が度々^{たびたび}でした。薄氷の校庭に整列をした足跡が残りしました。足が切れるように痛く、泣く子も出る辛い冷たい朝礼でした。

中学生（旧）の頃は食糧難の時代。配給制度の米も、代りに腐りかけたサツマイモや大豆も加わり、時には遅配や欠配などもありました。「ヤミ米なしで頑張り、絶命」の報道などありましたが、ヤミ米なしには生きていけませんでした。野草を加えておかゆにしたり、雑炊（増水？）にしたり。何しろ、食は量を増すことでした。空腹に負けて、畑のサツマイモをシッケイする、心のつらさもありました。農繁期には一週間ほど田植の手伝をするのが通例でした。二年になると、勤労働員で農家を手伝う日数も増え、肉体労働で大変ですが、それが楽しみで

もありました。それは「ハラペコに銀飯オニギリ」の満腹感、満足感で、今も忘れられません。

動員中、その日は偶然の登校日でした。昼食時、大多喜城址（千葉県）の高台にある学校を、空襲警報も鳴らないのに、低空飛行で掠^{かす}めて行った米機がありました。このような出来事は初めてです。顔もはっきり見えました。学校中が大騒ぎになりました。これが本土最初の米軍機の来襲でした。戦争が本土に迫ってきた緊張感が張り詰めました。間もなく空襲が各地で起こるようになりました。

戦争も日に日に激しくなり、三年になると学校を離れ、川崎の軍需工場に動員されました。一枚が六〇kgもあるプロペラを抱えての作業は大変でした。作業服は貸与されましたが、油まみれの作業で、終って工場で風呂に入るのですが、帰りに又^{また}その油

まみれの服を着るのが嫌でなりませんでした。

私は日勤の或る^あ日、力仕事の作業中、滑ってプロペラの角に頭をぶつけてしまい、意識を失いました。
頭蓋骨^{ずがいこつかんぼつ}陥没^たでした。どの位^た経ってからでしょう。もうろうと意識を取り戻したのは、担架に載せられて病院の階段を上っているときでした。転んだ時の記憶が全く無く、何も解からない私は「どうしたんですか。ここは何処^{どこ}ですか」と尋ね、又、もうろうとしてしまう有様でした。若かったせいか回復力は案外強く、幸い命は取り留めました。電報を受け取った親は、もう助からない、と覚悟したといっています。

B29による爆撃も回数を増し、或る日の夕刻から、工場も焼夷弾爆撃を受け、寮には高射砲の炸裂した鋭い破片や、隣の寮には爆弾が落ち、死傷者が出たり、対岸の蒲田一帯が焼夷弾爆撃で火の海とな

り、何時^{いつ}ここもやられるか、恐怖心で一杯でした。

防空壕に避難していても、ショックで気持が不安定となり、駆けつけてくれた看護婦さんに抱きつき、「お母さん、お母さん」と泣き続ける友達が出ました。翌日は何もしやべらず、二日目、仕方なく安心できる実家へ送り届けました。

何と言っても、人生最大の不幸な出来事は、戦争です。あつてはなりません。両国共、国民は疲弊^{ひへい}し、傷つき、破壊され、軍人・民間人を問わず多くの犠牲者を出し、残酷極まりない行為で、戦後七十年経った今も、対外的にも国内も、その傷は修復されることはありません。戦争は始めてはならないのです。

湯の花トンネルの悲劇

柴崎町 堤 規子

(八十八歳)

戦争末期になると、立川は米軍の攻撃目標になり空襲警報が鳴る日々が続いた。父は昭和十八年に四十二歳の若さで亡くなり、兄二人は赤紙で兵隊にとられ、乳飲み子を抱える女手一つの母は、生まれ故郷である長野県辰野の実家に、子供四人を連れて疎開した。

私は立川尋常高等小学校を卒業後、立川飛行場に隣接する陸軍航空技術研究所総務部会計課に勤務していた。家族が辰野へ疎開したので、労務課に頼んで辰野から近い岡谷（私達は「三研」と呼んでいた）へ転勤させてもらった。岡谷の三研に転勤した後、立川へ荷物を取りに行つて、岡谷に戻る途中の

中央線車内で悲劇がおこった。昭和二十年八月五日の昼過ぎだった。

八月五日朝、立川駅を発車する頃に空襲があり、列車は暫く駅に待機していたが、どうにか出発した。三日前の八王子空襲の影響で運休していた、新宿発長野行八両編成の列車は、身動きが取れないほど混雑していた。浅川駅（現高尾駅）でも、空襲への警戒から長い間待機していたが、正午頃出発した。列車が、小仏トンネル手前の湯の花トンネルに丁度差し掛かった頃、突然、数機の米軍戦闘機から機銃掃射された。皆、必死に床に伏せていた。棚の荷物もばらばらと落ちてきて、生きた心地がしなかった。列車はトンネルに全部入らずに停車してしまい、機銃を浴びせ続けられた。列車から外に飛び出した人には容赦なく機銃が浴びせられ、大勢の人が

撃たれた。たぶんほんの数分のことだったのだろうが、ものすごく長い時間を感じた。

私は、戦闘機が居なくなってから山の斜面を下りて谷間に逃げた。近くの村に住む人達が戸板を持って助けに来て^{たす}くれていた。私は一緒に逃げた人達と懐中電灯の光を頼りに、お互いに手と手をつないで励まし合いながら夜通し歩き続け、何とか上野原の駅にたどり着いた。上野原の駅から、伯父が居る飯田線の羽場駅まで一晩かけて到着した。桶屋を営んでいた伯父の家に着くと、血まみれの荷物を見た伯母は、「もう荷物なんか取りに行つてはいけない」と涙を流した。無事を喜んでくれた伯母の姿が今も目に浮かぶ。

八月十五日の終戦は、岡谷工業の中でラジオを聴いた。皆泣いた。軍人さんは刀を振りまわして泣い

ていた。兵隊にとられた上の兄は、シベリアに抑留されたが何とか無事に、下の兄は佐久から無事帰つて来た。

十四歳で体験した空襲の怖さ

柏町 菅沼 寛
(八十四歳)

戦争が始まって三年半、日本の敗戦が決定的となる昭和二十年、日本の本土は米軍機による激しい空襲を受ける様になっていた。私は砂川小学校(当時の国民学校) 高等科一年生の十四歳であつた。

或る日、教室の外で作業していると空襲警報が鳴り、米P51戦闘機十数機の編隊が東の上空から西へ侵入して来た。学校の上空に飛来した時、突然南に急旋回し、急降下しながらこちらに向かつてくる

のが見えた。

「危ない、逃げろ」と叫びながら、私たちは近くの小屋に駆け込んだ。と同時に、頭上でバリバリツと機銃掃射が始まった。次々襲いかかる激しい機銃の発射音。恐怖に脅えながら外を見ると、校舎の屋根を掠めるように突っ込んでくるP51の操縦士の姿がはつきり見えた。

学校の南にある立川飛行機工場を狙ったものだったが、身の危険を感じた初めての体験だった。

それから間もない二十年四月二十四日、B29爆撃機により、砂川、立川地区が集中爆撃を受けた。周囲に点在する軍事施設が標的となったのだが、私たちの小学校も壊滅的被害を受けたのである。

この日警報が出て、B29の大編隊が東京方面に向かっているとの情報で、児童は直ちに下校し家へ

帰った。

防空壕に身を潜めていると、やがて猛烈な爆発音が聞こえ空爆が始まった。爆弾が近くに落ちる時には「ザー」という砂をこぼすような音がし、直後に地上で炸裂する。

次々落下してくる爆弾が、私たちを直撃するのではないかとの恐ろしさに、身を縮め爆撃が終わるのをひたすら待った。

警報が解除になり「助かった」という安堵の気持ちで外へ出ると、「学校がやられたらしい」との話が伝わって来た。急いで学校に駆けつけてみると、昨日まで学んでいた校舎は無惨にも跡形もなく破壊され、しかも三人の先生が犠牲になったことを知った。

無事だった先生の指示で、集まって来た仲間と共

に、瓦礫がれきの中から肉片らしきものを拾い集めて焼いた。悲しい思い出だ。

破壊された学校が在ったのは、現在の立川市幸町三丁目である。後日の記録によれば、学校敷地内には二十七発、周囲を含め八十発の爆弾が投下され、一家全滅の悲劇もあつた。

私の空襲体験はこれで終わりではなかった。二十年八月二日未明、今度は私の住む砂川地区（現在の柏町）が、B29による焼夷弾攻撃を受けた。夜中に空襲警報が出たので、いつでも避難出来る様みじたく、身支度をしていたが、近づいて来るB29のエンジン音がいつもと違い、かなり低空を飛来しているように思えた。急いで外に出てみると空が突然明るくなった。照明弾が落とされたのだ。続いて焼夷弾が八方に散らばりながら降って来た。木造の家々は

忽ち炎たちまに包まれ、我が家も含め付近一帯が炎上していった。次々降りかかる焼夷弾。「ここに居ては危ない。とにかく逃げろ」と家族に声をかけ走り出した。

いつ焼夷弾に直撃されるかわからないという恐怖に追われながら、近所の人達も北に広がる畠はたけを目ざして必死に走って行った。

この日の空襲で、砂川六番、五番と西砂川で約百戸が焼失。又、同じ時刻また、八王子市も市内ほぼ全域が焼失する大被害を受けたのである。

夜が明けて自宅に戻った私は、完全に焼け落ちた我が家を見て呆然ぼうぜんと立ちすくんだ。

終戦のわずか半月前の出来事である。

戦場を知らない、兵士でもなかった十四歳の私が体験した空襲の恐ろしさは、七十年たった今でも心

の中に残っている。

命令は至上のもの

栄町 原田 亀太郎

(九十七歳)

昭和六年に始まった満州事変は二年足らずで満州全土を制圧し、破竹の勢いで中国から南方へと進撃する最高期の時代の入隊。軍隊の経験はあるが、戦闘の経験は皆無の飛行機整備部隊。故に文章は軍隊生活の一部分。

入隊すると軍隊も地方と同じで、英語は敵国語として使用禁止となっており、飛行機の各部から始め、部品、工具まで総て日本語に訳されていた。例を挙げると「ハンマー」は「テツツイ（鉄槌）」、ドライバーは「長螺回し」、「エンジン」は「発動機」と言

う具合。

ビンタは毎日取られた。たわいのない一つの例を紹介すると「揮発油」を「ガソリン」と言い「貴様は英語をしゃべった」と「ビンタ」を食らった。「有難うございます」と、通常の返礼をしたものの癢に障り、心の中では「この馬鹿者」と思わずにはいられなかった。半年の教育隊を終えて、咸興の第三十飛行場大隊に配属された。

ここへ来て約一か月、「上等兵候補者」に抜擢された。「上候教育」が始まって間もなく盲腸炎で陸軍病院に入院。手術が終わって一週間後に大部屋に移される。移った翌日、軍医大尉殿の検診があった。検診は毎日行われる行事で、この日も軍医が三人の看護婦を連れて室内に入ると、例によって室長の「気をつけ」の号令で、十六人の患者全員が寝台の

上にかしこまる。これに対し、看護婦長が「休め」の号令をかけると皆あぐらをかく。

軍医殿は、骨折、打撲、凍傷、盲腸炎など、ほとんど退院真近の患者一人一人に容態を聴きながら移動する。私の右横の寝台は一年先輩の某上等兵で、痔の手術の終わった患者。その彼の前に軍医殿が立った。彼は寝台の上に上向きのまま、両手で両膝を掴み、股を広げた。看護婦が男のシンボルにガーゼを載せるのを待って、軍医が股の間を覗き、「息張って」と言った。「ううん」と息張ったが、軍医は「もっと息張りなさい」と言う。彼は前よりももっと、お腹に力を入れて息張った。またも息張ったところで、軍医が納得すれば話しは終わりだが、軍医は再度「屁が出ておかまわん。もっと息張れ」と、命令口調となって促し、顔をお尻の前方、約三十センチ

チまで近づけた。

その時彼は、思い切り「うううん」と、力一杯息張った。とたんに彼のお尻から出たものは、何と「オナラ」だけではない。「大」の緩いのが、蛇口から吹き出す水の如く、音を発てて軍医の顔をめがけて降り注いだ。

軍医は避ける間もなく、顔から胸にかけて真黄色に染まり、見る影もない惨めな姿となった。婦長にも掛かったが、婦長はそれには物ともせず、薬台にあったガーゼと脱脂綿を、わし掴みに取り軍医に渡した。軍医は眼鏡を掛けていたので目には入らなかったから目は見えるらしい。だが鼻と口には入ったらしく、ガーゼの束を顔に当てて咳をしながらドアの方向へ歩き出す。婦長と看護婦一人が軍医の後に続いて出て行く。洗面所へ行ったらしい。残る一人

の看護婦は、散った汚物の始末を始めた。

「これ以上息張ったら糞が出ます」と彼は言いたかったと思う。しかし命令であれば、それは反発と考える。命令というものは厳格で反発はできないのが軍律。ましてや上位も上位、遙か目上の軍医大尉殿である。いくら大部屋でもその時は既に、臭い匂いは部屋中に充満した。映画か芝居なら腹を抱えて大笑いとなり、患者たちは臭い部屋から逃げ出せるが、軍医大尉の無残な姿に言葉は出ず、笑いを泳（こ）えただけで精一杯だった。

夕方、婦長が大部屋に来て『軟便の薬を飲ませたが、あれ程まで柔らかくなるとは思わなかった。この件は誰も心配するな。次はガラスのマスクを考える』と軍医殿が申されたので、皆さんに申し次ぎます。』との婦長の伝言で一件落着。

軍隊は運隊

栄町 原田 亀太郎

（九十七歳）

大正八年に西多摩郡戸倉村で生まれ育った私は、昭和十三年八月から縁あって、立川飛行機の製造部門に入社した。昭和十五年三月に徴兵検査で甲種合格。八月には東京駅に集合し軍用列車に乗って広島に向かった。当時は大戦開戦前で、車内では悲痛な顔をしている者は一人もない。いたって呑気（のんき）なもので、戦死なんてことは全く頭をよぎらず、「国のお金で外国旅行ができる俺達は幸せだ」と皆意気揚々たるものだった。広島で装備品を渡され、輸送船に乗り込み釜山港に到着。初めて嗅（か）いだニンニクの強烈な匂いは忘れられない。

平壤の教育隊で機関工手班に編入された。半年の教育隊終了後、現在の北朝鮮咸興にあった陸軍第30飛行場整備大隊に整備兵として配属された。飛行隊は整備大隊と戦隊に分かれていて、戦隊は戦闘、爆撃などの飛行機を十から二十機占有している部隊である。整備大隊は飛行場の新設や、既存飛行場の整備や警備、飛行機燃料の保管等を行う部隊である。新設の飛行場には整備大隊からの派遣隊が赴^{おもむ}き、私も旧満州国内の新飛行場に送られて来る爆弾や燃料の受領蓄積のため何回か派遣された。大連に派遣された時の班長は私と同年の、金山伍長という朝鮮出身の優秀な下士官だった。

当時の満州国内は平安で、昭和十六年十二月八日の開戦の報を聞いた時も「日本も大したものだ」と思っただけで、日常に変化はなかった。空襲や戦

闘を経験したことも無かったが、南方に送られた兵隊は悲惨だったし、終戦時に満州に残っていたら、私も無事では済まなかっただろう。金山伍長もその後南方に送られて戦死した。

戦争が激しさを増してきた昭和十八年に入ると、立川飛行機は技術者・熟練工が足りなくなり、会社から陸軍省へ、召集されてから三年以上経った者は工場に戻して欲しいと要請した。この時約二百人の出身者に声が掛かり、私は昭和十八年十二月中旬に特別満期除隊となり満州の牡丹江を出て内地へ向かった。戦時中に運良く帰れることになった私は、二十数通の戦友の手紙を預かり、帰りながら配り歩いた。軍隊では手紙に検閲があったため、書きたいことを書けなかったためである。

立川飛行機に戻ると、四行程^{しりつてい}まであった製造部門

の油圧関係の班長を命ぜられた。一日に十機くらいの戦闘機を製造していたが、終戦間際には一日に一機しか造れなくなった。戦闘機の製造には女子挺身隊も動員されていた。空襲が何回かあったが、「やられたらそれまでだ」と動揺することなく防空壕に潜んでいた。恐怖から外に飛び出す者もいた。たまたまB29が撃墜され、パイロットが捕虜になると、北口駅前の憲兵隊分隊前に晒ひされており、通行人はぶん殴るように命令されていたことを後で知った。

昭和二十年八月十五日の玉音放送は、工場ですろって聞いた。皆泣いた。泣き終わると皆荷物をまとめ無言のまま職場を後にした。暫くは立川には怖くて近寄れなかった。元軍人は処罰されるかもしれないと聞いた私は、軍隊手帳や戦友の住所録もすべて焼却した。

そうこうしているうちにマッカーサーが厚木飛行場に降り立ち、立川にも米軍が進駐してきた。昭和二十年十月頃、会社で残っている飛行機材から農機具などを作る仕事があるからと声が掛かり、三度立川飛行機にお世話になることになった。こうして私の戦後は、立川飛行場から始まった。

もしも私が立川飛行機にお世話になっていなかったら…、もしも海軍にとられていたら…、もしも南方に配属されていたら…、「軍隊は運隊」である、生き残った者としてしみじみ思う。

技研の思い出

柴崎町 北島 泰子

(八十九歳)

昭和十七年に神田の簿記学校を卒業し、十七歳で立川陸軍航空技術研究所に就職した。配属されたのは総務部会計課で、主に工員の給与関係を担当した。勤務地は、当初は高円寺だったが、昭和二十年四月十三日の空襲で焼けた後は、今は跡地が昭和公園になっている東中神に移転した。住まいは、高松町のシネマ通りを入ったところに技研の寮があったので、そこで暮らしていた。

戦局が悪化すると空襲がたびたびあり、通勤時に空襲警報が発令されると、電車から飛び降りて逃げたこともあった。隣家の技研に勤めていた方は、通勤時に駅から歩いているところを撃たれて亡くな

るという悲しみもあった。

技研には、高等女学校の女学生が挺身隊として手伝いに来ていた。また、特攻隊員がいるのも見た。何でいたのかは不明だが、見慣れない飛行兵がいるので同僚にそつと聞いてみたら、声を潜めて特攻隊員だと教えてくれた。

終戦前に第八研究所へ異動した。主として医療関係の研究をしていた部署であった。終戦の玉音放送を聞いた後、上官と機密書類の整理をしていた私は、いつ米軍が来るか分からない恐怖の中で、もしも時は死ぬ覚悟で、八研に居た軍医中尉にお願いして、青酸カリをもらって携帯していた。周りの女子社員も、青酸カリを忍ばせていた。青酸カリを使わずに今日まで生きてこられたことは、つくづく幸せである。終戦間際に八研へ異動はしたが、今でも

当時の会計課の仲間達と同窓会を開いて旧交を温めている。

使わなかった手榴弾しゅりゅうだん

柴崎町 中嶋 政代

(八十九歳)

私は女学校を卒業して立川陸軍航空技術研究所に就職しました。配属されたのは第三研究所で、主に弾道検査等弾薬の研究をする部署でした。私達は「三研」と呼んでいました。私の仕事は庶務担当で、上司から命ぜられるままに、事務作業やいろいろなことをやっていました。庶務担当だったので所長の正木少将に決裁文書を持って行ったりしたこともありました。所長は朝、黄色い将官旗を付けた専用車で到着すると、皆で玄関に勢揃いせいぞろしてご挨拶あいさつをし

ました。カバンと軍刀をお付の方に渡すと、所長室にこもって一心に仕事をしていました。我々は「閣下」と呼んでいました。個人的なことは語らない、まじめを絵に描いた様な厳格な方でしたし、親しく口を利きける雰囲気でもなかったので、仕事の内容も閣下の個人的なことも全く分かりませんでした。いつも我々には業務終了時間には早く帰るように促うながしていましたが、ある時仕事で遅くなった夜に一度だけ閣下が家の近所まで送ってくれたことがありました。男女関係が厳しい時代だったので、閣下は「人の目がうるさいから」と気にしていたものでした。

ある時は日独親善なのか、技術交換なのか分かりませんが、ドイツから金モールを付けた軍人さんが七、八人来たこともありました。戦局が悪化した頃

だったので、飛行機で来たのか、船で来たのか、どのようにしてわざわざ日本まで来たものか不思議でした。お客さんと云えば、慰問で近江俊郎さんや原節子さんが来ました。仕事をほっぽり出して皆で歌を聴きに行ったので、大らかなものでした。原節子さんは間近で「自転車に乗って」を聴きました。

事務所は今の昭島市、昭和公園にあったのですが、昭和十九年頃から艦載機がやって来ては機銃掃射をしたのがとても怖かった。翼を振りながら、防空壕に向かって逃げる人を狙い射撃してくるアメリカ兵の顔がはつきり見えているくらいでした。射撃されると、映画の様に土ぼこりが舞い上がり皆逃げ回りました。米軍機が去ると必ず担架を持った人が走り回っていて、ああまた誰かが撃たれたんだと辛い気持ちになったものです。

昭和二十年に入ると、三研は群馬県の下仁田に疎開しました。疎開時に閣下とは別れ、今に至るも消息は聞かずにいます。織物工場を間借りして、近くにあった蚕かいこの集積場に住んでいました。宿舎からは隊列を組んで軍歌を歌いながら職場へ向かいました。後で聞いたのですが、私が下仁田に居る間中、家族は私のために「陰膳」を据えていたそうです。写真と一緒に毎日陰膳を据えて私の無事を祈っていてくれていた親の優しさには家族の温かさと優しさをしみじみ感じます。宿舎には特攻兵も何人も居ました。飛ぶ飛行機が無く、待機していたらしいのですが、無口で寂しげな様子で近寄りがたい人たちでした。だんだんと仕事どころではなくなり、近くの山でわらび採りをしたりと、食料を集める時間の方が多くなりました。

終戦は福生で迎えました。掘っ立て小屋のようなところで事務をし、手榴弾も作っていました。手榴弾は配送されるまでにはなかったのですが、上司の将校から「最後まで自分についてくるか。親に聞いてくるように」と言われました。これは、万一の時は手榴弾で自決できるか、という意味だなと思いました。私は一人娘だったので、親に相談すると反対されると思い相談できず、また嫌だと言える雰囲気ではなかったので「分かりました」と答えました。

ぎよくおん
玉音放送を聴き、日本は負けたんだと分かった時は泣きました。涙がぼたぼたと落ちて砂煙が上がっていたのを覚えています。一か月くらい残務整理をして、皆それぞれの故郷に帰りました。手榴弾は燃やしてしまい、使うことが無かったので、今日で

はひ孫まで授かり、四世代で楽しく暮らしています。

砂川空襲の記録

柏町 豊泉 喜一

(八十六歳)

私は昭和十八年に砂川尋常小学校(現市立第八小学校)を卒業し、青梅に在った旧制中学府立農林学校(後の都立)に青梅線で通学していた。立川駅を出るとすぐ立川飛行場になり、更に陸軍航空工廠こうしょうを始め、軍事施設が多数あり、電車の窓は、軍事機密保護のため、飛行場側の窓は外が見えないよう、黒くペンキが塗ってあった。当時は今の様に冷房施設などなかったが、誰も開ける人もなく当たり前のことであった。戦局の悪化に伴い、成人男子は戦争に駆り出され、労働の担い手が少なくなり、大学生

は学徒兵として、中学高校生も軍需工場や農家の手伝いに勤労働員された。農業学校であった青梅農林、府中農蚕学校のうさんの生徒は、働き手が出征した農家に泊まりがけで手伝いに行ったり、高学年は今の中国東北部、満州や北海道の農家に二、三か月も派遣された学年もあった。私は当時中学三年で農家の手伝いの他、八王子に在った軍用の味噌工場に動員されそこで働いていた。

昭和十九年の秋ごろから、大型爆撃機のB29がサイパン島からしばしば偵察のため上空を通過するようになった。砂川に最初の空襲があったのは、昭和二十年二月十七日で、B29ではなく小型の艦載機による爆撃であったため、大きな被害はなかった。この時は立川飛行機の工場を狙ったと思われるが、かなり離れた六番、七番組の五日市街道北側に

も爆弾が落とされ、一発は私の家から百メートル程の竹やぶに落とされ、特に被害はなかったが、飛び散った土砂が家の中まで入り、泥だらけになった。

最も大きな被害があったのは、四月二十四日の空襲で、砂川七番八番に多数の爆弾が落とされ、砂川国民学校は全壊。教員三名が犠牲になった他、地域でも一家七名全滅した家等など一七名が犠牲になり、私の同級生も一名亡くなった。この空襲は、現西武玉川上水駅北側一帯に在った、日立製作所エンジン工場があり、この工場を狙った爆撃がそれたのか、爆弾により多数の家が壊れ、同時に火災も発生。地域の人達だけでなく、避難してきていた立川飛行機の工員も大勢死亡。併せて一四四人もの犠牲者が出た。この日の空襲の他にも度々の空襲で被害が出て、もう一人同級生が亡くなった。当時この近くに在った

私の家の畑にも数発の爆弾が落ち、挿^すり鉢状の大きな穴の埋め戻し作業は、大変な重労働だった。戦後の話だが、朝鮮戦争が始まって鉄屑^{くず}が良い値段で売れたため、空襲で爆弾が破裂した破片が多数落ちていて、この破片を集めて売ると小遣^{こづか}いになるほど大量の破片が落ちていたものである。

次に大きな被害が出たのは八月二日夜、砂川四番から六番にかけ、焼夷弾による爆撃を受け、多数の家が焼失した。この時は夜間であつたので、上空で焼夷弾がさく裂し、頭の上に多数の火の玉が降り注ぐような大変恐ろしい思いをしたが、私の家は被災をまぬかれた。この空襲は焼夷弾であつたため、死亡した人は少なく、焼失した家が多数出た。この夜八王子も、大規模な焼夷弾攻撃により、市街地の大半が焼け、私が動員されていた味噌工場も消失。間

もなく終戦となるまで、私は家の手伝いをしていた。八月十五日の終戦の日は、じりじりと暑い日で、蝉の鳴き声がやかましい日だった。この日、重大放送があるとのことだったが、我が家のラジオが故障で聞こえないため、隣の家で玉音放^{ぎよくおん}送を聞いた。意味は分からなかったが、どうやら戦争が終わり、日本が負けたりしいと分かり、これで空襲がなくなると、なんとなく皆がほっとした事を覚えている。この日を境に空襲がピタリと止まり、連日上空を悠々と飛んでいたB29の姿を見ることはなくなり、空襲警報のサイレンを聞くことはなくなった。今でも、飛行機雲を引きながら飛んでいる飛行機を見ると、あの頃も飛行機雲を引きながら連日空襲にやっ来て来たB29を思い出す。

立川上空のB29体当たり見聞録

柏町 豊泉 喜一

(八十六歳)

砂川町の西武拝島線の北側に、「東航通り」と云う名称の道路がある。これは昭和十二年に作られた「東京少年航空兵学校」の略称で（後に「東京少年飛行兵学校」、戦後七十年経た今でも名称が残っている。

この東京少年航空兵学校は当時、少年の憧れの的で、高等小学校を卒業し十五才で入校でき、砂川尋常高等小学校を卒業してこの学校に入り、航空兵になった人が「郷土訪問飛行」として空から母校を訪問し、「君たちを待っている」という通信筒を落とし、生徒達へ後に続けと飛行兵への呼びかけを行ったりした。

この学校へは、全国各地から多数の少年たちが入校。卒業して少年飛行兵となって戦争に参加。多数の方が戦死された。

昭和十九年頃より、戦況の悪化により、連日米軍による空襲が行なわれるようになり、周辺に飛行場や軍事施設がある立川も、再三爆撃を受け大きな被害が出た。この空襲に備え、西砂川小学校（現立川第九小学校）南と現競輪場付近に高射砲陣地があった。しかしその頃、B29は一万以上の高々度を飛行していたため、めったに撃墜されなかった。当時、B29は空の要塞と言われ、我が国の戦闘機的能力では撃ち落とすことが困難だったため、しばしば体当たりが敢行された。

昭和二十年一月九日、現武蔵野市に在った中島飛行機武蔵製作所を目標に、B29およ凡そ七十機による、

多摩地区へ最初の大規模空襲が行われた。この時に砂川上空で体当りが行われ、この飛行機は砂川村のすぐ東側（現国分寺市北町）五日市街道北方に墜落し、乗員は全員死亡。遺体は近くの鳳林院に葬られた。

体当りしたのは高山少尉と云う人で、落下傘で砂川九番付近に降下。私の隣家の人が、自転車に乗せて立川駅北口に在った憲兵隊まで送って行つたと聞いた。

この時の様子を、砂川九番（現幸町四丁目）に住んでおられた小峰理一氏が当日の日記に次のように記述されている。「午後一時三十分頃敵ノ編隊機来襲、頭上ニ於テ友軍機ノ体当リニヨリB29一機撃墜サレ火災モウモウ空中分裂シツツ小平村ノ寺ノ南ヨリ野中ノ西端ノ北裏ニ至ル数ヶ所ニ落下シ

タリ、体当り機ノ勇士ハ幸ヒ落下傘ニヨリ生還サレタリ（立川市文芸同好会発行「立川空襲の記録」より抜粋）。

戦後になって高山少尉のことを調べてみると、当時、調布飛行場の東部防衛第百部隊第二四四戦隊に所属。この震天制空隊が昭和十九年十一月半ばに、体当り攻撃隊として編成されていたことが分かった。

高山少尉は大正十二年二月十六日に福岡県に生まれ、昭和十九年四月水戸陸軍飛行学校に入学。同年六月に陸軍少尉に任ぜられ、同年十月飛行校を卒業した。卒業と同時に調布飛行場に配属となった。当時の高山少尉を知る人は、「無口な方で、必要なこと以外はあまり話をしませんでした。常に微笑みを絶やさない人でした」と語っている。

高山少尉は、その後三度体当り攻撃を敢行。三度目は昭和二十年一月二十七日午後、千葉県銚子東南五十キロの海上で、「ワレB29ヲ攻撃中」と部隊に無線連絡した後、消息を絶った。二十二歳であつた。

参考文献 岩崎清吾著「証言調布の戦史 撃墜されたB29」岩波出版サービスセンター

技研と高松町の思い出

高松町 小川 輝一

(八十八歳)

昭和三年二月に東町^{あすま}(現立川市曙町)グラランドホテル近辺で生れた私は、立川尋常高等小学校(現立川市立第一小学校)を卒業した後、新宿にある工学院(現工学院大学)に入学した。三・四年生にな

ると夜間部となり、昼間は就職することになった。私は父が立川基地内にあった陸軍航空技術研究所(航空機関係の機材・審査、航空技術の調査研究・試験を行う機関。一般的に「技研」と呼んでいた)に勤めていたのと、自分も学校で機械科を学んでいたので、技研に就職した。昭和十八年のことだった。技研では第一研究所に所属し、技術将校の助手として、BSタイヤ等の会社が試作したタイヤの強度研究に携わった。技術将校は士官学校出身ではないためか、軍隊用語もビンタも無く、厳しくも理不尽な目には合わなかった。技研に就職してすぐに立川にも空襲の危険が迫ってきた。上空では日本の戦闘機がB29に体当たりするのを防空壕の中から見ただ。真つ青な空から壊れた日本の戦闘機と米軍機、そして操縦士のぶら下がったパラシュートがヒラ

ヒラと降りて来るのに感動した。

捕虜となった米軍パイロットは、今のフロム中武西向かいにあった憲兵隊立川分隊前に、縄でつながれて見世物のようにさらされ、戦争で身内を亡くした人が、竹でひっぱたいているということも聞いた。私は近所だったが見に行けなかった。子供の時から、憲兵隊前は怖くて近づきたくないところだったからだ。また、空襲が終わっても、米軍が落とした制限爆弾があちこちで爆発する音も聞こえたものだった。

第一研究所は空襲の危険が迫り、甲府に疎開することになった。甲府に疎開すると学校には行けなくなるため、辞めざるを得なくなった。甲府では軍が接収した工業学校に研究所の機能を移し、最初は市内のお寺に、その後すぐに隣の竜王町の旅館で寝泊

まりした。食糧事情が厳しい中でも軍の機関であり、三度の食事はいただけた。とは言っても銀シャリではなく赤いコーリヤンと麦が混じっていた。

甲府にも大空襲があった。昭和二十年七月六日の深夜だった。皆で消火に駆け付けた。技研の疎開先は郊外だったため無事だったが、市内は大変な火災だった。当時は各家庭に小さな防火水槽があるだけで、焼夷弾にやられると為すすべはなくただただ逃げただけだった。戦争前の防火訓練も、バケツリレーや竹竿たけざおの先に付けた荒縄で火の粉をたたき消すだけのもので、いざという時には全く役に立たない。終戦の玉音放送ぎょくおんは竜王町で聞いた。今まで天皇陛下のお声を拝聴したことがないため、これが陛下の声かと感動しただけで、戦いに負けたということのははつきりと言わなかった（ポツダム宣言受諾）。

翌日になって、どうやら負けたらしいということが分かり、終戦となり、家族が避難していた西秋留に戻った。

終戦後に高松町に住居を構えた。駅周辺は米軍ジープが走り回り、米兵は持っている携帯食料を大人にも子供にも与えていた。パン、バター、缶詰は、食糧不足の家庭には有り難かった。大人は煙草や石鹼せっけんを米兵から買って喜んでいた。高松町は商店街が少ないものの、戦前から立川飛行機の従業員や軍の将校が住む街だった。旧七軒町の旧熊野神社は基地の中にあり、今のシネマ通り周辺は原っぱで、昔から映画館「立川キネマ」があつて、その前の原っぱではテント張りの芝居小屋もよくかかっていた。高松大通りはバスがや々と通れるくらいの狭い凸凹でこぼこの砂利道だった。

戦後の高松町は、当時「オンリー（米兵の愛人）」と呼ばれていた米兵の日本人彼女が多く間借りをする家と、米軍相手のバーの街へと変わった。軍服の米兵が彼女の家に向かう姿をよく見たものである。戦争には負けたものの、「鬼畜米英」から「アメリカさまさま」へと、日本人が時代へ適応するたくましさには目を見張ったものである。

私の太平洋戦争体験記

若葉町 吉澤 源悟

（八十一歳）

太平洋戦争は、私が国民学校一年生の十二月八日朝、勃発した。

「帝国陸海軍は、本日未明南太平洋に於いて米英軍と戦争状態に入れり」

の発表があり、日本が米国領ハワイの真珠湾に奇襲攻撃をかけて、米太平洋艦隊に甚大な被害を与え、太平洋戦争が始まったのである。

現在では小学一年生のこと、世界地図どころか日本地図のことさえ全く知らない子供が、寒冷地の初冬の曇り空の寒い校庭に、分教場全校生が整列して、教頭からの話を聞いて知ったのである。我が家にはまだラジオがなかったので、大東亜戦争が始まったことはこの聞き伝^{づて}でしか知ることができなかった。

当時日本は大日本帝国と言い、北は南樺太^{からふと}（一九〇五年日露戦争後のポーツマス条約で北緯五〇度以南）・千島・アリューシャン列島、西は朝鮮・満州・中国沿岸部、南は台湾・南洋諸島と支配権を有していた。

太平洋戦争は、大日本帝国が「大東亜共栄圏^{だいてうあきようえいけん}」構

想の名の下に始めた大戦で、開始直後は怒涛^{どとう}のごとく東南アジア諸国を侵略し、戦果を上げて、フィリピン、ジャワ、シンガポールを占領し、マレー半島、カンボジアへと進軍していったので兵力が必要となり、それまでの軍役制度では不足し、徴兵制度が開始され、召集令状で兵力を集め、戦地へ送るようになった。昭和十八年になるとアッツ島の玉砕、サイパン島の玉砕と、次第に戦況が悪化した。

私の生誕地は、富士山の北北西方角の山梨県富士山麓精進湖畔^{しょうじこはん}の一〇〇戸ほどの集落で、御坂山脈の南麓にあり、精進湖の南側の青木ヶ原樹海を隔てて、富士山が見渡せる場所である。駿河湾から甲府への線上に位置している。

昭和十九年、国民学校四年生の晩秋の放課後のことだった。よく晴れた日で裏山の南向きの日当りの

いい斜面で日向ぼっこをしていると、遠く富士山の西上空で閃光せんこうがし、煙が発生したのが見えたので様子を注視していたら、富士山の方角からうなるような音が聞えだし、次第に大きな爆音になり、西日に輝く沢山のものが、上空をこちらに向かって来るのが見え、初めて見たB29の編隊であることがわかった。

編隊は、3機の編成機が5編成、その15機の編隊が次々と続き、頭上を飛行して北の方向へ飛び続けたのである。数え続けると総数二百何十機もの大編隊であった。機体は新しいジューラルミンのままの光沢を放っていた。あの閃光と煙は、富士宮の高射砲陣地から打ち上げた砲弾が、B29の1機に命中したのであった。この時は、うなる音の下で小さな飛行機が飛び交うのも見えたが、高度の高いB29

には、下を蠅はえが飛んでいるようにしか見えなかった。たぶん、このときの米軍B29の大編隊はデモンストレーションではなかったか。最初の爆撃実施飛行訓練であったのであろう。報道管制の時代だったから、大きくは状況の発表がなかったと思う。

米軍機B29の本土爆撃は、始めは軍需工場等に限られていたが、次第に夜間の大都市居住区の爆撃に広がった。照明弾を落としてから焼夷弾を雨あられのようにばらまく爆撃となった。

甲府市が爆撃されたのも夜中で、御坂山地の北側の二つの峠を越え、甲府盆地北部にあるのに、峠の上が真っ赤に染まっていたのを、震えながら見た覚えがある。

(平成二十八年二月二十四日)

立川工作所ものがたり

柴崎町 野澤 勝治

(七十八歳)

立川工作所は、大正十年に私の伯父、野澤三喜三が、羽衣町に設立した国産初のスパークプラグ（点火栓）を作る工場である。野沢工場とも呼ばれ、近くを走る中央線に「野沢踏切」として長くその名前が残っていたが、中央線の高架化により、それも今はもう見ることはできない。

スパークプラグは、ガソリンの気化ガスに点火してエネルギーを得る、いわばガソリンエンジンの心臓部である。その製造のかたわら、航空機や、電気自動車の開発にも取り組み、昭和十五年八月には軽飛行機の初飛行にも成功している。

戦争が始まると、陸軍の軍需工場となり、「立川

工作所」は「皇国第1751号工場」と呼ばれた。

これは立川という地名で米軍の攻撃目標になるのを避けるためだったそうだ。「TEICO（立川エンジニアリング・ラボラトリー・カンパニー）」の商標も、敵性文字だということで、カタカナの「テルコ」に変わった。今も私の手元には、「立川工作所」の文字が真っ黒に塗りつぶされた、当時の父の名刺が残っている。

やがて戦争が激化してくると、軍から増産の指令が出たため、小田原にもう一つ工場を作り、父は小田原工場の責任者になった。

昭和十九年十月、私が七歳のとき、私たち家族も小田原へ移ることになった。その日、母と兄と姉たちは、家財道具を積んだトラックに便乗し、私と弟は父に連れられて列車でと、二手に分かれて小田原

へ向かった。列車はぎゅうぎゅう詰めの状態で、途中空襲のため列車が止まり、全員が降りて列車の下に隠れて空襲が過ぎるのを待った。父はヘルメットで隙間を作り、私と弟をそこにに入れて守ってくれた。トラックのほうも機銃掃射を受けて、命からがら小田原にたどり着いたのである。

小田原の小学校では、全校児童が田んぼでイナゴ取りをさせられた。その当時、イナゴは貴重なタンパク源で、集めたイナゴは、どこかへ運ばれていた。

やがて、爆撃は日に日に激しくなっていた。まず「爆撃するぞ」という予告のビラをまき、そして予告どおりに爆撃してくる。

学校の帰り道で爆撃にあったときの恐怖は、今もはっきり覚えている。私は学校で教えられたとおり

に、両手の小指で鼻を押さえ、親指で耳を、残りの三本の指で目を覆って、垣根にぴったりと沿って身を伏せていた。と、その横を車が猛スピードで走っていき、それを狙った機銃弾が私のわきでダダダダッーと土煙をあげたのだ。弾が飛ぶときの金属音は今も耳に残っている。

また、米軍はビラだけでなく、紙テープのような形の金属のテープを飛行機からまいた。それを電線にひっかけて通信妨害をするためだという。私たちは戦利品だといっては、そんなものを競って拾い集めた。どんな状況の中でも、子どもは遊びを見つけていたのである。

昭和二十年、工場は二度の爆撃を受け、その機能を失い、八月十五日の終戦を迎えた。終戦直後は、軍需で私腹を肥やしたと非難され、赤旗を持った人

たちが押しかけてきて家から出られないこともあった。実際には、私腹を肥やすどころか、何から何まで軍に供出した上に、戦後は米軍に機械も工場も丸ごと接收されて、わずかに残ったものを売りながらの「タケノコ生活」だったのである。

父たちは、夢を持って飛行機の開発や電気自動車の研究をしていたのに、戦争によって研究も半ばのままですべてを失った。戦争がなければ、国産の軽飛行機が量産されたり、もっと早く電気自動車が走り回っていたかと思うと、本当に残念でならない。

（聞き書き 岩本紀子）

小さなお母さん

一番町 木村 英子

（八十歳）

昭和十年、東京牛込の生まれです。父は友だちと一緒に小さな映画館をやっていました。

戦争が激しくなった昭和二十年一月、一番下の弟が生まれました。そのとき、二つ上の姉は栃木への集団疎開で家にいなくて、十歳の私は、六歳の弟と三歳の妹を連れて母の病院へ通いました。寝間着やおしめなどの洗濯物を持って帰って、洗ってまた持つていくのです。紙おむつも洗濯機も、もちろんありません、一月の冷たい水で、手はひび・あかぎれで血だらけでした。

弟と妹には家で待ってほしいけど、空襲警報なんか鳴って恐いし、ついてくるの。電車に乗ると二

人とも寝ちゃうから、二人の手をひいて歩いて通いました。

今、十歳ぐらいの子どもを見ると、当時を思い出して、我ながらよくやったなーと思いますよ。今の若い人たちに「しつかりしてよ！」って言いたくないっちゃう。

昭和二十年三月十日の東京大空襲で、いよいよ東京も危ないから、伊豆長岡の父の親類宅へ疎開することになりました。疎開のために荷造りをしてチッキで送るばかりになっていた四月十三日の夜、我が家のある城東地区が空襲を受けました。

その夜、父は、フィルムを防空壕に移したらすぐに戻るからと映画館に行っちゃいました。母は生まれたばかりの弟を背負い、弟と妹の手をひいて、私はできるだけたくさん着物を着て、ナベだのヤカン

だのを体中にぶら下げて、ガラガラいわせながら逃げたんです。荷造りしていたものは一切持ち出すことができなくて、家もろとも全部燃えちゃいました。

避難場所になっていた江戸川小学校が燃えちゃっていたので、鶴巻小学校へ行くところかも知つ黒け。そこで唯一焼け残っていた早稲田小学校に避難しました。空襲から二日後、探し回っていた父が避難所に来てくれたときは本当にうれしかった！「みんな生きてたか！」みんなで抱き合って喜びましたよ。でも感動している暇はありません。荷物は何もなくなつて着の身着のままになったけど、予定どおり伊豆へ疎開しました。父だけは、映画館があるのでまた東京へ戻っていきました。疎開先の伊豆では、あまりいい思い出はないですね…。

だから八月十五日のラジオを聞いたときは、うれ

しかったー。「やっと終わった、もう空襲もないんだ、東京に帰れる」

ところがそう簡単にはいきません。東京に帰っても住むところもないわけです。父が家を建ててから迎えに来るといので、私たちは伊豆で待つことになりました。でも、なかなか来ないので、翌年の二月、私たちは待ちきれなくて東京へ戻りました。ところが家はまだ柱だけ、床も壁も屋根もないんです。人の善い父は、だまされてお金を持ち逃げされてしまったのです。

それで、しかたなく避難住宅に入りました。今だったら仮設住宅ですね。鶴巻小学校の焼け残った部分が避難住宅になっていたのです。一つの教室を十文字に四つに区切って、一軒ずつベニヤ板で囲んであるんです。四畳半ぐらいあったでしょうか。ベニ

ヤ板は天井までないから、声も何も筒抜け。私はお転婆^{てんぱ}だったので、ベニヤ板をよじ登って「ケイコちゃーん」とかやっていました。鶴巻小学校に住んでいて、通っていたのは早稲田小学校なんですよ。

進駐軍にもびっくりですね。今まで黒人なんて見たこともないから……。でも案外優しかった。日曜日の朝になると、早稲田大学の大隈講堂のところにジープでやってきて、チョコレートやビスケットを配るんです。大人たちは「毒が入ってるかもしれないから食べるな」って言うけど、おいしいもの食べたいじゃないですか。そのうち大人も、「もらってきてー」だって……。大変な時代だったけど、この共同生活は楽しかったですね。

（聞き書き 岩本紀子）

十四歳の戦争

錦町 米澤 廣子

(八十四歳)

私達の女学校時代は、いよいよ戦争がはげしくな
って、勉強ばかりしていらなくなりました。勤労
動員で日立の海岸工場に動員されました。そして私
達は飛行機が一万メートルまで上るのに必要なピ
ストンを秘密に造っていました。

その中に、動員先に宮様が視察にお出でになり、
翌日の六月十日は代休となりましたが、その日、日
立の工場に敵の爆撃があり、一トン爆弾が落とされ
ました。私は家にいて、B29が家の上を北の方に
向かって飛ぶのをみて居ましたが、その爆弾で私達
の職場に大きなすり鉢のような穴があき、職場の主
任さんが亡くなられ、眼球が飛び出していたことを

聞き、驚いて言葉になりませんでした。

その日工場に出勤していたら、今の私達はなかつ
たことになりますから…。

空襲はだんだん頻繁になり、私達は学校で教わっ
た通り、防空頭巾と救急袋をその都度身につけて防
空壕に避難しておりましたが、弾丸の飛び出す火が
見える位の所から艦砲射撃がありました。私の家は
海岸でしたので、大丈夫でしたが、山際の方はひど
かったようです。

七月中旬、日立の運命の日が来ました。今日は日
立に町が危ないという情報が流れ、私の家は農家で
したので、父が馬を自分の山の松の木につないで避
難させました。

その日空襲になり、防空壕に入りましたが、あま
りにもひどく恐ろしくて、防空壕の中にいることが

危険になり、外に出て海岸の防波堤を砂浜に飛び降りました。ふだんはとても恐ろしくて飛び降りるこ

とが出来ない所を飛び降り、波打ち際まで行こうとした時には、照明弾やら焼夷弾が砂に斜めに「ぬるぬる」と、のりのようなものが出てすべって歩けな

いような中を、岩かげまで避難しました。どの位の

時間がすぎたか定かではありませんが、あたりがずいぶん静かになって、しばらくしてから家の前に戻

ってきた時には、私の家は火の海に包まれ、軒下か

らぼうぼうと紅蓮ぐれんの炎がめくれ上がって、真っ赤に

燃えていました。ただ茫然ぼうぜんとするばかりでしたが、

そこには山につないでいたはずの馬が帰って来ていました。悲しそうな顔でたたずんでいました。

それを見て、家族みんなが泣きました。

朝になり、火がすっかり収まってから家の中跡あとに

入ってみましたが、何一つ形のあるものはありませんでした。

頼りにしていた土蔵も、屋根から直撃を受け、中は丸焼けで何もかもなくなり、私の持っていたのは救急袋と防空頭巾だけでした。

近所では、馬小屋の中の馬のおなかに焼夷弾が突き刺さり、からす瓜のようにしなびて黒くなっていました。何もかも終わりでした。

それから私達のどん底の生活が始まりましたが、それにもめげず、いつも明るい気持ちでいられたような気がしますが、それは、苦勞しているのが私一人ではなかったことが、助けになっていたのかも知れません。

戦災に遭遇したことは、私の生涯に長く長く尾を引きました。ドラム缶のお風呂も入りました。今は

ぜいたくな世の中に生きて居ることを考えさせられます。

戦争中の学童疎開の話

富士見町 伊藤 暢子 ちようこ

(八十歳)

今から七十一年前の昭和二十年(西暦1945年)四月、私は国民学校(小学校)三年生になりました。

この時日本はアメリカと戦争をしていましたが、当時日本が占領していた南洋の島々がだんだん負けてきました。二年生の時に「サイパン島の玉砕」ぎよくさい

という歌が流行しました。この歌の内容は、八十歳になった今でも記憶しています。「十日に余る激戦も、七月七日の朝まだき、有明月の影消えて、全軍すべて玉砕す」。玉砕とは、「玉のように美しく砕け

散る」の意味で、当時は負けたことさえ、このように美しい言葉で、国民を惑わせていました。

近いうちにアメリカ軍が沖縄に上陸するという噂になりました。当時私が住んでいた場所は、鹿児島県の種子島という島でした。地図を見ると、世界遺産になった屋久島と並んでいる南北に細長い島です。アメリカ軍が沖縄に上陸するということは、奄美大島、種子島とだんだん北上してくることを意味していました。そこで三年生になったばかりの四月末、本土の鹿児島県の北部に疎開することになりました。

疎開とは、敵の襲来の被害を避けるため、危険と思われる土地から安全な場所に移動することで、生徒がまとまって安全と思われる土地に移ることを「学童疎開」と言い、日本のあちこちで行われまし

た。一年生は入学したばかりなので親と残り、二年生から六年生までが疎開することになりました。

四月末の朝、私たちは馬車で移動することになりました。私はこの日のことは全く覚えていませんが、大人になった二十歳の頃、母が次のように話してくれました。

「親たちは、戦争が負けている状態を分かっていたので、今日を最後に、もう子供と会えないかもしれないと悲しく思っていたが、一方、子供たちは馬車の上ではしゃいでいたので、子供は親と永遠の別れになるとは気付いてないのかなと思っていたが、馬車が動き出したとたん、それまで楽しそうにしていた子供たちが、一斉に「わっ」と泣き出したんだよ。親たちは、子供ながらにわかっていたんだねと、お互いに慰めあったんだよ」と話してくれました。

何日かかかって、私たちは、鹿児島県北部のある村に到着し、お寺の本堂で暮らすことになりました。しかし、食べ物が少ないため、いつもひもじい思いをしていました。この頃の事を思い出すと、いつも食べ物のことばかりです。ある夕方、数人で畑の横を歩いていたら、香ばしいよい匂いがしてきました。それは、農家の人が刈り取った麦の実を焼いた匂いでした。私たちはそこへ走っていき、焼けた麦の実を夢中で拾って食べました。その美味しかったことは、今でも忘れることができません。こんなですから、いつもお腹を空かしていました。そしてついに食べ物がなくなり、全員が村の家庭に配られることになりました。日本中の人が食べ物に困っていた時代ですから、村の家庭も疎開の子供を引き取って大変だったことでしょう。

昨年、七十年ぶりに、今は互いに東京に住んでいる小学校時代の友達と、その村を訪ねました。小学校の校長先生にお会いすると、次のようにお話ししてくれました。

「この小学校と皆さんの種子島の小学校は、今は友好関係を結び、夏休みには両方の生徒が訪問しあつて仲良くしています。」とお聞きした時、私は、つらくて悲しかった戦争中の疎開生活でしたが、戦後双方の小学校が強い絆で結ばれ、友好がとてもよい状態で続いていることに、深く深く感動しました。

太平洋戦争勃発から終戦まで

一番町 小林 マサ

(八十一歳)

——三角乗りとおにぎり事件——

あの太平洋戦争が始まった昭和十六年十二月八日、私は国民学校の一年生でした。赤いランドセルも革製品はなく、ボール紙を圧縮した代用品で、三年もてば良いという代物でした。子供用の自転車など見たこともありません。大人用の自転車に「三角乗り」と言つて、足を三角のところに入れ、体を斜めにして乗るんです。夜は外灯も少なく、「灯火管制」といつてどこの家も薄暗かったんです。

「日が暮れないうちに家に帰るんだよ」母からはいつもこう言われていました。

あるとき、いつものように自転車で三角乗りの練

習をしていると、突然兵隊さんに声をかけられました。

「その自転車ちよつと貸して！ あんた後ろに乗って！」そう言うやいなや走り出し、一目散に北へ向かったのです。私は連れ去られるのか、人さらいか……。恐さを感じる余裕もなく、落ちないように兵隊さんにしがみついていた。

二、三キロはあったでしょうか。着いたところは、宇都宮第十四師団司令部三十六部隊の正門前で、歩哨が直立不動で立っていました。

「ありがとね、気をつけて帰ってね」

兵隊さんは、少し優しくなった顔でそう言うと、私に大きな包みを渡し、歩哨に敬礼をして門の中に消えてしまいました。

大きな包みを持ったままでは、三角乗りはできま

せん。そこで私は、着ていたハーフコートを脱いで荷物を包み、ハンドルにぶら下げて、舗装もされていない砂利道を、泣きながら自転車を押して家まで帰りました。

家では、マサ子がいなくなったと大騒ぎでした。帰るなりこつぴどく叱られ、約束を守れないならと自転車を取り上げられてしまいました。でも、風呂敷代わりのハーフコートの包みを開けてびっくり！ 大きなおむすびが十個も出てきたのです。これは家族みんなでありがたく頂戴ちようだいしました。白米のおむすびなど見たこともない時代です。きっと実家に帰った兵隊さんだったのでしよう。門限に間に合わせようと必死だったのかもしれない。お母さんが息子に食べさせたくて一生懸命にぎって持たせたのかと思うと、今思い出しても複雑な気持ちで

す。

——空襲におびやかされる日々——

空襲になるとラジオから「トウブグンカンクジョウホウ、ジヨウホウ、敵機B29〇〇機北上中」と放送があり、意味もわからず丸覚えしていました。サイレンが鳴ると、どんなに眠くても起きて逃げる準備をします。私の役目は、家族四人分の着替えが入った大きなリュックを背負うことです。裏庭には防空壕があったのですが、雨が降ると湿気の匂いであって、いやで仕方ありませんでした。

父は兵隊にとられ外地（インパール）に行き、祖父は胃ガンで終戦を知らずに他界しました。母と祖母と弟と私は、父の帰りを待ちながら家を守っていました。

——大空襲焼け野原——

宇都宮が大空襲にあったのは土砂降りの夜でした。

「こんな大雨にアメリカも攻めてこないだろうか
らゆつくり寝よう」

祖母がそう言つて、みんなで話していたのに、とてもない大空襲でした。下町一面が焼け野原で、三日から四日くすぶっていたでしょうか。雨の中、ラジオ一つを背負って我が家に逃げてきた人もいました。幸い、上町の私の家は難を逃れましたが、坂の上から下町を見ると、一面焼け野原、東北線の国鉄も煙をはいて走る姿が見えたり、銀行の大きな金庫だけがニョキニョキといくつも目につき、異様な町の姿でした。焼け跡にくすぶる異臭、何人亡くなったことでしょう。子どもながらに、それはそれほ恐ろしい光景で、今でも目に焼きついています。

——終戦——

昭和二十年八月十五日、時刻は十二時。天皇の
ぎよくおん
玉音放送があるというので、大人たちはラジオの
前に正座して放送を待っていました。「ラジオを聞
かせて」と我が家に飛び込んできた兵隊さんは、直
立不動で聞いていましたが、一礼して何も言わず、
うなだれて出て行きました。

本当に長い辛い一日でした。子どもながらに事の
重大さはよくわかりました。

もう戦争はこりごりです。

私も機会あるごとに、あの戦争の日々を伝えてい
かねばならないと深く感じました。

わたしの「朝鮮」

若葉町 田中 幹子

(八十一歳)

一九四一年、太平洋戦争が始まったとき、私は六
歳でした。父は大阪の写真会社に勤めておりました
が、私が師範学校付属の小学校一年生のとき、朝鮮
の京城支店長になって転勤しました。始めのうちは
単身赴任だったので、私が二年生のときに家族
も京城に引っ越すことになりました。

その頃の朝鮮の暮らしは、今テレビで見るヨン様
のドラマよりずっと昔のことで、寒さも厳しく、寝
るときもオンドルを焚^たいていました。経済的格差も
大変なものだったようです。日本人が住んでいる地
域と現地の人の地域は完全に隔離されていて、日本

人は豊かな生活をしていたのだと思います。家にはオンドルのための石炭小屋があり、毎日のように生きたままの鶏が運ばれてきて、それをお手伝いさんが料理するという暮らしでした。

父が勤めていたのは民間の会社でしたが、いわゆる軍事機密に関連するような写真の仕事で、いろいろな情報が入ってきたようです。父はそのときもう四十を過ぎていましたが、現地召集で兵隊さんにとられ、満州のほうへ連れて行かれるというので、私たち家族だけは、日本へ帰ったほうがいいということになり、終戦になる前に引き揚げてきました。

朝鮮での暮らしは、子供心にも随分差別的だったなあと、今も心の中に残っています。だから、皆さんが京城（現ソウル）へ観光旅行に行くと言くと、あの差別的な暮らしに心が痛んで、私は観光旅行に

行く気分にはなれないのです。

日本人と朝鮮人が隣り合わせて住んでいるわけですけど、日本人が食べ残したものを朝鮮人が拾って食べるとか、そういうのを目の当たりにしたこともあります。

また、私たちは日本人学校へ集団登校するのですが、六年生は必ず竹竿を持っているんです。そして朝鮮人の子供が寄ってくると、その竹竿を振り回してよけるんですよ。私は小さいし、ただ見ているだけなんですけど、子供心にも胸が痛みました。

今でもまだ、戦時中のことがいろいろ問題になりますよね。私がつと大きかったらいろいろ覚えているでしょうが、小さかったのではほとんど忘れてしまつて……。でも、そのとき差別をしていたということだけは覚えていて、なんだか申し訳なくて観光

旅行には行けないっていう感じです。

私たち家族は終戦前に引き揚げてきましたが、そのときのこともよく覚えています。

釜山から下関に船で渡るわけですが、おむすびをたくさん作って持ってきたんですね。昔は、腐ると糸を引くっていいですよ。夏だったもので、おむすびが糸を引き出したんですね。それで、海へ捨てようとしたら、周りの人から「捨てるなら私にください」って言われてびっくりして。「でも、これも腐ってて臭いですよ」って言ったんですけど、「それでもいいからください」って。

それがどういう意味かわかったのは、下関に着いてからです。朝鮮にいるときは、食料に困るということは全くなかったので、下関に下りたら、レストランとか食堂でも行って食事が出来ると思ってい

たんですね。ああ、日本はこんなに食料がないのかっていうのを、日本の土を踏んでからわかって、子供心に、「ご飯食べるのって大変なんだ」ということを初めて知りましたね。

疎開・転校・空襲

高松町 杉田 昇

(八十二歳)

私の小学校生活の中に太平洋戦争がすつぽりと納まっています。

昭和十六(一九四一)年、曙国民学校(現立川市立第二小学校)に入学。終戦は谷保国民学校(現国立市立第一小学校)で迎え、高松国民学校(現立川市立第五小学校)を卒業しました。

私は内気な子どもでしたから、軍国教育の小学生

活の中では、いつもぴりぴりと神経を使っていた。担任はこわい先生で、女子組の女の先生ならやさしくていいのになあと、うらやましく思っていた。

たった一度、ビンタを貰ったのを忘れません。

一年生のときです。長い朝礼のあと、手を大きく振って行進して教室に戻るのですが、まちがって十人ばかり、先に教室に帰ってしまったからです。

疎開は二度経験しています。はじめは「強制疎開」でした。「緑川」を造るために立ち退けと言われたのです。（緑川の開削工事は昭和十九年から。）

私の家の前には広い松林と原っぱがあり、すてきな子どもの遊び場でした。親の目を気にしながら、わんぱくどもは日が暮れるまで遊んでいました。父は軍需工場の工員、母は家で和裁教師と駄菓子屋を

やっていました。その生活が強制疎開で大きく変えられてしまいました。

私は仲良しの友達と離れ、親は家さがしと引っ越しで大変でした。借りたリヤカー一台で曙町から高松町に引っ越したのです。忘れられないのは、そこで空襲にあい、九死に一生の思いをしたことです。夜中、ウー、ウー、ウーとサイレンが鳴りました。

「立川がやられるぞ。」

家族四人は防空壕に飛び込みました。照明弾で、外は昼間のように明るくなりました。しばらくして、ガリガリガリ、ドカーン。腹にしみ込む爆弾の音。

「ふとんをしつかり被^{かぶ}つて。」

ガリガリガリ、ドカーン。ふんばっている足がガクガク。ガリガリガリ、ドカーン。

すぐ近くで爆弾が炸裂しました。

「もうだめかも」

ガリガリガリ、ドカーン。爆撃は三十分以上続き
ました。しばらくして父が言いました。

「もうB29はいなくなった。」

胸がドキン、ドキンと鳴っていました。

「助かった」と思いました。そして防空壕の外に出
ようとしたら、足が抜けませんでした。

膝まで土にうまっていたのです。やつとのことで外
に出たら、家は傾いていました。

これが、小学校五年生が経験した空襲です。

家は住めないぐらいにこわれていたので、矢川
(現国立市)の本家に相談に行き、二階の蚕室さんしつに住
まわせて貰うことになりました。

転校した谷保国民学校では、楽しいこともあつた
けど、いじめつ子が一人いてつらい経験もしました。

畑仕事を手伝うと、おいしいあられをお茶の時間
にくれるのです。それが楽しみでした。近所の子は
「町場の子」として親切にしてくれました。流し針
でうなぎをとったり、ぞうりの作り方を教わったり
と、初めての経験をしました。

戦争が終わり、立川に帰ることになりました。前
に住んでいたすぐ近くに家が見つかったのです。
でも、その家は爆風でやられていましたので、何と
か自分たちで住めるようにしましたが、今から考え
ると「あばら家」でした。両親は、二人の子どもの
教育のためといって、家には金をかけなかったのだ、
その家に、私が高校生になるまで、住んでいました。
谷保から引き上げるとき、小さな松を見つけ、持
ち帰り門松にしました。その松が七十年たって、大
きな見越しの松になりました。

それを私は「平和の松」と名づけました。

原爆

富士見町 平野 八重子

(九十歳)

広島原子爆弾が落とされた昭和二十年八月六日のことです。ちょうどその日は、一ヶ月近く前に役場から、疎開した家の解体に行くように指示されていたのです。玖波からは、愛国婦人会と警防団それぞれ百人ずつ、計二百人がそろって朝早く汽車で出かけました。

私は、いつものように海軍の通信部で仕事についていました。上官に、今朝父が広島に行ったことを話したところ、「すぐに帰っていい」と言われ、外に出てみると、海軍さん達が何人もいて、山のとっ

ぺんから、もうもうと立ち上る青黒い煙を観ていました。「あれは、広島市内だけではない。八本松の陸軍の格納庫も爆撃されたのだろう」と話していました。

一目散に走って駅まで行きましたが、汽車は止まったままで動かないとのこと。夢中で二時間半歩いて家にたどり着きました。帰ってみると、近所の農家の人たちが十人くらい集まっていて、父が警防団の団長だったので、事情を知ろうと待っていたのです。

お昼過ぎに役場の人が三輪自動車を借りてやってきたので、私たち四人はそれに乗り、広島に向かいました。あっちこちに焼けただれた死体があり、中には「水をくれ」と泣きさげんでいる人、重なり合って息絶えている遺体を、容赦なくころが

して誰かを探している人など。

ようやく目的地に着いて、玖波から来た人に会うことができました。まだいくらか話のできる人に会い、父は草津の国民学校に收容されていると聞き、そこに駆けつけました。父は顔が面をかぶったように腫れ^は上がって寝かされていました。「お父さん迎えに来たよ。早く帰ろう。」と言うと、「他のみんなはどうしている？」と、自分が連れて来た玖波の人たちのことを心配するのです。「大丈夫よ、心配しなくていい。」ととつさに嘘をつきました。

父のそばに寄り添って、役場から迎えに来るのを待っていました。「申し訳ないが、重症の人や亡くなった人を先に運ばなければならないので、少し待ってほしい。」と言われ、その時父はまだ、元気に見えましたし、「お前も一緒に行って探すの手

伝いなさい。」と言ってきかないので、父をその場に残して、役場の人に従っていきました。

父はあくる朝、役場の人が連れて帰ってきてくれました。肌着やふんどしなど白い布を身に付けていたところは、きれいな肌のままでしたが、後は焼けただれ、寝かせたふとんの息のかかったところは、塩酸でこげたように真っ黒な穴があいたようになり、その日の夕方五時過ぎに息を引き取りました。作男だった新井さんも亡くなりました。父は新井さんに、「あんた達は行かなくていい。」と強く言うていたのですが、どうしても一緒に行くといつて難にあつたのです。広島に行った人は、誰一人生きて帰れませんでした。

火葬場は一つしかないのです、一人ずつ火葬するこ

とができず、山のふもとを切り開いて、そこにずら

りと並べて焼きました。新井さんの奥さんは、三人の子どもを抱き寄せて泣きながら、お骨をていねいに拾っていました。新井さん夫婦は朝鮮人でした。日頃は朝鮮語を話すのをきいた事が無かったのですが、「アイゴ、アイゴ」と泣き崩れながら、子ども達にお国の言葉で話しかけていました。

玖波にもたくさんのお爆者が運ばれてきて、国民学校の廊下に寝かされていました。まわりはうじ虫の山になり、息を引き取る人が出ると、また新しい人が運び込まれ、山のふもとからは、火葬の煙が絶えませんでした。

私は戦争で大切なものを失いましたが、戦争に敗けて本当によかったと思います。もし勝っていたら本当のことを何も知らされず、一等国、神代の国など信じ込まされたままだったでしょうし、新井さ

んが本名を名乗る事も、お国の言葉を自由にしゃべることも出来なかったでしょう。これからは二度と戦争をしないで、平和にみんなと助け合いながら暮らしたいと思います。

間もなく八月十五日に七十一回目の終戦記念
日を迎えます

柏町 花井 富士男
(八十四歳)

私は昭和二十年の中学二年生の時、今の東京都文京区において焼夷弾の攻撃を受けて被災しました。平和な世界を実現のため、語り部の一人として筆を執りました。

昭和二十年六月頃の夜、空襲警報のしばらく後に今の神楽坂の方から、焼夷弾による火災が拡がり、

木造の家屋、商店が主体の街並みに火が迫って来た。私は家族とともに何も持たずに家を後にし、火の回らない方面に向かって足早に逃げ歩いた。

やがて夜が明けると、見渡す限り焼土と化していた。幸いに私の家族五人（私は末っ子、三人の兄の内一人は出征中。）は無事で、皆さんとともに茫然として焼け跡に立っていた。

後で聞いた話では、近所のご家族は、逃げずに自宅の下に掘った防空壕に身を隠したため焼死された。当夜、ご主人が軍需工場の夜勤で、お一人だけ助かるという不運に会われた。

当時、東京大空襲（五月）で、江東区、深川区などを中心に、広範囲に渡って焼夷弾により焼き尽くされ、非常に多くの死傷者が出て大惨事となったが、その真相は戦後になって判明した。

私の小学校、中学校（いずれも全焼）の友人にも犠牲者が出ていた。

なお尚、私の出征中の兄（次男）は、昭和二十年六月八日に赤道直下の南太平洋のハルマヘラ島において、二十四才の若さで戦死していた。あと三カ月足らずで終戦になったことを思うと無念でならない。戦死は終戦後に知らされたが、遺骨さえ帰って来なかった。

終戦記念日が来ると、三年前に私が作った俳句をよ詠み、亡き兄の冥福を祈ると共に、兄の無念を少し晴らしている。

遺骨さへ帰らぬ御霊敗戦忌 みたま

（注）季語…終戦日、敗戦忌の内、敗戦忌を選んだ。

亡き兄は、出征前まで立川にあった中島飛行機製

作所に通勤していた。絵が上手で、花を愛する優しい兄であった。私が立川に在住するのも、何かの縁を感じます。

核戦争など二度と無き様に祈るとともに、いまだに世界で起きている、誠に不条理なテロ、紛争なども早く解決され、本当に平和な世界が到来する様にと、毎朝、神様、仏様に祈願しております。

あの頃のこと

曙町 福田 禮子

(八十二歳)

太平洋戦争が始まったのは、昭和十六年小学二年生の時でした。戦争の意味もよく解からない。唯、尋常小学校が国民学校になり、子供達は少国民と呼ばれるようになった事は覚えています。戦争が始ま

った最初の一年位は、行け行けドンドンだった日本でしたが、そのうち本土が空襲を受けるようになり、旗色が悪くなってきて、昭和十九年には、「未来ある少国民の生命を守る為」^{ため}か、学童集団疎開が始まり、私は家族と離れ、栃木県那須高原の小さな家四軒に分宿しての集団生活が始まりました。

そこは、街から離れていたもので、空襲のサイレンも届かず、一応平和に暮らしていたのですが、物資が不足する中で、皆で食べられる雑草を採ってきておかずの足しにしたり、冬は毎日薪拾い^{たきぎ}をしたり、食事は一汁一菜、それも白いご飯は食べられない。ある時は豆腐一丁の時もありましたが、少国民は健気にも、兵隊さんに負けないようにと、頑張っていました。

集団生活の為か、頭虱^{あたまじらみ}が発生し、痒くてたまら

ず、高原に自生する“せんぶり”という植物が効く
というので、採ってきて煎じてその汁で髪を洗った
り、すき櫛ですいて、ポトポト落ちてくる虱しらみを、
プチプチつぶして、“やった、やった！”と、皆で
喜んだりしたものです。

夏から夏へと一年が過ぎ、昭和十九年には戦争は
末期状況となり、「親子が生き別れることなるかも
知れない」という事か、学童疎開は終了となり、少
国民は、親元に帰されることになりました。山梨県
の実家に疎開していた母が那須に来てくれて、私達
は黒磯から蒸気機関車に乗り、新宿から中央線に乗
りかえ、甲府に向いました。当時、列車はとても混
んでいたのですが、なんとか座れたのを覚えていま
す。

列車が浅川駅（いまの高尾）についた時でした。

突然血だらけの繃帯ほうたいをぐるぐる巻いた人達が、乗り
込んできたのです。母がびっくりして尋ねたところ
「前の列車に乗っていて、トンネルにさしかかった
時に、窓から米軍の飛行機に機銃掃射され、自分の
前で伏せていた人の頭に弾が命中して、血柱が天井
まで昇った」と震えながら話したのです。多くの
人が死んだとの事でした。本当に恐ろしかったです。
私達の乗った列車はその後、無事甲府駅にたどり着
き、母の実家に行けました。

それから間もなく、八月十五日に玉音放送を聴き
ました。日本は敗けたのです。

ほどなく、母と私は焼け残っていた東京代々木の
家に戻る事が出来ましたが、戦後の東京での生活は
大変でした。食糧確保の戦いは続き、新宿のヤミ市
に母と買い出しに行きました。そうした生活の中で

も、学校に通う事ができるようになり、とても嬉しかったです。

ある日の事でした。先生が授業中に、教科書の多くの部分をスミで塗るよう命じたのです。戦争が終って新しい時代になった事は解るのですが、今まで教わってきた事を否定された。それも自らの手で塗りつぶす事に、とてもイヤな感じがしたのを覚えています。その経験は、為政者に対する不信感として今も残っています。

時が過ぎて、平成十二年に立川に住むようになったのですが、ある日立川中央図書館で一冊の本が目が釘付けとなりました。「中央線419列車（太平洋戦争の中の記録）」とあり、ドキドキしながら手にしたところ、昭和二十年の甲府行き列車での記憶が、まさに記録としてそこにあったのです。

早速、本を取り寄せて読みました。当時の事件が詳細に記録されていて、改めて事実を知ることとなりました。本によると、当時米軍は、艦載機やP51という戦闘機で、民間人を直接銃撃していた事、その中でも最大の犠牲者が出たのが、高尾の湯いのはなの花トンネルの銃撃だったとありました。

その後、ある時偶然にも、古い友人の従姉さんが事件の犠牲者である事が解ったのです。

また立川で知り合いとなった二人の方から“当時、道を歩いていて、機銃掃射に逢い、米兵の顔まで見えた”との話を聞くことがあり、戦争が、大変身近だった事を改めて感じました。

八月十五日

富士見町 馬場 富己子

(八十七歳)

ラジオで、「あなたの八月十五日」と言う番組を聞いた。あの日、私は何をしていただろうと考えてみたが、よく思い出せない。

下町の空襲で焼け出され、親類を頼って行くと、^{また}又そこで罹災。^{りさい}三回も罹災した。着のみ着のままの生活、食料もなく、ラジオすらない暮しだった。

食べ物を見るとつばを飲み込む、一握りのお米を盗んだこともあった。日本が敗けて良かったとか、政治的なことはなにも考えられなかった。サイレンの音がなくなり、逃げなくてすむ安堵感だけだった。ヤミ市では何でも売っていたが、罹災者が行って

も交換する品もない者にはなかなか売ってもらえず、大変だった。

やっと売ってもらったお米も、駅で検閲によって没収されたことも^{たびたび}度々だった。ホームで寝たこともある。若かったからできた数々の思い出は、懐かしむというより二度と経験したくないものだ。

戦後、七十一年、なんだか不安な世の中になってきた。

平成二十八年七月記

戦後七十一年生きのこったものに

富士見町 馬場 富己子

(八十七歳)

昭和二十年、B29が焼けただれた東京の夜空を低空で飛んできた。操縦士が“ニヤッ”と笑ってい

たのが見えた。ようやく朝になり姉が大声でコンクリートと塀に穴があけられ地上に出た。たくさんはまだピンク色した死体がゴロゴロころがっていた。

私は此の頃、朝方下町で空襲にあつたあの頃の夢をみる。

戦後いくとこ、いくとこで空襲にあい、四人姉妹の私達は父母を亡くし生き残った。それからどう生きてきたか、そればかりか広島、長崎に原子爆弾が投下され、戦争が終つたが広島で原爆にあつた私の友人はもつとひどい目にあつた。体は焼かれ生きてこられたのが奇跡といわれたその友も「木の葉のように焼かれて」という文集を出し、私と文通していた。彼女は文才もあり、美しい声で広島の合唱団で活躍し、原爆のおそろしさを世界に訴えて戦った。その友も今年の一月原爆病で亡くなってしまった。

私と年賀状だけは続けていたのに今年はなかった。電話を入れると御主人から訃報ふほうを聞かされた。私も体調がよくなかったので行けなかった。

彼女の美しい声と美しい文章を忘れることができない。「つづれ」の文集を送って彼女から「木の葉のように焼かれて」の文章を送ってもらったが、最近では体調もよくなかったし編集する人も亡くなり発行出来なくなつたとの事。生きている限り私は大変な思いをした人間のひとりとして語り続けた。彼女の熱い思いを。

戦後七十年のこの年に又、戦争法案が通り不安な政治情勢。戦争体験した人も亡くなり、生き残つたものの一人として何とか語り続けなければならな

平成二十七年一月記

幼い日の空襲体験

富士見町 鈴木 サチ子

(七十六歳)

私は昭和十五年生まれなので、終戦の昭和二十年には五歳を迎えていた。その当時のいちばん怖い思い出として頭から忘れられないことがある。それは戦争末期の昭和二十年四月初旬、立川市富士見町五丁目山中坂の出来事の記憶だ。

あの晩何時ころだったか、たぶん夜中だったと思う。母と祖父母が私を起こした。「早くはやく着替えなさい」という声は切羽詰^{せっぱ}まったもので、私は手を引かれて家の外に出た。夜空が月もないのに明るい。その明るさがスーツと消えて、また明るくなる。遠くでずしんずしんと何か音がして、私の近所から

オレンジ色の炎が見える。祖父は私の手を強く引いて防空壕のある山中坂のほうに向かって走った。

明るい光のことは私が小学校に入学してから知った。米軍の落とした照明弾だった。

山中坂の防空壕はもう人がいっぱい入ることが出来なくて、崖^{がけ}に沿った西側の防空壕に入った。壕の中は暗く、多くの人がひそひそ話をしている。その話は私には分からない。ただ怖いという記憶しかなかった。よく見ると母の姿はなかった。

長い時間が過ぎて外は明るくなり、人々はそれぞれの家に戻っていったのだろう。私も祖父と祖母に手を引かれ家に帰った。母は一人家を守って一晩中起きていたという。母ちゃんが無事だったことがうれしくて私は泣いた。

それからどのくらいの日が経過したのか分から

なかったが、近所のおじさんやおばさんが大変だ！
大変だ！　と言って山中坂のほうに急いでいた。お
そろおそろ大人のあとをついていってみると、山中
坂の防空壕は潰れて、坂に多くの遺体に筵がかけ
られ横たわっていた。小雨が降って根川の桜の蕾
がピンク色になっていた記憶がある。

立川には飛行場があったせいか、いく度かの空襲
があった。私は今、この歳になってもあのときの記
憶は頭から離れない。戦争を体験した人々も私の周
りから一人、また一人とあの世界に旅立って行かれ
た。

八月十五日、この日が来て、広島や沖縄の記憶が
語られるたびに、戦争を知らない我が孫たちに、せ
めて私の五歳の記憶を話しても実感が伝わらない
かもしれないが、これからときどきは聞かせ、戦

争の恐ろしさを伝えていきたいと思う。あれからも
う七十一年になる。

平成二十八年六月記す

カラフト脱出

若葉町 小林 照子
(九十一歳)

大正十四年、山梨県鳳来村で生まれました。父は
軍人で、樺太の国境警備を命じられ、私は生まれて
三ヶ月のときに、両親に連れられて樺太へ渡り、ソ
連との国境近くのシスカ(敷香)という町に住ん
でいました。国境には鉄線が張られ赤い電球がつい
て、夜になるとチカチカと光ってきれいだったの
を覚えています。

私は女学校を卒業すると、軍の監視隊本部に勤め

ていました。戦争が始まって、シスカの町は、空襲とか、焼夷弾が落ちてくるといふ事もなく、いたって平和なものでした。

大変だったのは戦争が終わってからのことです。

昭和二十年八月十五日、日本の降伏宣言を受け、アメリカ軍、イギリス軍は翌日には武装解除命令を出し、即座に戦闘行為を停止しましたが、ソ連軍はこれを見捨てず樺太へ侵攻してきたのです。そこで避難命令が出て、婦女子や老人を優先的に樺太を脱出させるため、潜水艦での移送が始まりました。軍人だった父は残り、母と私はとるものもとあらず、折り重なるようにトラックに乗りこみ、大泊港から潜水艦に乗り、北海道へ向かったのです。

父はその後、ソ連に連れて行かれました。

私の母は病弱だったため、潜水艦の底のほうにあ

るベッドに寝かせていました。

私は大切なものは背負って、上のほうにいたのです。

ところが、国籍不明の潜水艦の攻撃を受け、機雷が当たり、潜水艦に穴があき、母のいた一階の部分に水が入ってきました。私は必死に母を探したのですが、見つかりません。穴から人がどんどん海へ吸い出されていくのを目の当たりにしました。「助けてー助けてー」と、必死によじ登ろうとするのですが、私たちにはどうすることもできませんでした。そして、それもやがて、見えなくなってしまったのです。母もついに見つかりません。

潜水艦は動けなくなりましたが、それでもプカプカと浮いていました。どのぐらいそんな状態が続いたか、私には何ヶ月にも思いましたが、やがて救助船に引っ張られて北海道へ上陸しました。

北海道は江別という、山のほうですが、そこにテントのようなものを張り、輸送のための汽車が出るのを待ちました。

小さな小屋におじいさんとおばあさんが二人で住んでいて、何かと優しくしてくれました。とはいっても、大勢が避難してきたので食べるものがありません。おじいさんが、この道を行くとじゃがいも畑があるからと教えてくれて、夜こっそり掘ってくるのです。そして、水が貴重なので洗うなんてことはしないで、手でちよちよと泥をとって、大きな鉄鍋で茹で、皮をむいて、石臼ですり潰し、お餅のようにしてみんなに配りました。若い私は先にたつて働かなくてはいけません。でも、「カラフトっ子は泥棒だ！」と言われ、悲しい思いをしました。

“カラフト人”と言われたこともあります。同じ日

本人同士なのに……。

そんな生活が三ヶ月ぐらい続いたでしょうか。年寄りの中には亡くなる人もいたし、妊婦さんもいたけど、赤ん坊が生まれても満足に食べてないのでおっぱいも出ない。生まれた赤ん坊が、いつのまにかいなくなっているということもありました。本当に言うに言えない辛い毎日でした。

やつと汽車が出ることになり、牛や馬が乗るような貨物列車にギュウギュウ詰めに乗って函館へ、そこから船で青森へ上がりました。そしてまた汽車に乗り、東京は進駐軍がいて危険だからと山の中を遠回りして、父の実家のある小淵沢に着いたときは、もう冬になっていました。

独りぼっちになってしまつて、「自分の身は自分で守らなきゃ」と無我夢中だったので、小淵沢の駅

にたどり着き、迎えの人の顔を見たら、たまっていた涙が一気にあふれ出しました。

（聞き書き 岩本紀子）

戦争は終わった

昭島市玉川町 磯部 タマ子

（七十九歳）

私が小学校三、四年生の頃は、戦争は真つ只中^{まただなか}にあった。私が通学した立川第一小学校の校舎の裏に森があり、杉の太木が多く地面は熊笹^{くまざさ}に覆^{おお}われていた。その森の中に生徒の避難用の防空壕^{いく}が幾つか掘ってあった。

その防空壕に避難する訓練を時々していた。

その訓練で私は苦い経験をした。グループごとに入る穴が決っていたのに、私は他のグループに紛^{まぎ}れ

込んでしまった。後で担任の先生に叱^こられた。防空壕といってもすり鉢のような穴だった。今思うところの穴で命を救われるとは思われない。

私の家の庭にも、父と兄達で防空壕を掘った。かなり深く横穴もあった。

此処^{ここ}立川は飛行場があつた^{ため}為か、何箇所か爆撃を受けている。空襲警報が鳴る度^{たび}に、昼夜にかかわらず、防空壕に避難した。

ある時、防空壕に入っていたら異様な音がした。私の家の五、六軒後の家に焼夷弾が落ち家が一軒無くなった事がある。私はその時、此処にも何時か焼夷弾が落ちて死ぬだろうと思った。夜中に空襲警報のサイレンに起こされ、隣組の人達と多摩川辺まで避難した事もある。

多摩川を挟^{はさ}んだ対岸の西の空を見ると、暗闇の空

が赤くなつて、B29が焼夷弾を落しているのも見た。それは八王子が大空襲に見舞われた日だった。

東京の大空襲の時も、私の家から見た暗闇の東京の空は、オレンジ色に染つていた。その時の光景はキャンバスの油彩のように思い出せる。

今年も又、ギラツク太陽と共にやって来た終戦記念日は、七十一回目を迎え、原爆を投下された広島、長崎の式典の模様をテレビは報じていた。

小学校四年生だった私は、終戦の八月十五日をよく覚えている。近所の友達の家で、天皇陛下の声を聞いていた大人達は、肩を落とし目頭を押えたりしていた。その様子を見ていた私は、何か大変な事が起きたと思った。

ラジオで天皇陛下は、日本が戦争に負けた事を伝えたのだ。戦争は終った。あの時私は小躍りしたく

なるほど嬉しかった。

まず空襲警報のサイレンを聞かなくてすむ。サイレンが鳴って学校から帰る事も無くなり夜中に起されたり、防空壕に逃げ込む必要もなくなる。

戦争は終ったが、それには幾つもの悲惨な戦災が代償となった。

戦争は遥か昔の事になり、戦争体験の人々も少くなっている。戦争は多くの命を奪い、特に若者が犠牲となった事が悲しい。

今、これだけ進歩した世の中に、戦争がどこかで起きている事が不思議である。

平成二十八年八月

激戦の地より

富士見町 清水 尅子^{とき}

(八十歳)

その一

尅子君お元気ですか。大変にご無沙汰^{ぶさた}いたしました。先日もお便りに、兄ちゃんと別々に手紙を下さいと言ふことでしたから、今度は尅子に差上げ^{さしあ}ます。

内地は日増しに暖かくなり、もうすぐに前の新道の桜、学校、又天王山^{また}の桜等咲き始めることでしょう。尅子にもその後益々^{ますます}元気で兄弟仲良く、友達と共に一心に通学の事と思つて居ります。本年は英計も一年生になった事とて、学校に行く時は仲良く連れ立って歩く姿が目に写ります。又後に弘が一人となり淋しがるでしょう。学校から帰つて来たらよく

遊んであげて下さい。父も大きくなつた英計、弘の頭を撫^なでてあげたいが、何分にも遠い戦地に働いて居る事とて、尅子君が二人の頭をお父さんからだと言うて撫^なでてあげて下さいね。戦^{いくさ}は益々はげしくなります。尅子君にも体を大切にして一心に勉強して立派な日本人となつて下さい。兄さんに宜^{よろ}しく、母上に宜しく、英計、弘に宜しく。

満洲第一〇〇事業郵政局気付

満洲第一四五部隊 加藤隊の一

小澤清作 父より

その二

尅子さん度々手紙下されお礼申します。九月三日に出した手紙本日拝見いたしました。

仰せの様にもう秋ですね。工場の庭でオオシンツクが鳴いておりますか。北支も内地と同じ様に秋とな

り、日中も大変涼しく日も短くなりました。時々お父さんの夢を見るとの事、お父さんも毎夜のように孝志、尅子、英計、弘等の夢を見て朝になって驚きます。二、三日前のことです。孝志と尅子が河原で釣りをしていると、一匹の蛇が二人の首にからみ付き二人共泣いて居る所へ父がかけつけ、其の蛇を取り目がさめました。二人共家の許しがなければ河原の方迄遊びに行かないようにしなさい。次に家中皆元気との由誠よしまこと さだまことに幸さいわいです。増々お氣をつけて下さい。それに尅子にはお月様が出ると、そのお月様にお父さんが写って目も鼻も耳もみんな見えるとの事ですが、父の方でもお月様の時は尅子等みんなが、此の美しい月を見て居ると思っております。又お便りいたします。父も元気になりました。お母様に宜しく。お祖父母様に宜しく。

北支派遣乙一八三八部隊 井上隊

戦争と言う極限状態の中で人間が思うことは、故郷に残して来た、妻子、恋人、両親、兄弟等への切なるものだったのだろう。

赤紙一枚でたくさんの人達が最愛の家族の元から戦場へと送られ、悲しい別離を強いられたのだ。私の父も昭和十八年の春、満洲方面へと召集された。その後北支に移り、次第に激しさを増す戦いの中で、多くの戦友を失ってしまった。父より私に送られた便りは四通、その内容から私の手紙がどんなものだったか推測もできる。父を独占したい私の我儘わがままを聞き入れて、消灯前のわずかな時間をさいてくれたのだと思う。くたくたになった身体に鞭打むちってペンを走らせる父の姿が浮かんできて、読むたびに涙がこみあげてくる。八年前に父を亡くした現在、四枚の

ハガキはかけがえのない宝物になった。

さつりく はかい ぼうだい ろうひ
殺戮、破壊、膨大な浪費。その上に人々の深く悲

しい精神的な痛手ははかりしれない。なのに戦争は
繰り返されてきた。何故なぜだろう。

七十年前その時母は

富士見町 清水 剋子とき

(八十歳)

戦争の時代を懸命に生きた一人の女として当時の母にスポットをあて、記憶の糸をたどってみたい。
第二次世界大戦の勃発は、私達家族にも大きな変化と苦しみをもたらし、中でも母は、ことばで表現できない位の辛苦を背負うことになってしまった。
私の家は、埼玉県入間川町で節句人形を作っていた。激化する戦争の波に、町工場は次つぎと軍需工

場へと姿をかえ、私の所も無線器の部品をつくる
「理研電具入間川分工場」となった。近隣から集められた女工さん達と一緒に、学徒動員の女学生も通勤するようになった。静かだった工場内には、モーターが設置され、磁気を削るグラインダーの音が、終日響きわたり、油にまみれた機械を前に、軍手をした工員さんが立ち働く姿は、百八十度の変革と言える。それでも父がいるうちはよかった。

昭和十八年の春、父に召集令状がきた。それまで父の陰で、ひっそりと暮していた母に責任者としての重荷がのしかかってきた。二人の伯父が手を貸してくれたが、母が工場内にいる時間は増えるばかりで、家庭内の仕事、よちよち歩きの弟はお手伝いさんに任せるよりなかった。

工場の近くにあった広場で、毎日朝礼があり、百

人近い工員さんを前にして、訓示を与えていた母を覚えている。責任ある立場になると想像以上の力が湧きでるのだと思う。

家族は、川越の中学に通っていた兄、第二人、東京から疎開してきた母方の祖母、叔母、従姉妹、お手伝いさん、住みこんでいた事務員さんで十人になっていた。食料も衣服も不足していたあの頃、大家族の生活をどのようにやりくりしていたのか、苦勞しのが偲しのばれる。

昼夜を問わず、サイレンが鳴るとまず工場の重要書類が防空壕に運びこまれる。工員さんは地下壕へ、私達は門前に造られたコの字型壕に避難した。あら削りの防空壕は土がむき出しで入るとプーンとかびくさ黴臭い。ローソクの明りがゆらぐ中で、母から手渡されたさつまいもの飴あめを舐なめながら、警報解除のサ

イレンを待っていた。おいしかった茶褐色ちやかつの飴と防空壕は、妙に結び付いて忘れられない。

八月四日、消化不良を起こしていた祖母の容体が急変した。祖母は宙を見つめ、意味のわからないことを、声もだせずにしゃべり続けていた。急いで呼んだ医師も、手の施しようもなく、みんなの見守る中で息を引きとった。「何もしてあげられなくてごめんなさい」亡骸なきがらにすがって泣く母。祖母もどんなに東京の家に帰りたいかったか。七十四歳だった。

八月十五日、工場内はモーターが止まり、早朝から整理、清掃など慌あわただしい空気に包まれて、子供の私にも異常さは感じとれた。正午からの玉音放送が終ると、静かに聞いていた工員さんの間からすすり泣きの声、次第に泣き声は大きく広がっていった。放送の内容は十歳の私には理解できる訳がない。少

したって、目をはらした母が工場から出てきた。

「戦争は終わったのよ」

「それじゃあ、お父さん帰ってくるね」 私は心の中で何度もくり返し、その嬉しさに満たされていた。けれど父の帰りを誰よりも待っていたのは母、聞いて欲しい話が山のようにあったに違いない。

七十年前の母、苦しさも悲しい出来ごととも自分と与えられた運命としてのり越えた、この強い母の影で、現在の私達があることに感謝している。

脳裏に宿る空襲の恐怖

富士見町 鈴木 功

(八十六歳)

私が小学校五年の時(十一才)、太平洋戦争が始まった。昭和十六年十二月八日のことだった。戦争

ってどんなことか余りよくわからなかったが、遠くハワイ真珠湾で大きな戦果をあげたと報じられたとき、日本はすごく強い国であり、大変なことが始まったんだ、と子供心に思った。私の隣家のお兄さんと呼んでいた人が、飛行機整備士で戦地に行き、支那(中国)、フィリピン、シンガポール、ラバウル、セレベス、ボルネオなど日本軍がどんどん進んでいく地から私によく手紙を送ってくれた。当時、新聞でも日本軍の優勢が毎日のように伝えられた。

私が立川第三小学校(今の四小)を卒業するまではそんな日々が続いたが、すごく強いと思った日本軍の勢いにも限りがあり、旧制中学校に入ると共に、授業もおろか、食糧不足に悩まされながら教練だ、学徒動員で工場通いだ、空襲だ…とあわただしい日々が続いた。昭和二十年八月十五日、私は隣家の

庭で終戦の玉音放送を聞いたが、計り知れない大きなダメージ、とり返しをつかない悲劇の数々を目にし、茫然ぼうぜんとしていたことを思い出す。

今、かえりみて当時の恐怖や悲しみなど、数々のことがはつきりと脳裏に残っている。一つ二つ例を上げるなら、米軍の本土決戦が激しくなると、飛来する米軍機も多くなり、頭上高く空中戦も度々たびたび行われ、小さな日本軍の飛行機がB29爆撃機に体当たりし、双方火を吹いて落ちるすさまじい光景も目にした。また、私の家のすぐ近く（富士見町三丁目）にあった高射砲と探照灯陣地が、はげしく敵機を映し出し攻撃するも、敵機の高度が高くちつとも当たらず、爆弾や焼夷弾を落として飛び去っていった。高射砲の炸裂した破片がトタン屋根を突き破り、雨漏れをふせぐため父が、布にコーラルを塗りつ

け穴を防いでいた。

家の防空壕へ入る回数も日々多くなった。灯火とうか管制かんせいと言つて、家では電灯の傘に黒い布をかぶせたことも大変なつかしい話である。

昭和二十年三月十日未明、富士山の方から立川上空をかすめ、東の方へB29が何十機、何百機と編隊を組んで飛んで行く。私はこの夜、残堀川の土手近くの防空壕を出たり入ったりしながら近所の人たちと目にした。

暗かったので、探照灯に映し出されたB29がキラキラ光りとても不気味だった。高射砲がどんどん打ち上げられたが、飛行高度が高くちつとも当たらない。やがて東の空が赤くなり、時間がたつにつれ広い範囲が真っ赤に染まった。東京大空襲である。これは大変なことになってしまったと思った。後で

知った話だったが、焼失家屋も多く十万人以上の方々が一夜にして亡くなられた一大悲劇が起こった。

立川で爆弾や焼夷弾が落ちて被害のあったのは約十三回と聞く。私の住む富士見町でも、四月三日深夜から四日未明にかけて落とされた爆弾によつてつぶされ、四十二名が亡くなられた山中坂防空壕の悲劇は脳裏から消えることがない。

昭和二十年八月二日深夜、空襲警報が鳴りしばらくして八王子方面がやられ、南西の空が真っ赤になった。私の親戚は元八王子ですぐ裏は山という所であつたが、焼夷弾の直撃を受け焼失してしまった。やがて空襲警報は解除され、防空壕から出て母屋の蚊帳の中にもぐった。安心のひと時だった。しかし、眠りにつくか、つかないうちに、再び空襲警報が鳴

りひびき、あつと言う間、ヒューヒュー、ゴーゴー、不気味な音と共に、富士見町周辺が焼夷弾による爆撃にあつた。私の家近く、あちこちに落ちた。私の裏の家は大きな草葺くやふきの家、直撃をくつてたちまち大きな火柱となった。敵機の爆音を聞き、恐怖におのきながら、近所の人たちがみんな出て来て消そうとしたが、火の勢いはますます増して近寄れなかった。しかたがないので、せめて隣家への類焼を防ごうと、バケツリレーで家の羽目板に水をかけた。

この日、富士見町ではかなりの被害を受けたようだ。戦後になつても、焼夷弾の不発弾が畑に埋まつていて、耕作する農夫が農具にひっかけ、爆発して大けがをしたこともあつた。

私は、今でも照明弾に照らされながら身を隠したり、艦載機に追いかけられ機銃掃射をあびながら逃

げまとうことなど、いろんな体験が夢の中に出てくることがある。

戦中戦後の農業

富士見町 鈴木 藤太郎

(八十八歳)

この記事は、農業日誌に書かれたものの一部分です。

昭和十六年（一九四一）に太平洋戦争が始まり、日本がアメリカやイギリスと戦うようになってから、人々の暮らしは困窮の度を増していった。

この年、東京、大阪などの六十六都市において、食料品で最初の米穀配給通帳制が実施され、配給基準は一人当たり一日二合三勺しゃくと決められた。そし

て翌年には食糧難が深刻化し、食糧の買い出しや闇取り引きが横行するようになった。私の家で穀類や、いも類の供出を行うようになったのは昭和十五年左右。政府が主要食糧農産物を農家から強制的に供出させて買い上げること、この制度は戦後にまで持ち越される。

こういった制約はあったものの、食糧難の時代にあつては、食糧の生産元である農家の暮らしは、他と比べれば少しはゆとりがあつた。そうしたなかで、菜園荒らしや買い出しの人が、畑にひんぱんに現れたのである。

戦局が厳しさを増した昭和十八年頃は、焼夷弾が落ちた場合の消火訓練などに時間を取られ、農作業もおろそかになりがちだった。敵機襲来で空襲警報たびたびが度々出るようになると、畑から急いで家に戻り、

家族と一緒に防空壕などに避難。畑仕事は能率が上がらず、収量は落ちるし、草は生えるし、その中で供出はいやおうなしに出さなければならず、農家は大変な毎日だった。

食糧難は大変深刻を増し、終戦間際には餓死者がししやが続出したほどだった。農家の場合は、食糧の生産元であるし、一日の保有量も、労働が激しいというところで一般の人よりも多く認められていたため、比較的ゆとりがあった。よく、「百姓は堅いご飯を食べ」とか「百姓の子は米の弁当なんか持ってきてきて…」などと言つて、ずいぶん非難されたものだった。それでも、決してぜいたくをしていたわけでもない。主食は雑炊ぞうすいが中心だったし、サツマイモの葉やコーリヤン、ふすま、おからなどをはじめ、道端に生えているハコベ、ヒデリグサ（スベリヒユ）、オオバ

コ、ナズナなどでさえ食糧にした。サツマイモなどはごちそうの方だった。

食糧難で農家も困っていたが、食糧の生産とは縁のない人々はもっと困っていた。それで、しばしば物々交換や、禁止されているはずの自家販売が行われ、野菜の盗難が続発したのである。

物々交換は、私の家の例だと、主に知人との間で行われ、上等の着物と米や麦を交換した。自家販売は米や麦に限らず、野菜についても行われた。ナスの収穫の最盛期など、朝暗いうちに畑に行くと、もう暗闇に人影があり少し明るくなるにつれ人影は数を増していった。自家販売はとてやかましかったけど、困った人が来るとつい人情で売らざるを得なかった。

事態が事態だから、なかには黙って持っていて

しまう人もいる。ナス、トマト、キュウリなど、当時は何でも盗まれた。しかし、どろぼうは滅多にかまらないが、或る日、ナスどろぼうが、かがんで盛んに取っているので、そつと後から近づいて行き、手にした長い棒で羽交い絞めはが いじめにすると、あばれ出し大変だったが、「もうしません…」と謝った相手は何と近所の顔見知りの人で、かけつけた巡査も見逃がし、どろぼうが置いていった「ナス」は、みんな巡査がもっていった、などとのエピソードもあった。

田舎少年の八月十五日

福生市熊川 布施 孝

(八十三歳)

夏休み半ばなかの暑い日だった。我が家の座敷の棚に

あるラジオの前に、青年学校教師の父と在郷軍人の父の同僚が直立不動で並び、近所の人々の後に母と自分と弟二人、皆正座して天皇陛下の厳かなおそろお声を聴いたのだった。

放送は長く「御名御璽ぎよめいぎよじ」でやつと終ると、

「敗けたということか……」

父はそう言ってて同僚と外へ出て最上川の方へ向かって行いった。後を追おって行くと二人は川端に並んで肩を震てぬぐわせながら、手拭で顔おほを覆おほって泣ないていた。自分と弟はその悲しそうな後姿を見ながら、少し離れた砂場へ座り砂いじを弄いじっていた。

○

大東亜戦争は昭和十六年十二月八日、日本軍のハワイ真珠湾攻撃によって始まった。そして我が国が掲げた「大東亜共栄圏」のスローガンが少年期の私

の心を大きく掻き立てたのだった。

開戦して優に三年も過ぎた二十年三月、B29三百機余りの東京大空襲のニュースを聞いて間もなく、自分達は国民学校初等科を卒業した。二つ年上の次兄も高等科を卒業すると満蒙開拓義勇軍に志願、その基幹学校に抜擢されて茨城県内原訓練所へ発つて行った。自分も高等科を卒業すると兄を追って義勇軍に志願するつもりだった。

七月に入ると農家の我が家を背負っている長兄に召集令状が来た。兵役検査に合格していた長兄に世間体を気にしての待ちに待った赤紙が来て、勇んで仙台の砲兵隊へ入隊して行った。二人の兄が抜けて三男の自分と四男、五男の弟は家の手伝いをよくしたが母には物足りずに愚痴をこぼしていた。

南方に於いての戦況がだんだん激しくなつて来

た頃から、教室での授業は少なく食料増産作業と軍事教練の練習が日常となった。

冬のある日、山の炭焼き小屋から町役場まで炭俵を櫓に積んで運び出し、春には軍用機の燃料になるという松の木の根を掘り起こし町の松根油工場へ集積し、初夏になると軍馬に送る飼料の干草刈り、秋には戦地の兵隊へ佃煮に加工して送るイナゴ捕り、これは全校生徒の役だった。

そして前半、米の不作だったにも拘らず、農家へ課せられた米の供出命令は厳しかった。どこの家庭でも大根カテの飯にも間に合わず南瓜や芋の代用食ばかり、それでも足らず野山へ出かけて松の木の内皮を剥いてきて餅に搗き、冷夏によく実るという笹の実を採って粉に挽き団子にした。ざらざらして味は無かった。

学校の実習畑には南瓜と芋を植え、校庭の端の空地では大豆を収穫した。さらに畑を求め町外れの^{のらやぶ}野良藪二町歩を開墾する^{かいこん}ことになり、我等高等科一年の男女百六十名が先駆けとなって現場へ入った。雑木を切り根を掘り起こし笹を刈って焼き払い灰にして、やつと柄^えの長い鍬^{くわ}で土を掘り起こした。殆^{ほと}んどが農家の子で作業は馴^なれていたが開墾は初めてだった。自分は勉強の出来は悪かったが作業は得意で、初等科六年の卒業には優等生の賞状^{もら}を貰った。紀元二千六百年の歌を習い、教育勅語、歴代天皇名、軍人に関する五箇条の暗記を強いられ何度も何度も練習した。

一方、軍事教練も欠かさず手旗信号、戦闘機の操縦桿^{そうじゅうかん}、電信モールス信号などを実習、それに極め付けは、米兵に仕立てた藁人形^{わら}を竹槍^{たけやり}で突くこと

だった。教官の在郷軍人の罵声^{ばせい}を浴びながら、鬼畜米兵の精神を叩き込まれていた。「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、極端な物資の欠乏にも、苛酷^{かこく}な労働にも耐え、神国日本は敗る筈^{はず}も無く、いつかはきつと勝利することを誰もが信じていた。

夏休みに入って間もなく広島、長崎への原子爆弾投下の大ニュース。この新兵器の惨状に日本中が驚愕^{きょうがく}したのだった。

此所^{ここ}、我が田舎の公園の高台に監視哨^{かんししょう}があつて、青年団員が昼夜交代で敵機来襲を監視していたが、通り過ぎて行つたB29を見たのは二回だけ、そして警戒警報は夏に入ってから十回ほどで、東京や広島などの爆撃被害は想像も付かないことであつた。昭和二十年八月十四日ポツダム宣言受諾^{じゅたく}。明日は天皇陛下による重大放送があるという報せ^{しらせ}が町中

を走った。

明けて十五日正午。

「……朕^{ちん}ハ時運^{じうん}ノ赴^{おもむ}ク所堪^{ところた}ヘ難^{がた}キヲ堪^たヘ忍^{しの}ヒ難^{がた}キヲ忍^{しの}ヒ……」

田舎の静かな一軒家に玉音放送が響いた。

○

最上川で泣いていた父と遠回りして神社に向い、参拝を終えて家路に着く頃は夕暮れになっていた。家に着いて見ると灯火管制の覆いを外した裸電球の光が眩^{まぶ}しいほどに、座敷で待っていた母と末弟を照^{てら}していた。

敗戦忌

福生市熊川 布施 孝

(八十三歳)

今年も八月十五日の終戦記念日には、テレビ映像に合わせて黙^{もく}禱^{とう}した。私はこの日を終戦記念日と言うより敗^{はい}戦^{せん}忌^きと言う方がいい。そして太平洋戦争と言うより大東亜戦争と言う方が身に染^しみている。日本がアジア支配を目指した「大東亜共栄圏」のスローガンに子供心に憧^{あこが}れていたからだ。

国民学校初等科三年の十二月八日、日本軍が「ニイタカヤマノボレ」の暗号命令にハワイ島真珠湾のアメリカ艦隊を奇襲攻撃して戦争が始まった。そして間を置かず武力に必要な資源確保のため、イギリスやオランダ支配のインドネシアや南洋諸島制圧

を目指して進軍した。さらにマッカーサー大将の率
いる基地、フィリピン・マニラを占領、さらにニュ
ーギニア島近辺の島々へ進軍して日米主力艦隊と
の激戦が始まった。そこで日本軍の連戦連勝の大本
営発表をラジオで聞きながら小躍りして軍歌の
「轟沈轟沈」^{こうちんこうちん}を歌っていた。ニューギニアやガダル
カナル、ラバウル、ソロモン、グアム、テニアンな
どの島々の名を子供ながらに覚え知ったのである。
それから暫くすると、日本帝国が治めていたサイ
パン島で島民を巻き込んだの激戦で玉砕したニュ
ースを痛々しく聞いたのだった。

そのころからアメリカ軍の圧倒的な武力に日本
軍は徐々に後退、日本領硫黄島^{いおうじま}が占領され、そして
沖縄も占領された。日本本土爆撃が始まったのは二
十年三月だった。容赦ない焼夷弾爆撃は雨霞のごと^{しやういだん あられ}

く、日本軍は対抗する弾薬も尽きていた。八月に入
って夏休み最中、思いもよらぬ新型原子爆弾が広島
と長崎に投下され、さらにソ連の対日宣戦布告にや
つと無条件降伏したのだった。思えば沖縄上陸寸前
に降伏していれば、東京の焼け野原も広島、長崎の
惨事も満州開拓団の辛苦もロシア抑留の悲劇もな
かった筈だ。今更思うと残念で堪らない^{はず たま}。

最近、二人の子持ちになった娘が、
「お父さんに子供の頃よく戦争の話を聞かされて、
私も時々子供達に言い伝えたが戦争の話は百年経
つても消えることはないだろう」と娘は言った。

先日、団塊世代の友達七人との呑み会^ので戦争の話
になって、日本軍がシンガポールを占領して「昭
南島」^{なんとう}と名付けたことを彼等は知らない。「布施さ
んにはもう吞ませないで、戦争の話は終わらないよ」

と言ってみんなに笑われてしまった。

あの太平洋戦争は、昭和の初期からその気運があったと史実に記されている。その歴史を勉強して戦争が二度とないアジア、それに世界の平和が私の願いである。

集団疎開の児童達

一番町 高橋英子^{よう}

(九十歳)

昭和十六年十二月八日、日本は真珠湾攻撃で、米
国に宣戦布告し太平洋戦争が勃発した。未だ^{いま}日支事
変は解決していなかった。戦争当初は勝っていたが、
米国の圧倒的軍事力により、本土に毎晩のようにB
29爆撃機が飛来し、軍事施設を標的に焼夷弾の爆
撃がすさまじく、近隣の住宅にも類焼し、住民は避

難を余儀なくされた。小学校は国民学校と改名し、
将来の国民の育成に力を入れていた。爆撃が激しく
なった^{ため}為、昭和十九年六月三十日、「^{がくどうそかいそくしん}学童疎開促進
要綱」を政府が閣議決定し、都内の国民学校三年生
以上を集団疎開させる事になった。比較的軍事施設
の少ない地域の旅館、お寺、学校などを当てた。世
田谷区中里国民学校を卒業した私は、学校長の要望
で寮母として、疎開児童に付き添って行った。世田
谷区は長野県で、松本市里山辺温泉だった。三つの
旅館に別れ、私達は金宇館で生活を始めた。
当時は^{すべ}総て、軍事優先。食糧難で配給制だった。
^{どこ}何処も食糧不足で困っていたが、旅館の人々や近所
の農家の協力で何とか配給を工夫し、児童達に食事
を調達してくれた。

そんな中でも、児童達は里山辺国民学校に通い勉

学に励んだ。育ち盛りの児童達は、親もとを離れて寂しい思いをしているのに、おやつなどもなく、配給のさつま芋やとうもろこしがたまに出るだけで空腹をかかえ、可哀相だった^{かわいそう}。病気にかかっても薬もなく、東京の実家に帰っても、十分な医療もなく亡くなった子もいた。ある日、里山辺の学校も機銃^{きじゅう}掃射を受け、危なくなり、再疎開をした。下伊那郡河南村の山の上のお寺だった。住職さんのご好意で野菜などあり、まずまず落ち着いた生活が出来た。^{となり}隣の部落へ行った児童達が、食中毒で大部、亡く^{だいぶ}なつたと聞き、あの子供達も戦争の犠牲者なんだ、本当に可哀相だと思った。戦争は国民全体が被害者になる。絶対にやってはいけないと強く思っている。

私の戦争体験

高松町 山口 昌男

(八十二歳)

私は昭和八年九月、東京世田谷に生まれた。

第二次世界大戦の火種となった日中戦争は既に始まっていた。十五年四月、世田谷の尋常小学校に入學、翌年十二月八日、あの忌まわしい太平洋戦争が勃発した。

開戦当初は陸海軍共勝ち戦^{いくさ}の連続で、子供ながらニュースを聞く都度、小躍りして喜んだものだ。遊びと言えば戦争ごっこ、将棋なども軍人将棋^{はや}が流行る様になって、正に戦争一色の状態であった。しかし、十八年になると戦果の報道にも時に当方の損害の状況が伝えられるようになり、年が明けて十

九年には東京にもしばしば敵機の飛来が告げられ、

「鉄壁の防空態勢」は脆くも崩れて行った。

「学童疎開」のこと

人口密集地は一度空襲を受ければ、その損害は計り知れないものがある。これを避けるため、地方の小都市あるいは郡部へ分散させる方策が執られた。父母の出身地、親類縁者を頼って「縁故疎開」した人もいた。学校単位で地方へ分散する「集団疎開」で多くの子供達が親元を離れて地方へ行った。

集団疎開は十九年の夏休み期間を利用して実行され、私は三年生の弟と二人でこれに加わった。

私達の学校は長野県飯田市が疎開先になり、

対象は 三年生から六年生まで

宿舎は 寺院（本堂） 女子は旅館

生活面は 太鼓を合図の集団行動

通学先は 地元小学校

級編成は疎開学童のみ

手伝い 五年、六年は出征兵士の家へ

（麦刈、諸掘り、桑（枝）の皮剥き）

遠足は 全て徒歩会

顔馴かおなじみの中での集団生活であり、大きな喧嘩もなく仲良く生活出来たが、親元を離れて暮らす淋しさから、二人程脱走を企てた者がいた。途中で発見され無事連れ戻された。

「真夜中の大空襲のこと」

深夜に響く起床太鼓、寝惚ねぼけまなこをこすって起きると「空襲警報だ、早く庭の防空壕へ入れ」と、先生や寮母さん達が皆を必死に起こしている。外へ出ると腹へずっしりとくるB29の爆音がごうごうと響いてきて、あわてて退避壕へ逃げ込んだ。

どうなることかと心配顔で、おしゃべりする者もなく皆ひっそりと静かにしていた。どれほどの時間が経ったか、警報が解除されたので皆ほっとして寝床へ戻った。

後日聞いた話では、富山方面を空襲したB29の大編隊がサイパンの基地に帰投するため、飯田市（長野県）上空を通過して行ったとのこと、何はともあれ私達のいた地域には何の被害もなくほっとした。

小学生五・六年時に強い印象として焼付いている出来事を書いてみたが、日中戦争を含めれば十数年に亘る戦争は大変長く、人的にも経済的にもその損害は甚大であった。使われた言葉は、戦死、戦病死、戦争未亡人、戦災、戦災者、戦災孤児、浮浪者、浮浪児、傷痍軍人等、二度と使いたくない言葉ばかりだ。

りだ。

戦争の被害は結果として戦後の混迷する社会を招来してしまった。極端な食糧不足、ハイパーインフレ、預金封鎖等枚挙にいとまがない。このような状況を大幅に改善する効果を齎したのが朝鮮動乱に伴う戦争特需であったとは何とも皮肉である。如何なる理由があろうとも戦争は二度とやってはならないと改めて実感した。

戦闘機の主翼と開かず落ちるパラシュート

（他三編）

一番町 古川 嘉一

（八十四歳）

いつも飛行機の音が鳴り響いているのに、この日は好天で静かだった。

「あつあれ見てー」悲鳴の声で空を見る。

何だろう。戦闘機の主翼が踊りながら落下中。

短冊をゆっくり動かす如く。父を含め、五人程のメンバーが集まっていた。胴体等は見えない。上空でB29に体当りしたか。「わーっ」又、誰か叫んだ。

また

開いていないパラシュートが飛行士を吊ったまま落ちてゆく。頭部がキラリと光る。陽光が一瞬。誰も黙ったまま。

現場は近い。急いで走り出そうとしたら、「こらーっ子供の行く所じゃねえぞ、行くな」町会長にどなられた。子供じゃない、もう中学生なのに、思いとどまる。

その後、新聞にもラジオにもニュースは報じられなかった。想い^{おも}は何十年も残る。

《初めての空襲体験》

「直ちに電車から離れて防空壕へ入ってくださいー

い」駅員の叫ぶ朝の新宿駅は騒然。東側は貨物車の群れ。突然「グワーン・ダダダッ」大音響と共に真つ黒な機体が幾つも翻^{ひるがえ}ってゆく。「ビューン・ゴーツ」現在の京王デパートのあたり、空地に沢山並ぶ壕の一つに走り込む。大人の二人の男と一緒に。初空襲で気が動転し、他の事は全く思い出せない。電車は止まったままか、登校したか、帰宅したか。怖かった。

《直射命中せず》

当時、理由不明だが警察署がコメの販売許可証を発行していた。それを取りに往復5km

歩く途中、「ダダダッドスンヒューゴー」経験した音一回のみ。コンクリートに伏す。他に歩いている人が無かったので私が目標か。慌てて署へ。「何し

に來た、危ないぞ」コメの許可証を手に。「氣をつけて帰れよ」励まされ氣が樂になる。

《花火が嫌い》

夏になるとあちこち花火大会で賑わう。

私はこれが苦手。米軍のB29の落とす焼夷弾と同じだから。頭の上に降って来る花火は恐ろしい。十数年前、友人に誘われ花火大会を始めて見物した。残念ながら全く楽しくなかった事は言うまでもない。當時を強烈に思い出させた。

立川での生活、そして戦争へ

高松町 中塩 成子

(八十八歳)

昭和十一年一月、私は東京市牛込区つしめ(現在の新宿区)から、立川に引っ越して來ました。小学二年生

で、現在の二小に通学しました。その頃の立川は新宿から程遠い片田舎という感じで、ガスも水道も下水道もなく不便でした。でも北口駅前の大通りの両側には沢山の商店があり、家の近所にもお店があつて買物に不自由はしませんでした。

昭和十四年三月、小学校を卒業。尋常高等小学校(現在の一小の高等科、今の中学)へ二年間通いました。戦争はだんだん厳しくなり、物資が不足はじめました。昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まりました。

昭和十七年三月、十四才で高等科を卒業。四月から立川郵便局の保険課事務員になりました。仕事を厳しく仕込まれ一通りできるようになった頃、職場から男性が一人また一人と次々に戦地へ旅立ちました。代わりに新しく女性が働き、徴用ちようようの人も來

ました。集金や外務の仕事もだんだん女性になり、黒い制服で赤い自転車に乗り走りました。

そのうち、生活に必要な物が、すべて配給制で自由に買えなくなりました。殊に金属が無いのか、小銭まで小さな紙幣になりました。お寺や教会の鐘、銅像等も回収され、各家からも鉄のかまどや、お釜、鍋などを集めました。国の財政が苦しくなったのか、隣組の常会には度々国債の割当てが来て、みんなで相談して分けて買いました。米穀通帳は、今の住民票や保険証のように身分証明となる大事なもので、それによって衣料切符が出されました。木綿類はなかなか買えず、人絹やスフが多くなりました。私は着物をほどこき、洋服やもんぺの上下を作って着ていました。お米の配給の量が少なく、めったに御飯は炊けないので、おいもや大根などを入れて汁の多い

雑炊ぞうすいでした。お米のかわりにさつまいも、じゃがいも、大豆、とうもろこし、短めんなど色々で、お砂糖は貴重なもので栄養もあるけれど、赤ザラメの砂糖がきた時は困りました。どうしたらお腹をいっぱいに出来るか考えました。肉や魚はなかなか口に入らず、野菜まで配給になり、それも少ないので闇の品が出回り、油や調味料、固型の石鹼類を高い価格で買いました。食べられそうなものを何でも買うので、どんぐりの粉はアクが強くて渋く、海草の粉は砂が混じって食べられず、いわしの油は臭くて使えません。とうもろこしの粉を熱湯でよく練り、薄くて丸いお煎餅のようにしてフライパンで焼いたのがとても美味しくて、ごちそうのない時でしたからね。

昭和十九年四月、突然東京の空にB29が現れ、

被害を残し飛び去りました。慌^{あわ}ただしく、故郷や親類、知人を頼って、疎開する人が多くなりました。各家でも急いで防空壕を造りはじめ、防空壕のない人は、疎開しなければならず、落ちつかない日々でした。

北口駅前料亭や旅館、大通りの右側の商店も全部立ち退きました。（現在のビックカメラとフロムの前の通り）左側の店も十三軒位を残して立ち退き、今、立川郵便局のある先まで広く空地になり、駅前には本当に淋^{そろ}しくなりました。防空演習も盛んになり隣組みんな揃^{そろ}って出ました。指導する人が来て井戸水をバケツに入れ、何人もリレー式に渡し、屋根の上の人が火を消す練習をしました。

夏も過ぎ秋になると、疎開先のない私の家では防空壕を掘らなければと、休日や早く帰れた日は、日

暮れまで掘りました。家の脇の狭い土地で、とても大変でした。

夜、家の電燈は一つにして黒い布をかぶせ、灯がもれないようにしました。暗くて食料も燃料もなく寒い冬でした。この頃には、どこで何があるかわからないので、白い小さな布に名前と血液型を書き、服の左胸に縫^ぬいつけるよう言われました。夜も寝巻に着がえず、そのまま寝て居ました。防空頭巾と大事な物をいつもそばに置いていました。

平和を祈って

高松町 中塩 成子
(八十八歳)

昭和二十年四月四日の朝、明るくなるとすぐに、ラジオの東部軍管区情報でB29が近づいている

事を知り、急いで防空壕に入ると空襲のサイレンが鳴りました。間もなく、あの重苦しいB29の爆音が聞こえ、あつ来たと思った時、ずずーんと大きな音がして地響じびきがしました。近くに何か落ちたと感じましたが、出る事も出来ず、じつと様子をうかがっていました。爆音が遠ざかり解除の声に壕から出てみました。家は何ごともなくあり、あつ良かったと勝手口から入ってびっくりしました。座敷の畳一面に薄茶色の土ぼこりが二センチ以上も積っています。靴のまま上って見て歩きました。驚いた事に、北と東の間の窓が二ヶ所。南と西の間の窓と縁側の戸のガラスも全部人がはずして持ち去った様に一枚残らずきれいに無くなっています。素通しや曇りガラスで七十枚位あり、かけらや粉が落ちてしていると危ないのでよく見ましたが、一つありません。何

が起ったのかわかりません。

間もなく、近くに一トンの爆弾が落ち、その爆風が家の中を通り抜けた事がわかりました。爆弾の落ちた場所は、現在高松町大通りの右側に高松町三丁目のバス停があり、その近くにコンビニのセブンイレブンがあります。その通りの真ん中に落ちた事になります。

あの時は、松下さんと言う人の自宅と入院出来る外科の病院がありました。全部破壊されました。私の家からは家並にして二十軒以上も離れてました。時がたつてわかる程、爆風の勢いの強さが恐ろしくなりました。

二日程して、母が婦人会から頼まれ、病院の後片づけに行きました。母によると、通りの真ん中に深い大きな穴があいていて、病院は破壊され薬ビンが

割れて散乱し、危なくて大変だったと、朝早くて人はまだ通って居なかったけれど男の子を連れたお父さんが通りで亡くなっていた事等、詳しく話してくれました。

北口駅前問屋さんで化粧品のクリームを売ってくれと聞き、お昼休みに事務服のポケットにがま口を握りしめ、急ぎ足で駅の方へ走りました。暖かい春の陽差しが私の心を浮き浮きとさせていました。ちょうど北口駅前へ来た時、空襲のサイレンが鳴り、爆音が聞こえました。ふり返ると、駅から遠い西の空に一機の大きな飛行機が見え、あつB2 9だと思った時、何か重い塊かたまりのような物を落としました。爆弾でした。重い物が高い所から落ちる、空気を切る音がシャアと聞こえ、私は駅前の素堀りの防空壕に飛び込みました。L字型に大きく掘っ

た防空壕はふたが無く、空から丸見えです。間もなく爆音が遠ざかり解除になったので、職場へ駆けて戻りました。ポケットの中のがま口が無くなりましたが、探しに行く元気はありません。防空頭巾も持たず、一時でも空襲を忘れていた自分の愚かさおろを反省しました。（素堀りのL字型の防空壕は、現在、北口駅前にあるバスのロータリーの所です。）

空襲は益々激しくなり、それは昼間の仕事ででした。いつものように大事な書類や物を麻の大きな袋に入れ、それをかついで防空壕に入りました。なかなか解除にならなくて、爆音も聞えず静かなので、友達がちょっと外を見ようかと二人でふたをあけてのぞいたとたん、通りの向側の電柱の上の方まで小型の艦載機が降りてきました。何か銃のようなものが見えたので、私達は狙われたと思い、急いでふ

たをしめました。人は無事でしたが屋根の樋といや物置の金の波板に弾たまの抜けた跡がありました。近所の家でも同じような事があったと聞きました。

私の仕事は立川郵便局の保険課の窓口係で、三月の空襲以来移動する人が多くなり、その手続きや死亡した人の保険金を受け取りに来る人が多くなりました。死亡診断書に空襲により焼死とか埋ぼつ死とか書いてあるのを見る度に、戦争がなければ死なくて済んだのにと心が痛みました。

終戦の時、私は十七才でした。あの戦争で大勢の人が亡くなりました。その人達にも様々な一生があったのと思いました。時がたてば忘れると思っていたのに、時がたつ程強く心に残っています。戦争のない平和な世の中が続く事を祈らずにはいられません。

私の戦争体験記

砂川町 高崎 讓治

(八十四歳)

昭和七年生れの私は、離散と空襲と死別を体験する。鹿児島出身の父は、西郷隆盛と同盟した曾祖父そうと祖父に従ってカナダに逃亡し、鮭缶工業で成功し墓も建てたが、日米開戦後は、敵国人として財産没収・市民権剥奪はくだつ・アラスカ強制収容所の囚人となる。

私と弟と母は、日本の名古屋に避難・国民学校に転入し軍国教育で育つ。毎月八日の熱田神宮への戦勝祈願・戦時国債の購入・英霊祭えいれいさいに参列。昭南島しょうなんとう占領祝賀会に参加した来賓將軍の、『さざれ石の巖いわお』とは「小さな日本の朝鮮・台湾・樺太・満州・支那しな・フィリピンフィリピン比島・昭南島の併合が証明」とする演説に雷同らいどうし、

作成した宿題の新地図は、市長賞を受賞し、デパートに展示された。

昭和十八年の空襲拡大と疎開命令で母方の伊豆^{へだむら}の戸田村に疎開した。祖父は、村長で日露戦争の時に金鵄勲章受章^{きんしゅうしょう}・子息八人は、出征兵士・大伯父は、中国戦線で鉄胄貫通被弾後も中隊長救出で金鵄勲章受章^{てつかぶと}。中野憲兵学校に飛び級入学後、皇室^{みやけ}宮家の専属警護官に抜擢された。三男はビルマで、五男は比島で戦死。長女と次女は、義手と義足の軍人の妻となる。断崖漁村の国民学校への通学は、二時間の海路を生徒十四人で櫓船を漕ぎ東岸百キロ^{ろぶね}圏の沼津・田子浦・静岡・御前崎をつつむ春霞^{はるがすみ}の富士山を仰いだ。この景観は、葛飾北斎も横山大観も画かなかった原風景であったが、B29と米艦の爆弾が公然と人類史の自然遺産から抹殺した。我々

の校舎も本土決戦に備えて、海軍の秘密魚雷艇十隻配備の基地を建設する予科練兵千名が占領した。

我々は、村内寺院で分散授業となった。寺院は、安政の下田沖大地震のロシア軍艦沈没の水兵収容の経験があつた。

新兵は、航空兵らしい訓練はなく、徹夜で過酷な基地建設に集中したため、事故を多発させた。しかし、幹部と古参兵^{こさんへい}は「事故はタルミ」であると言し、新兵全員を犠牲者の写真の前に整列させて、海軍式精神棒のヤキ入力で新兵の尻を殴打して基地を完成させた。日本の「七つ釦^{ぼたん}の桜に錨^{いかり}」の栄光と勝利は失望に変わった。小漁村にも米艦グラマン機の爆撃と機関砲攻撃があり、海軍幹部施設は被弾し、私の同級生は即死した。駿河湾の夜間の対岸都市への艦砲射撃弾は、不気味な人工連続地震であり、

昼間のB29の空襲の大黒煙は、西海岸から連日目撃できた。御前崎・浜松・静岡・沼津・三島は赤々と燃えた。

私の妻四歳と一歳の妹は、沼津大空襲を体験した。間一髪で直撃弾の防空壕から救命された時、自宅の火炎と、親族の焼死体を抱く鬼の形相の祖父と、

「顔ヲ見テハダメ」と叫ぶ祖母と、半狂乱の阿修羅顔あしゅらがおの母の悲鳴を七十七歳の今でも鮮明に記憶している。

八月十五日前後の駿河湾には本土決戦用の厳封げんふうの武器弾薬数百万発詰づめの木箱の投棄があつた。大・中・小の木箱詰やつきようの信管・薬莢やくけい・炸裂弾さくれつだん・手榴弾しゆりゆうだん・新型魚雷の漂着に、村役場も警察署も軍幹部も困惑し沈黙した。手榴弾は漁獲に利用され、一発の海中

爆発・激震動に気絶して浮上する大量の魚を数名で集めた。信管と火薬と部品を調合する帰還兵と猟銃免許者は尊敬された。誤作動させて手足を吹き飛ばした老漁夫や青壮年せいそうねんも出た。危険な弾薬再利用漁法は、約一年半は続いた。

潮流は、海底の弾薬箱や日米空軍兵士の遺体を大謀網だいぼうあみや定置網や底引き網や沿岸に吹き揚げた。

私は昭和二十四年新制県立高等学校（元沼津海軍工廠こうしょう）に入学し、ラグビー部に入った。全運動部は、夜は交代で先生とガラス窓の盗難防止の巡回を実施し表彰された。

治安も安定した昭和二十三年、沼津の御用邸に十五歳時の皇太子が学習院の学友二十名と滞在し、初代院長乃木希典大将伝来の赤禪あかぜん姿あかふんどしで西郷島一周の遠泳を実施した。多くの護衛船がついた。市民

は戦前の伝統の御用邸前の「バスの一時停車と最敬礼」は廃止されており、20 M^{メートル}の近くで参観した。

昭和二十八年ビルマで戦死した伯父^{おじ}の遺児^{いじ}の従弟は日本大学三島校（伯父が召集令状で入隊した元三島連隊兵舎）に入學した。

私は、静岡大学（元徳川駿府城跡・静岡第三十四連隊兵舎）に入學した。校舎・備品には、「第三十四連隊之印」があった。奨学金は、返還型で月額二千円であった。大学は、環境汚染と戦争は亡国^{ぼうこく}と教えた。翌年、国と静岡県は、ビキニ水爆被爆漁船員^{すいばくひばくぎよせんいん}の慰霊祭を主催した。

終戦そしてシベリヤ抑留三年三か月

砂川町 宮岡 福太郎

（九十歳）

私は大正十四年十一月、砂川町に農家の次男として生れた。国民学校を卒業し、家業の手伝いをしていたが、当時は少年警察官という制度があり、応募したところ採用され、昭和十九年一月六日から立川警察署に配置、同年五月には警視庁警備隊西部大隊（高田馬場）へ配属された。

同年十二月、赤坂第六連隊に入営、十日後、北支派遣軍として支那（現中国）衣部隊第二中隊で鉄道警備にあたる。その後山東省内の作戦に参加し各地に転戦中、深夜分哨所を襲撃された。所外に出て応戦中、私は伝令を命じられ中隊本部を目指し、真つ

暗な中飛び出した。本部では全員整列中であつた。途中で足に怪我を負つたため足元がふらつき何かにつまづきよろけながら隊長前で倒れた。隊長は「宮岡か。大丈夫か。お前は残れ」と言つた。前進命令、分哨長は八路軍からの手榴弾攻撃で戦死、他二名負傷。当部隊はその場で別命令待機。その後部隊は本土防衛のために水戸方面の任務に当れとの命令があつた。铁路移動中、対ソ連戦に備えて防衛陣地を構築するように命令が変更され、現在の北朝鮮、咸鏡南道定平郡定平で国民学校を拠点として陣地構築作業に取り掛かつた。

三日後の八月十五日に同地で終戦を迎えると、銃器の菊の御紋を全てヤスリで削り、軍隊手帳、秘文書等を焼却し兵器類は校庭に並べ別名待機となつた。八月二十二日には将校と下士官以下が別離され、

私達下士官以下約二千名はソ連兵監視のもと、定平から四キロほど離れた富坪収容所に収容された。徒歩で移動中に見たのは、道路に戸毎にロープを張り巡らし、「日本人立入禁止」と書かれた看板。現地の大人から罵詈雑言ばりぞうごんを浴びせられ、子どもらは唾をかけるやら小石や棒切を投げつけた。昨日までは「兵隊さん、兵隊さん」と言っていたのに。手のひらを返すとはこのことかと私達はうつむき齒を食いしばり、長い長い道程を下を向いて黙って歩いた。収容所では、いずれ帰国できるのだらうと、帰国の日を楽しみに、毎日運動会やら相撲大会をしながら待機していた。いつの間にやら軍人や軍属等で二万人に膨れ上がった。

そんなある日、ソ連兵に連れられた日本人婦女子が五十人ほど現れた。長い逃避行で泥だらけ、今に

も倒れそうにやつれ切っており、女性は大坊主で男

装だった。背中の子は空腹で鳴き声も出ず、ヒーヒーと声を出すだけ。手を引かれた子は足元がふらふらで今にも倒れそう。亡霊ではないかと思われたほどあまりにもひどい姿に、戦争の本当の犠牲者はこの人達なのだと思います、涙が止まらなかった。我々が持っているものと言っても乾パンだけだったけど仕方がない、皆で出し合って少しは足しになればと思ったが、その後あの方達はどうなっただろうか。

十月九日。待ちに待った日が来た。私達が先発だ。二千名が威興の港から貨物船船底に押し込められ出港した。船は日本海を故国に向かっていているものと思っていた。ウラジオだ。おかしいと思った。貨車がずらりと待機している。武装ソ連兵がずらり、貨車に乗車を指示、乗車と同時に発車、シベリヤ大陸

だ。

十月十五日、イマン市で五百名下車。十月半ばなのに内地の二月以上の寒さ、一人一枚の毛布だけ。食事もメンタイ（干魚）、シヨウフ粉（経師職が使う粉）。臭くて食べられない。寒くて寒くて二人で抱き合い休もうとしたが全く眠れず三日間水だけでふらふら、鳥目になった者も出てきた。

貨車で三晩運ばれた十月十八日、マンゴーにあるラーゲル（収容所）に着いた。五百名が約三百名ほどに減っていた。そこはシベリヤの大平原で、我々は松の木の伐採を命じられた。平屋の古びたバラック五棟に収容された。周囲には真新しいバラ線が張ってある。入口で所持品は全部没収された。朝五時三十分に起床し（真っ暗）人員点呼。朝食は一握りのパンとスープ。徒歩で二時間かけて九時頃現場へ

到着。休む間もなく作業開始。十二時に食事（朝と同じ）。十三時作業再開。十七時作業終了。夜七時頃バラックに戻り夕食。消灯就寝。日曜日は休みとなっていた。

終戦そしてシベリヤ抑留三年三月その二

砂川町 宮岡 福太郎

（九十歳）

マンゴーラーゲルでの作業は松の木を切り六メートルの長さに揃えること。ソ連の監督は作業成果（ノルマ）を上げようと指示を変えた。ノルマを達成するために防寒外套、上衣を脱ぎ手拭いで鉢巻姿になった。この姿を見たソ連監督は両手を上げ大声で「ヤポンスキー（日本人）、ソルダート（兵隊）、トッコウタイ、ハラキリ、ニーハラショー（駄目）」

と叫び計画は中止、変更となった。

シベリヤはツンドラ地帯が多いため夏になると蚊の大群に悩まされた。マラリア罹患者が続出し私もその一人となった。二度目には入院となった。でこぼこの軍用道を六時間もトラックに揺られ、フラフラになったの入院だ。ソ連ではなぜか熱が出ると休ませてくれるが、それ以外はどんなに具合が悪くても休ませてくれない。イマン病院に入院した。

マラリアは割合に治りも早い。退院後はサンドワークラーゲルに移動し、道路建設作業をさせられた。マンゴーより更に奥地だ。退院幾何もなくチブスに罹患。^{りかん}高熱と下痢で意識朦朧^{もろうろう}とした。後から聞いたところでは、深夜、幻覚から皇后陛下が迎えに来てくれたと周りに言い残して水筒をぶら下げ、部屋を抜け出し徘徊した。同室のものが連れ戻してくれた

そうだ。再度馬とトラックに揺られてイマン病院に入院となったがこの日のことは高熱のため何も覚えていない。

病院では元衛生兵の島崎という人が病人の面倒を親身に見てくれていた。私もお陰様で平熱となり食欲も出てきた。入院期間は二十日程だった。軽作業となった。今でも島崎さんにはお礼を述べたいと思っている。そんなある日、「作業員二名」の要請があつて行つて見ると同じ病院にいた四十代くらいの日本兵の死体処理だった。別棟からソ連兵の指示で運びだし、車で約一時間程道なき道を行つたところに鉄棒で穴を掘つたが木や草の根で掘れず、兵隊も諦めて裸にした死体に草や枝を載せ、作業は終了した。明日は我が身かと思うと辛かった。

退院後、イマンラーゲルに移動。このラーゲルは

イマン市内にあり、他のラーゲルとは異なり電燈、暖房がある。作業は五カ年計画の建築現場。トラックで作業員の送り迎え。但し、日曜日の使役がある。特に十八ト有蓋貨車から、ばらのセメントを車外への吐き出す作業には十五人で交代に作業したが粉塵まみれになる困難な作業で代休も無かった。食料事情は改善されず皆いつも腹を空かせており、ユリの根と思つて何かの根を食べた仲間が死亡したことがあつた。私も蕎麦そばの花を食べて顔中腫れは上がったこともあるし、死んだ馬の肉をこつそり食べて空腹を満たしたこともあつた。

その後、イマンラーゲルは閉鎖、五百名の抑留者は二百五十名ずつに、前発（樺太関係）はナオトカへ、後発（衣部隊関係）はアルチョームラーゲルに移動。アルチョームラーゲルは囚人炭鉱と呼ばれ

ており厳しい労働と聞いていた。坑内作業は粉塵がひどく、吐きそうでも本当に辛く死んだ方が良いと思っただけだった。監督には何度も怒鳴られた。聞いた話しだが、陸軍大将の息子が松の木に一晩中つるされた（後日「暁に祈る」という歌になった）、また寒中水牢に入れられた者もあったとか。ここでは、我々の他にソ連の政治犯も収容されていた。女性や子供もいた。落盤事故もあり、ソ連の少年が埋もれ、助けたこともあった。

三カ月たって、二度の取り調べを受けた後、私を含めた十五人だけ突然帰国できることになった。ナホトカ港から朝嵐丸で、昭和二十三年十一月二十三日、舞鶴港に到着。緑豊かな懐かしい日本。この日のことを何度夢に見たことか。

私は幸運にも家族のもとに帰ることができた。し

かし、多くの仲間が故郷を夢見ながら亡くなり墓標も建てられずに今もシベリヤの凍土にたくさん残されている。私も仲間を埋葬した。埋葬と言っても凍土で堅く、ほとんど掘れないので、辺りの草をかぶせるくらいだ。最近も新聞で、シベリヤ抑留者の死亡者名簿が発表されたが、仲間の名前は一人も無かった。

平和都市宣言

世界は、いま、東西冷戦の時代が終わり、恒久平和と人類の永遠の繁栄を希求する新しい国際社会の形成に向かいつつある。

わが国は、世界で唯一の核被爆国であり、非核三原則を遵守し、あらゆる戦争の防止と核兵器のない世界平和を実現することは、すべての国民の願いである。

ここに、立川市は、戦争の惨禍を再び繰り返させないことを誓い、憲法を擁護し、市民が安心して暮らせる平和都市であることを宣言する。

平成 4 年 3 月 27 日

立川市

私の戦争体験記

初版第 1 刷発行：平成 28 年 1 月 1 日

初版第 2 刷発行：平成 28 年 1 月 2 日

第 2 版第 1 刷発行：平成 29 年 1 月 25 日

～立川市平和都市宣言 25 周年に際して～

立川市教育委員会・生涯学習推進センター

〒190-0012 立川市曙町 2-36-2

ファーレ立川「センタースクエア」 4 階